

新潟県の〈ことわざ〉

板垣俊一編著

県立新潟女子短期大学 板垣研究室発行

2006年10月

新潟県の〈ことわざ〉

板垣俊一編著

県立新潟女子短期大学 板垣研究室発行

2006年10月

まえがき

「利口は鈍にあたる」という諺がある。佐渡両津の古老によれば、学歴のある人、あるいは知ったかぶりの人は、世間知らずでかえつて愚鈍にも等しいという意味だという。学校教育で教えられる知識は、いまだ人々の知らない新しいものであり、どちらかと言えば普遍的なものであったから、「世間」と呼ばれる伝統的な地域社会で暮らしてゆくためにすぐ役立つものではなかった。「世間」でものをいうのは、先人たちが具体的な生活の中から生み出し、そして世の中に長く蓄積されてきた現実的な智慧であり、それは習慣や言い伝えによつて世代から世代へと継承されるものだった。諺もそうした言い伝えのひとつであり、学歴すなわち学問とは縁の薄かった民衆に対して「世間」でより良く生きてゆくための智慧を与えてくれるものだったのである。しかし、時代の変化とともに多くの人々がより高い教育を受けるようになり、そのうえさらに生活の急激な変化も重なつて、諺はしだいに日常生活から消え去つていった。今になつてみれば、地方の諺は民衆の生活史の貴重な証言といえるのだが、その多くは忘れ去られ、記録に残されている場合も意味すら分からなくなつた例が多い。

数年前から編者は県内の諺を蒐集してみたいと思ひ続けてきたが、古老を訪ねまわる時間もなく今日に至つている。本編は、今まで断片的に集められてきた民俗資料をもとに二次的に作成した新潟県の諺集である。編者にとつて現時点でとりあえず可能な作業として取り組んでみた。忘れ去られつつあるとはいへ、高齢の方々の中にはまだかろうじて昔の諺を記憶に留めている人もいると思う。研究の志ある人の参考になれば幸いである。なお、過去の諺の蒐集では意味を記すものが少ないため、本編では可能なかぎり意味を注記するようにつとめたが、的外れなものもあるかと思うので、読者のご叱正を仰ぎたい。

目次

凡例	3
本文	7
語句別ことわざ一覧(索引)	149
解説 — 地域の「ことわざ」について —	191

〈凡例〉

- 1 本編には新潟県内で発行された市町村史等に載せる諺のうちから、およそ二千余の諺を選んで採録した。
- 2 諺採用の基準はほぼ次の通りとした。
 - a 民俗生活の経験から生まれた生活の知恵(日常生活や人生の指針など)が簡潔な言葉で表現されていること。
 - b 説明しようとしている事柄が、比喩などを使って間接的に表現されていること。
 - c 五音七音、語の繰り返しなど、韻文的表現となっていること。
 - d なお、民俗知識を述べただけのものも諺と区別が付かない場合はできるだけ採用した。

- 3 収録した諺の多くは次の文献に載るものである。

- 貝瀬幸咲編『城内郷土誌』(六日町 1959)
- 加茂村誌編纂委員編『加茂村誌』(両津市 1963)
- 水沢謙一編『富曾亀民俗誌——富曾亀郷土誌(上)——』(1980 初出「富曾亀村の諺」『高志路』No.156 昭和二九) 長岡市史編集委員会、民俗文化財部会編『長岡市史双書No.12 聞き書き長岡の民俗(1)』(5)』(1989～90)
- 相川町史編纂委員会編『佐渡 相川の歴史・資料集九』(1981)
- 三郷地域婦人会編『ふる里に伝わる 諺、いいならわし、格言』(1987)
- 佐渡農業改良普及センター「ことわざ編集委員会編『ゆうらめ——佐渡くらしに生きることわざ集——』(2001)
- 渡辺行一著『越後南魚沼民俗誌』(1971)
- 田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』(考古堂書店、2006)
- その他、新潟県内の市町村史
- 『巻町史・資料編6 民俗』(1992)
- 『寺泊町史・資料編4 民俗・文化財』(1988)
- 『分水町史・資料編IV(民俗・人物)』
- 『村上市史・民俗編』下巻(1990)
- 『三条市史・資料編8 民俗』(1982)

『柏崎市史資料集・民俗編』(1986)など

(※このほかに著者が岩船郡山北町で聞き取り調査したのも多少含んでいる。)

4

文献名の略称は次の通りである。なお、全国で一般的に用いられていると思われる諺には文献略称を記さなかった。

(巻) 『巻町史・資料編6 民俗』

(荒川町) 『荒川町郷土史』

(佐渡相川) 『佐渡 相川の歴史・資料集九』および『ゆうらめー佐渡くらしに生きることわざ集ー』

(佐渡両津) 『加茂村誌』

(三条) 『三条市史・資料編8 民俗』

(山古志) 『山古志村史』

(山北町) 編者の聞き取り調査

(寺泊) 『寺泊町史・資料編4 民俗・文化財』

(十日町) 『水澤村史』民俗編

(上越三郷) 『ふる里に伝わる 諺、いいならわし、格言』

(新津) 『新津市史』

(新発田) 『新発田市史資料 第五巻・民俗』

(瀬波) 諸文献より

(清里) 『清里村史』

(村上) 『村上市史・民俗編』

(長岡) 『聞き書き長岡の民俗』

(長岡富曾亀) 『富曾亀民俗誌ー富曾亀郷土誌(上)ー』

(栃尾) 『栃尾市史』別巻

(南魚沼) 『越後南魚沼民俗誌』等

(柏崎) 『柏崎市史資料集・民俗編』

(分水) 『分水町史・資料編IV』

(豊栄) 『豊栄市史』

(六日町) 『城内郷土誌』

5 地方的な特色を持つ諺をできるだけ優先したが、かなり多くが全国で一般的に用いられている諺でもある。
☆印は、すでに過去の文献にも収録されている諺である。

6 解説では諺の分類私案を示したが、実際の分類となると難しい面があるので、本編収録の諺の分類はしなかった。

7 諺は、あいうえお順に並べた。

8 諺の中には「つんぼ」「めくら」など差別的な語句もあるが、過去の資料としてそのまま引用した。

9 後編に掲げた検索用の「語句別ことわざ一覧」は、諺中の語句を見出しにしたもので参考程度のものである。

なお、諺の意味の調査にあたっては次の方々のご協力をいただいた。

佐渡市相川の浜口一夫氏

長岡市小国の高橋実氏

南魚沼市の池田亨氏

新潟教育事務所生涯学習課荒木氏

両津郷土博物館学芸員渡邊清香氏

長岡市教育委員会寺泊分室の旭氏

南魚沼市城内地域開発センターの佐藤氏

※この他にも多くの方々にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- 松葉軒東井編『譬喻尽並三古語名数』(宗政五十緒校、同朋舎 1979)
太田全斎編『諺苑』寛政丁巳自序(富永牧太校訂、養徳社刊 1944)
熊代彦太郎著『俚諺辞典』(金港堂、1906)
藤井乙男著『諺の研究』(1929)
藤井乙男編『諺語大辞典』(日本図書センター 1969)
尚学図書編『故事俗信ことわざ大辞典』(小学館、1982)

相川のチャは飲まれんチャ

(佐渡相川)

「チャ」は会話の語尾に使う佐渡方言。チャに茶を掛けたもの。
「佐渡のチャは飲まれんチャだ」ともいう。

挨拶は時の氏神

☆

挨拶は対立している者同士が仲直りする良い機会になること。熊代彦太郎著『俚諺辞典』(1996)には「挨拶人は時の氏神」という諺をあげ、喧嘩争論の仲裁をする者を挨拶人といい、そういう人が現れたら有り難く思つて調停に応じ、すぐ和睦すべきだということ意味だという。

愛想づかしは金から起る

男女の仲も金次第であること。

愛想のない叔母のところより木の下の

(六日町)

「伯母のところへ行くより秋山へ行やれ」と同じ。

あいそもけそも尽きた

(山北町)

付き合いかねて、ほとほと見限つたときという。「あいそもけそも無い人」ともいう。「あいそもしよっぱけもない」ともいう。「愛想も小想も尽き果てる」の転訛。

開いた口に風吹かず

(柏崎)

「あつたら口に風をひかす」の転訛か。未詳。

相手変われど手前変わらぬ

☆

一人でさまざまな相手に対応する状態をいう。「相手カハレド主

カハラズ」(『諺苑』)

北風と雇い人は日いつぱい

(佐渡相川)

アイノカゼは佐渡の外海府では北風をいう。北風は一日中吹いても夜になれば止む意。千葉辺りには「日傭取と西の風は其の日限」という諺があるという(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1996)。

あいの風が吹いたら倉の戸を開けて待て

収穫前にあいの風が吹くと豊作だからという。

あいのこわ吹きやませのもと

(佐渡相川)

あいの風が強く吹くと次はやませの風になること。

あいまのんに美味いまずい言うな

(六日町)

食事どき以外の食べものについては贅沢を言うな意。

*あいまのんに:「あいま」は合間。「あいまもん」ならば合間食いの意で間食のこと。

青竹つかせて伊勢参り

替女の控に関する諺。男と関係するなどして控を破つた替女は青竹をつかせて追放されたのでこのような諺が生まれた。

青田と嬶褒める阿呆

「青田と子どもは褒めるな」ともいう。「青田」は、まだ稲が青々としている田。青田が立派だからといって豊作になるとは限らないから、自分の身内を褒めると同じように無意味なこと。緑の濃い稲を育てるのは肥料を施すだけだから簡単だという。

青田は馬鹿がほめる

ただ「青田はほめるな」ともいう。これから先、本当に実り豊かな稲になるかまだ分からないからである。

青田ほめる馬鹿

青菜の世帯はこんちの男に見せられない

青菜は茹でると思つた以上にかさが減ることをいう。「青菜男に見せな」(『譬喩尽』)。*こんち…けちな男。

☆

青物は新町で買え、魚は四谷で買え

柏崎で安く買ひ物ができる場所のことという。

(柏崎)

赤い花にもとげがある

赤子泣き泣き育つ

嬰兒はよく泣くものだという意。

(上越三郷)

赤子の指から乳が出る

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

(柏崎)

赤子は七面鳥

泣いたり笑つたり嬰兒の表情はさまざまに変わる事。

(長岡富曾亀)

赤恥かく

赤は強調。

(山北町)

赤飯に豆腐汁

ご馳走の意。

(柏崎)

明の先には馬鹿が立つ

夜道に行くには道を照らす提灯持ちが先頭になつて進まなければならぬが、その先に立つたのでは前方が暗くて進めないからである。

赤ん坊の後さがり

(柏崎)

秋あげ米高し

秋あげは収穫期のこと。新米の値段の高いことをいうか。

(長岡富曾亀)

秋あげ半作

「秋あげ」は、秋の収穫または収穫の祝い事についてもいう。順調に実りの秋を迎えても、収穫するころの天候によって米の収量が大きく左右されるから油断のならないこと。

(長岡富曾亀)

秋かます嫁に食わすな

*かます…魚。

(村上)

秋ごと昔の正月ばなし

昔話を語る時期について言う。昔話は収穫祝いや春の予祝祭に語

(長岡)

るべきものだ。「秋餅昔の正月ばなし」(秋餅Ⅱ収穫祭)ともいう。
*秋ごと…秋の収穫祝い。

秋鯖嫁に食わせるな

秋鯖は子が入っていないからだという(『新発田市史資料』第五卷・民俗)。それならば子どもを産んでほしいという願いからということになる。

秋タナゴ嫁に食わずな

(佐渡相川)

秋なかの鎌

農繁期の大事なときに怪我や病気などで人手を失うこと(『村上市史・民俗編』下巻)。

(村上)

秋茄子は雁の味

(佐渡相川)

雁にひけをとらないほど美味い意。

秋茄子嫁に食わずな

☆

「秋なすび嫁に食はずな」(『毛吹草』)。秋の茄子がことのほか美味しいこと。また一説に、秋の茄子は女性の子宮を害するといふ俗信があり、それ故に姑が嫁の体を気遣う気持からだともいふ。これと逆の「秋茄子嫁に食はせて七里追ふ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1909)という諺が嫁に対する姑の憎しみをいっただのだとすればそのようにも考えられる。

秋菜嫁に食わずな

(清里)

秋の朝照り、隣へ行くな

(寺泊)

すぐ雨になるからである。

秋の浦西質置き空

(寺泊)

漁に出られないから質屋へ通わなければならぬほど収入がなくなる意。*浦西…「秋、冬に吹く西北風」(『日本方言大辞典』)。

秋の雷

(巻)

秋の雷は北に鳴るから「北鳴り」を「着たなり」の意にかけ、着の身着のままであること。

秋の田の水嫁に飲ませるな

(上越三郷)

不明。

秋の日と娘はくれぬようでくれる

(長岡富曾亀)

秋の日は暮れないようでもすぐ暮れる。それと同じく他人の娘も申し込めばすぐ嫁にくれるものだ、の意。「くれる」が掛け詞になつてゐる。

秋の日と根性良しはくれんようでくれる

「春の日と欲しんぼうはくれるようでくれん」の逆。「根性良し」は、善良さを皮肉をこめて言ったもの。

秋のやませはヒカダを招く

(瀬波)

秋の北東風はやがて台風になる。

秋の山嫁に見せるな

(上越三郷)

「秋の山は美しく紅葉します。そこから、嫁に化粧させてはならぬ、贅沢させてはならぬ、という意味です」(三郷地区のお年寄りの話)。

秋の夕焼、鎌をとげ

秋の夕焼は翌日の晴天のきざしと考えられたことから、鎌を研いで明日の農作業の準備をせよという意。新潟県に限らず一般にいう。

秋の夕焼け、明日のもつけ

(六日町)

明日は雨になること。

秋蒨嫁に食わずな

秋の蒨はとくに美味しいので姑の妬みからこのようにいうのと(田中つとむ著『新潟のことわざ100話』)。佐渡の諺

秋山へ嫁やるな

(柏崎)

秋山は秘境の秋山郷。

商人と大風は家の中に入れるな

「東風(やませ)と商人はうちに入れるな」とも。行商人を家の中に入れると買ってくれるまで動かないことがあるからである。

あくとが化ける

(三条)

疑心暗鬼の意。*あくと…踵(かかと)。

悪友の笑顔より善友の怒り顔

(上越三郷)

あぐね餅搗いた

飽き飽きした意。アグネモチはアグレモチともいう。飽きることを「あぐねる」という。(小林存『越後方言考』より)

上げる子より下げる子がめごい

(六日町)

*上げる、下げる…神様のご飯について言う。*めごい…可愛い。

上路男と市振女

(青海町)

上路・市振は、西頸城郡青海町の地名。それぞれ美男美女が出るところという。「浦瀬女に桂男」と同類。「奈良男に京女房」(『譬喩尽』)型の諺。「越後女に上州男」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)という諺もある。

朝雨笠を脱げ

☆

朝雨はすぐ晴れる。「卯ノ時雨ニ笠ヲヌゲ」(『諺苑』)。「卯ノ時」は朝の六時前後。

朝雨せんだく

(栃尾)

朝の雨はすぐ止むので洗濯物を干しても差し支えないこと。

朝雨と女の腕まくりに恐れんな

(長岡)

いずれも恐れる必要は無い。「東の夕立と女の腕まくり」ともいう。

朝雨と女の腕まくり

「朝雨と女の腕まくりに恐れんな」と同意。

朝雨とノテツ嬢（かか）

（六日町）

「朝げの雨とカカの子くなしは、末ははだかになる」と同意か。 *ノテツ…不器用な。

朝雨に笠いらす

すぐ晴れること。

朝嵐（あせ）、昼あいのかぜ、夜南（みなな）

（上越三郷）

上越では「あいのかぜ」は海から吹く北西の風という。ある季節の風が順当に吹く順番をいうか。

朝生まれの稼ぎ手

（長岡富曾亀）

朝生まれの人はよく働く意の俗信。

朝雷と女の腕まくり

（山古志）

おそれることはない意。

朝霧は百日の日照り

朝下り（くだ）、夕方えいの風

（佐渡相川）

*下り…南風。 *えいの風…あいの風。東風。

朝蜘蛛は福の神、夕蜘蛛は盗賊

（佐渡両津）

朝げあることは晩げもある

（長岡富曾亀）

朝起（あけ）ることは晩にも起（おき）ること。

朝げの雨とカカの子くなしは、末ははだかになる（長岡）

家を切り盛りできない主婦を持つている家はいすれ貧乏になる意。

*すくなし…工夫や技量がたりないこと。

朝げのチャツカリ、姑のニツカリ

（長岡）

朝の天気と姑の機嫌は一時的。「朝げのチャカチャカ、姑ニツカリ」ともいう。「朝のけら／＼照（あ）は後雨となる」（『譬喩尽』）。

朝げのチャツカリ、嫁のニツカリ

（長岡）

朝げのテツカリ、昼メツコ

（長岡）

朝のいい天気は昼間は崩れて暗くなる。

朝げのんにそむくんでない

（六日町）

他所の家へ朝訪れて飲食をすすめられたら必ず食べるべきである意。「ヨウサリ（夕餉）のもんにソモク（嫌う）んじやない」と同類。（池田亨氏教示）

朝題目の夕念仏

（柏崎）

題目は日蓮宗の御題目、念仏は浄土真宗などで唱えるもの。信

念、節操、定見がないこと。

朝茶の茶柱は縁起がよい

朝茶は七里戻つても飲め

朝のお茶はそれだけの効能があること。

(長岡富會亀)

朝茶は二服

朝茶は一杯だけ飲むものではない意か。服が福につながることに
らの縁起。

(山古志)

朝茶は婢を質に置いても飲め

朝のお茶にはそれだけの効能があることを強調するもの。

(山古志)

朝茶四服

朝茶は縁起がいいとされる。

(山古志)

朝てつかりの昼めっこ

朝よく晴れた日の天気の変わりやすさをいう。

(長岡富會亀)

朝照り、嫁泣かせ

(佐渡相川)

朝虹、川越すな

朝、水が少なく容易に渡れた川も、上流で雨が降ると増水して
川向こうから帰つて来られなくなる。橋の無い小さな川を越えて

向こうの田畑や山へ仕事に行くような土地の諺。

朝虹は笠とる暇もない

すぐ雨になること。

(長岡富會亀)

朝虹は馬の鞍おき合わせられない

すぐ雨になること。

(長岡富會亀)

朝虹は雨、夕虹は晴れ

「朝虹は雨、夕虹は晴」(『譬喩尽』)。

☆

朝寝は貧乏の始まり

「朝起きは三文の得」の逆。

(山北町)

朝寝坊の宵つ張り

*宵つ張り：朝寝坊する者にかぎつて夜更かしする意。朝寝の宵
まどい。「宵ハリノ朝寝ボウ」、「朝寝坊ノ宵マドヒ」(『諺苑』)。

☆

朝の一服、夜の四服

朝の一服は夜の四服に相当する意で朝茶の効能を強調したもの
か。あるいは、お茶を飲むときの禁忌か。

(六日町)

朝のからから笑いは油断するな

姑の機嫌が良いときは嫁の用心。

(山北町)

朝のてつかり油断するな

(山北町)

*てつかり…日が照ること。 「朝のけら／＼照は後雨となる」
（『譬喩尽』）

朝のてつかり婿泣かせ

（山北町）

天氣の急変による婿の苦勞をいうが、また舅姑の機嫌が変わりやすいことにもいう。

朝のでらめき、笠を持って

（佐渡相川）

「朝のてつかり油断するな」などと同じ。

朝日のチャカチャカと女の腕まくり

（長岡富曾亀）

朝の上天氣はすぐ崩れること。

朝日のチャカチャカと貧乏者の嫁取り長持ちない

（長岡富曾亀）

朝日のチャツカリ、姑のニッコリ

朝冷えと嬾のしみつたれは後裸

（佐渡相川）

*しみつたれ…物惜しみ。

朝ふじ、夜繩

（村上）

田炉裏や釜に、朝はふじ蔓を焚いてはならないし、夜は繩を焚いてはならない意。火に関する禁忌。 *ふじ…葛の蔓。物を縛るロープ替わりに使う。

朝まらの立たねんに金貸すな

（六日町）

*まら…男の性器。

朝右夕左

朝は右耳がかゆく、夕べは左耳がかゆいと良いことがある。

朝右(耳)夜左良いことない

（上越三郷）

朝南、昼北風の夕嵐

（上越三郷）

前掲の「朝嵐、昼あいのかげ、夜南」とは季節が異なるときの順当な風の吹き方をいうか。

朝焼けは時化る

あざみの花の二つ咲きに小豆は蒔け

足元から鳥が立つ

☆

事のあまりに急なこと。「足もとから鳥のたつごとし」『毛吹草』。

鯨場の石

（佐渡相川）

鯨が群れ集まる所の石、すなわち人が寄り集まる所ではいろいろな情報が入って物知りになること。

明日の天氣は入り日を見よ、家の跡取りは二代子を見よ

*二代子…跡継ぎ息子。

小豆の火は馬鹿にたかせろ

(長岡富曾亀)

「小豆は無精者に煮させろ」と同じ。弱火でじっくり煮るのがよ
いからである。囲炉裏の火で煮炊きをした時代の諺。

小豆は嫌う友の露

小豆は間隔を離して植えよという意。民俗知識。

小豆は土用半作

土用までに蒔かないと半分の収穫しなくなる事。

小豆は無精者に煮させろ

(上越三郷)

小豆は弱火でじっくり煮るのがよいから、無精者に火の番をさせ
るのが良いこと。無精者はこまめに火を焚くこともしないから、
弱火になりがちである。

小豆は祭りの鐘聞きながら蒔け

(村上)

*祭…七月七日の村上大祭。

あずけた米は噛めぬ

(佐渡相川)

いくら有つても手元になければ役に立たない意か。

畦走^{あせ}ったも田走^{あせ}ったも同じこと

☆

「畦走^{あせ}るも畦走^{あせ}るも同じ」(村上)ともいう。どつちみち変わら
ないこと。「田をゆくも畦ゆくも同じ道」(『毛吹草』)。

畦もくれよう、田もくれよう

☆

自分の氣にいつた者を可愛がつて、どんな貴重なものでも与えよ
うということ(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。「田モヤラフ
畦モヤラウ」(『諺苑』)。

遊ぶ暇あつても仕事する暇ない

(山北町)

仕事を怠けて遊んでいる人を非難している。

暖かいようでも寒のうち、にらまぬようでも姑の目

(佐渡相川)

なかなか氣を許せないこと。

当たつてつぶれる卵作

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

頭で這うよう

(六日町)

多忙なさまをいう。

頭の黒い鼠

(山北町)

泥棒のこと。

頭を下げて叱られたことなし

(柏崎)

新しいセナコテは嫁に着せ

(佐渡相川)

*セナコテ…セナコウジ。荷を背負うときの背当て。新しいうち
は固くて着にくいから、嫁に着させて着やすくさせよという意。

当たらぬ蜂は刺さぬ

触らぬ神に祟りなし、と同じ。

(佐渡相川)

当たり前の十五日

昔、村では農繁期を除いて月の一日と十五日は休日だったとのことから、当たり前の意という(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)。

(長岡富會亀)

当たり前ができにくい

(長岡富會亀)

当たり前の肥やし米

当たり前である意をしゃれて言ったもの。

(佐渡相川)

あたんなさわんな山の神

崇らないようにそつとしておけの意だが、付き合にくい人に対していうことば。

(長岡富會亀)

仇口たたきの真口たたかず

つまらないことはよくしゃべるが肝心のこととなると何も言えない人のこと。

(佐渡相川)

悪口すれば主が来る

悪口を言うとその人が実際にくるものだという意。「うわさをすれば影がさす」と同じ。

(六日町)

暑さ寒さも彼岸まで

当て事ともつこふんどしは先からはずれる

予測は外れることがある意。*あてこと…推量のこと。*もつこふんどし…前後を縫つて紐を通したふんどしで、越中ふんどしの類。

☆

当て事と禪、先からはずれる

後足が先に立つ

次の「あとの鳥が先になる」と同じ。

(山北町)

あとの鳥が先になる

「後の雁が先になる」の類。後進のものが先輩を越えること。

(長岡富會亀)

後の喧嘩、先にする

前もつて争つておけば、後で事がスムーズに運ぶこと。

あとはアリゴの有合い

昔話より。「錢や品物を分け合う時、自分だけ多く取り、人には少しやつて知らぬ顔をしていること」(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)。

後はさんじよっぱらい

後始末をしないこと。「さんじよ」は三条(地名)という説もあるが未詳。『諺苑』には「後八三十バラヒ」とある。

☆

あととは梨の木

(村上)

後は無いこと。

あととは羽黒町

(村上)

後は知らない意で、客のもてなしなどにいう。
*羽黒町：村上市の町名。

あと見ず観音

後のことに責任を持たないこと。(中戸賢亮著『直江津ことば』1978)

跡見ずそはか

☆

何もかも投げ出して逃げて行くときの捨て言葉。九州平戸藩主松浦静山著『甲子夜話』巻二十一に「予が封内の俗言に、何事にも放言して顧みず捨去るときは、必ずアトミズソワカと言へり」とある。
*そはか：光明真言を呪文として唱えるときの末尾の詞。

穴掘り大工、ノミ一丁

(柏崎)

技術が未熟で木のほぞ穴ばかり掘らされている大工。技術が未熟な者をさげすんでいう。また「ノミ一丁」は、酒を飲むことだけは一人前だという皮肉の意味もかけてある。「下手の大工でノミ一丁」と同類。

兄の禪、手ぬぐいにもらう

(長岡富會亀)

未詳。兄に対する弟の地位の低さをいうか。『富會亀民俗誌』

富會亀郷土誌(上)―』に載せる。

あぶつてたたかれる

(佐渡相川)

さんざんな目に会うこと。

危ないところに金がある

(六日町)

儲けるには危険が伴うこと。

油紙に火のついたよう

赤ん坊が大声で泣き出したときなどにいう。

油をくれれば車が回る

(柏崎)

甘酒こぼした

(山古志)

昔話から。失敗した意。

甘酒に酔うたおかめ

☆

赤い顔でいつもにこやかな笑顔をしている女性をいう。

「オタフクノ 醴あまぎ二酔あまぎタヤウ」(『諺苑』)。

甘酸で食わんねい

(柏崎)

甘い考えや態度ではうまく行かない意という(『柏崎市史』)。

余らず過ぎず子三人

☆

子どもを持つなら三人がちょうど良い意。「負はず借らずに子三人」(『譬喩尽』)からの派生か。

余るは足らないのもと

(柏崎)

阿弥陀の光も金次第

阿弥陀も銭ほど光る

☆

仏も金をかけるほど立派になつて尊さがまさる意か。「あみだは
銭ほどひかる」(『世話尽』)。

網の目にも風が止まる

☆

網は穴が多いから風をよく通すように思われるが、実はそうでな
い。「網の目にも風溜る」(『譬喩尽』)。

雨イカ、照りバンジョウ

(佐渡相川)

「雨が續くと鳥賊がよくとれ、晴が續くとバンジョウがとれる」
(『佐渡 相川の歴史・資料集九』)。バンジョウはサンマのこと。

飴くれる

勝負のときなどにわざと負けてやること(山本修之助著『佐渡
民俗ことば事典』1987)。

飴買って笹くれる

(長岡富曾亀)

一般には人に言う憎まれ口として「飴買ったら袋やる」などがあ
る。越後名物の笹飴をもとにした地方的な言い換え。

飴で餅食うか、おばさと寝るか

(柏崎)

「都合のよいこと」(『柏崎市史』)という。 *おばさ…姉妹の
うち年若い方の娘。

飴なめさせられた

(柏崎)

飴の銭より笹の銭が高い

(長岡富曾亀)

中身よりも包みが高くつくこと。風袋負け。

雨晴らし夕顔汁

(分水)

夏の夕立と夕顔汁は、いつまでも暑い(熱い)。「雨晴らし夕顔粥、
鍛冶のヘツグリ、センチのベベ」(南魚沼)ともいう。

雨降りアワの日照りゴマ

(長岡)

粟は雨降りに良く育ち、胡麻は日照りに良く育つ。「黍粟しづく
の胡麻日照り」、「日和ゴマの降り小豆」ともいう。民俗知識。

雨降り八専、照りじつぼう

(栃尾)

八専の日は雨が多いとされる。佐渡では「八専入りに雨が降ると
雨が多い」とも言われる。 *じつぼう…暦の十方暮(甲申の日
から癸巳まで)か。

雨降り日かげ作

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

雨降り豆の日照り小豆

(長岡富曾亀)

鮎が飛べばおんころべが躍る

(佐渡両津)

*おんころべ：おたまじゃくし、またはメダカ。 参考―「鷹が飛べば糞蠅も飛ぶ―偉才俊傑のもの立身出世すれば、凡庸のもの亦之に倣はんとする喩」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

荒らける馬も使い手から

あら繩は帯にするな

(山北町)

死者を湯灌するときあら繩をなつて帯にしたからである。

新山男と森上女

(栃尾)

栃尾市の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

有り合い無り合い

(長岡富曾亀)

持つている者と持つていないものが互いに融通し合うこと。

*無り…：語呂合わせからの造語。

ありから食はまた坊主もない

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

有り難いのは善光寺様、うまいものは猪汁

(六日町)

蟻ごのだい持ち

(六日町)

蟻のように体は小さいが力持ちであること。「蟻の台持ち」ともいう。

蟻の一穴天下の破れ

蟻は五日の雨を知る

有りもんは出もん

(六日町)

金や物を持つていれればいざそれはそれを使うことになるものだということ。

歩く足にべとが付く

☆

熊代彦太郎著『俚諺辞典』(1909)には「歩あ行く足には泥がつく―事を為して却つて難ぜらるるごごとき類をいふ」とある。何か事を行なえば非難する者も出てくること。 *べと…：泥土。

ある手からこぼれる

☆

余ると無駄が多い意。「アルモノハ手カラコボル」(『諺苑』)。

有る時の米の飯

(山北町)

後の事を考えないで今だけを満足しようとすることをいう。

「あつときの米の飯、ないときの三度がゆ」ともいう。

有る時払いの催促なし

信用貸しによる借金についていう。

有る時までの催促なし

(山北町)

有るところには有る、無いところには無い

それが金というもの。

あるようでないものは金、ないようであるものは借金

無々とて有物は借金、有々とて無物は金(『譬喩尽』) ☆

有れば有り甲斐なし

(長岡富曾亀)

金は、有れば有つたで使つてしまつたら有難味もない(金は無いときこそありがたい意か?)

有れば邪魔だし、無くては困るこの餓鬼

(柏崎)

我が子のことを皮肉を込めていつたもの。

粟島の雨と隣のぼた餅は来ないことがない

(山北町)

天気は西の海の方から変わるのう。ぼた餅と降雨を結びつけた例に「南葉山の雨は隣のぼた餅より早い」(上越・三郷)がある。

合わせものは離れもの

☆

「合せ物は離れ物」(『譬喩尽』等)。

粟俵のふが切れたようだ

(三条)

可笑しくてたまらない意。

*ふ…俵の横に掛けて中身を固定す

る縄のこと。

粟粒五合

(山古志)

「数限らないこと」(『山古志村史』注)。

慌てて食う人、三年先に死んだ

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

慌て者は半人足

(柏崎)

軽率な慌て者は半人前の仕事しかできない意。

粟糠と嫁の難、たち止まね

(村上)

細かい粟糠は空中に漂つてなかなかおさまらない。それと嫁の難儀は一緒だという意。

合わぬ蓋もあれば、合う蓋もある

(柏崎)

粟の笠霧、守門の胴霧、弥彦の根霧

(栃尾)

粟ヶ岳、守門岳、弥彦山に懸かる霧の様子で晴天が知れるということ。長岡市や栃尾市の諺。

粟は他人に間引かせろ

(六日町)

粟の間引きは惜しまず思い切つて間引くのがよいこと。

粟一粒は汗一粒

(上越三郷)

作物を育てる辛苦をいう。

あんころ餅の綱渡り

(佐渡相川)

きわめて危険なことをいうか。

あんころ餅に砂糖つけた

(佐渡相川)

くどいこと。または「口の上手な人にたとえる」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)。

あんころ餅より心持ち

(三条)

物品より気持ちをもらったほうが嬉しい意。

按摩の揉み取り

(柏崎)

おだてるなどして、相手を気分良くさせておいて金品を乞い取ることらしい。

言いたい事はあした言え

☆

「言ひたひ事は明日言へ」(『譬喩尽』)。発言に対する熟慮の必要性をいうか。

言い出した奴がふった奴

(荒川町)

屁(おなら)のこと。

言いなり権兵衛

(六日町)

主体性が無く、人の言いなりになる人を批判的に言ったもの。

いいめしまめだが、節句のマンマ

(長岡)

いつもカテ飯ばかり食べているので節句の白米が恋しい。「いいめ

し」は米飯のこと。「米飯まめだか節句に食たまま」ともいう。

「まめだか」は元氣かという意味。「おお、白米のおまんまよ、お目にかかるのは久しぶりだが達者であったか、と心はずませてもらもしく呼びかけたのである」(剣持隼一郎「ことわざお国めぐり」3 新潟の巻、『言語生活』1978 No.318)。

言い訳は口ごたえ

(清里)

家柄より芋幹

(荒川町)

家柄の良さを誇るだけで役に立たない人間より、芋幹の方がまだまじだの意。イエガラとイモガラは語呂合わせ。芋幹は里芋の茎で食べることができる。一般にもいう。なお、反対に「芋幹より家柄」ともいう。

家柄より鍬柄

「家柄より芋幹」に同じ。「柄」を掛けてある。

家の身上は嬢が持つ

(山北町)

家計は妻の責任であること。

言えば言いで、飲めば飲み得

(長岡富會亀)

言い立てれば言い立てるほど得をし、酒を飲めば飲んだだけ得をする情況をいう。

五十沢女に城内男

(六日町)

イカの甲より年の功

イカの手は喰うてもその手は喰わぬ

*イカの手…イカの足。語呂合わせである。

(佐渡両津)

イカ場夕飯

「正月十一日の晩飯が遅いと一年中の出漁が人より遅れること」

(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)。その日に限って早めの夕飯を食べるといふ。

(佐渡相川)

生きているもんの因果

この世に生きていける以上は仕方のないこと。

(長岡富會亀)

生きもんに餌絶えず

「命有れば食あり」、「生あれば食あり」(『譬喩尽』)の類。

(六日町)

いぐいぐの長居

帰る帰ると言いながら長居する客。「いぐいぐの長つ尻」ともいふ。

(長岡)

池の鯉が水の上にはねると天気が悪くなる

(山北町)

意見と餅はつくほど練れがよい

「人の言途と餅はつく程よし」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)ともいふ。一般には「意見と餅はつくほど練れる」といふ。他人

☆

の意見は良く聞いたほうがいいこと。

犬子が大糞に向かったよう

(六日町)

仕事が多量にあるとか、臭かったり汚かったりして処理が面倒な事に遭遇したときにいふ(城内地区古老の話)。

犬子が酒に酔ったよう

(六日町)

意識朦朧として、生まれたばかりの子犬の足取りのようにフラフラと千鳥足で歩いている人の様子をいふ(城内地区古老の話)。

石切りの鞆丸、御老中の判

(六日町)

堅いことの譬喩といふ。

石車に乗つても口車に乗るな

(柏崎)

おだてられて調子に乗ることを戒めたもの。*石車…道の小石を踏んで足が滑ること。

石飛んで碁に勝たず

☆

囲碁に関する諺であるが、未詳。熊代彦太郎著『俚諺辞典』(1906)には「石飛んで其碁に勝たず」とし、囲碁のとき打とうとした石が思わず手から飛び出すことがあるが、そのような不注意では勝負に勝てない意か、或いは「石取りて其碁に勝たず」の転訛かといふ。

石の印判

☆

「石に印を押すやう」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)ならば、きわめて確実なことの譬え。

石橋をたたいて渡らぬ

(長岡富曾亀)

「石橋をたたいて渡る」のもじり。きわめて臆病なこと。

医者が枯れた

(三条)

すべての医者に見離され、あとは神仏に祈るしかない状態のことという。

医者が取らにや坊さんが取る

(佐渡相川)

医者が救ってくれなければ、死んだ後では僧侶が救ってくれる意。

医者、坊、カボチャ

実がはいつてからはじめて本物になるもの。成り立てはまだ未熟。

石原に薬罐引きずるようだ

☆

歌が下手で声が悪いことをいう。「石原ヲ薬罐ヲ引」(『諺苑』)。

石を投げてても届かない

(長岡富曾亀)

能力や力が及ばないことの譬え(田中つとむ著『新潟のことわざ』一〇〇話)。

意地っぱり強い強つく棒

(柏崎)

意地を張って強情な人をいう。*強つく棒…ごうつくばり、の転訛か。

居候の大食い

(柏崎)

痛い目も薬だ

(柏崎)

痛い目にあうのも後々の教訓になる意。

戴く物なら夏の小袖でも

☆

「戴くものは夏でも小袖」ともいう。「クタサルモノハ夏毛御小袖」(『諺苑』)。

イタチみめ良し、猫のみめは杓子

☆

「わざと反対にいうことは」(『柏崎市史』)。鼬は顔が醜いものと決まっていた。杓子は顔が醜いこと。「融容貌よし猫の顔杓子」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

板屋の乞食は餓死ぬ、くず屋の乞食は金貯める

(柏崎)

*くず屋…茅葺きの家。板屋根よりも質素である。

一がそければ、二がそける

(分水)

最初がだめだと次々にうまくゆかないものだ、の意。

一工面、一稼ぎ

(荒川町)

仕事にかかるにはまず工夫が大切であること。

一香、二花、三茶、四飯

仏前に供えるときの重視すべき順序という。

一合雑炊、二合粥、三合飯、四合団子、五合餅

(荒川町)

一合の雑炊の量だけ粥を作ろうとすれば二合の米が必要で、普

通のご飯ならば三合……となること。「一合雑炊、二合粥、三合飯、四合餅、五合そば」(六日町)ともいう。

一合雑炊に二合粥、三合かて飯に四合団子、五合おこわに六合餅

右と同じく、米を節約する目安という。蒲原地方の諺。

一種、二肥え、三作り

(上越三郷)

穀物や野菜の栽培にとつて大事なものの順。

一道中、二機織り

(六日町)

『城内郷土誌』に「〇〇の練れ加減」と説明。

一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿

(長岡富會亀)

一度は見るべきものであるが、一度三度と見るものではないこと。すなわち一度も経験しないのは無知であるが、たび重なつては愚かなこと。

一に看病二に薬

病気を治すには薬よりも看病が大切であること。

一日遅れの千日遅れ

一日の遅れが、取り返しのつかないほど深刻な遅れを招くこと。

一に名医、二に薬

病気を治すには薬よりも医者が大切であること。

一年、三年、十年、一生

(六日町)

仕事や習い事また夫婦関係などは、一年目、三年目、十年目が節目であり、十年辛抱できればその後は一生のものとなる意(城内地区古老の話)。

一の馬鹿は子をほめる、二の馬鹿は嬬ほめる

(佐渡両津)

身内のことを卑下するのが日本人の美德。

一病長寿

(上越三郷)

一つぐらい病気を持っていた方がかえつて長寿をまつとうできる意。

一富士、二鷹、三茄子、四葬礼、五雪隠

☆

良い夢の順。「一富士二鷹三茄子」(『譬喩尽』)。

一ほめ、二こなし、三ほれ、四かぜ

(長岡)

くしゃみの俗信。「こなし」は、けなし。悪口を言うこと。

一ほめ、二讒訴ざんそ、三惚れ、四風邪

新潟市や京ヶ瀬村などという。

一万俵一文しても金がなけりや買えぬ

(佐渡相川)

*一万俵一文しても……一万俵がたった一文だとしても。

一も取らず二も取らず

☆

二つのものを同時に追つてどちらも得ることができない結果に終わること。虻蜂取らず、の意。「一も取らず二も取らず」(『譬

諭尽』。

一文銭は鳴らぬ

『諺苑』に「一人喧嘩ハナラヌト云意ナリ」とある。

☆

一夜三合

(上越三郷)

秋の災害を恐れて稲を早刈りしてはならぬと諭した諺で、収穫期近い稲は一夜に三合も多く実り続けるから早刈りするなの意という(三郷地区のお年寄りの話)。

一家に子どもと同じ年の動物を飼うな

(山北町)

死を忌んでのこと。

一ヶ千覚性寺

(佐渡相川)

*いつけ：たくさんの意。 *覚性寺：相川にあつた無宿人の寺。現在は無宿寺。意味は未詳。

一切食う役、仕事はせん役

☆

怠け者のこと。『諺苑』に「一切クフ役―仏語ノ一切苦役ヲ食事ノ食ニイヒナシタルナリ」というように仏典の「一切苦役」をもじつたもの。参考―「懈怠の者は食を急ぐ」(『譬諭尽』)。

一升どつくりは寝ても三合

(佐渡相川)

大きな徳利は転んで横になつても全部は流れでない。裕福な家は家運が傾いてもまだかなりの財産がある、といった意か。「一升徳利」コロンでも合(三条)ともいう。

一升飯炊くな

(山北町)

葬式するときなどは丁度一升の米を持参して行くからという。

一杯茶は仲たがい

(長岡富曾亀)

一杯茶は出すな

帰れの合図になるから。「一服茶をのむな」ともいう。

いつばい入つた徳利は鳴らん

(長岡富曾亀)

心に余裕のある人物はつまらぬことで不平不満を言わないこと。或いは金持ちは鷹揚であること。逆に、小人物はなにかにつけて自慢を吐き高言するものだという意の「樽にみたざる酒は音がする」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1999)といった諺もある。

一杯、人、酒を飲み、二杯、酒、酒を飲み、三杯、酒、人を飲む

☆

「始めは人酒をのみ、中比は酒が酒をのみ、終りには酒人を飲とかや」(西川如見著『町人囊』)。

一杯もんは悪い

(山古志)

何でも一杯だけのものは良くない意。

いっぺん死ねば二へん死なぬ

(長岡富曾亀)

いつまでもあると思うな親と金

いつまでも無いと思うな運と災難

(長岡富曾亀)

いつも正月

のんきな人をいう。『毛吹草』にも出ず。

☆

いつも月夜と米の飯

いつもそうだと良いということ。「月夜に米のいひ」(『毛吹草』)。

☆

「いつも九月に常月夜、米の飯に菜汁」(『譬喩尽』)

いつも鳴く鳥かきす

小言ばかりいつている人のこと。

いつも六月

(長岡富曾亀)

「いつも正月」と同じ意か。未詳。

従兄弟と犬の糞は羽田の浜にある

(佐渡相川)

「従兄弟と犬のくそはどこにでもある」、また次項の「いとこはとこは道端の犬糞」などと同じ。羽田は、相川の地名。羽田浜では江戸時代に相撲や芝居の興行が行なわれた。

従兄弟同士は犬の糞より悪い

(三条)

相談相手にならぬ意という。

いとこはとこは道端の犬糞

☆

「従兄弟はとこは他人も同様」などともいい、従兄弟や再従兄弟はたくさんいるものだが、頼りにならないという意味で一般にもいう。*はとこ…またいとこ。再従兄弟。「イトコハトコハトブノハタニモアル」(『諺苑』)。

愛し子は木尻に置け

子どもが可愛いと思つたら甘やかしてはいけない意。

*木尻：囲炉裏には一家の主人が座る横座、客が座る客座などが決まっていたが、薪を置く場所は最下位の席で「木尻」といつた。

糸つけがまがる

(長岡富曾亀)

不機嫌なこと、という。

犬が川端走る

(長岡富曾亀)

「犬の川端歩き」と同じく、いくら走り回つても甲斐がないこと。餌が流れていつた後で、川端をうろつく犬の様子を比喩にしているという。

犬と猫の喧嘩にニヤンワン

(長岡富曾亀)

*ニヤンワン…似合わぬ、の意をかける。

犬になるなら、オオドコの犬になれ

☆

*オオドコ…裕福な家。「狗ニナルトモ大所ノ狗ニナレ」(『諺苑』)。

犬になるなら大屋の犬になれ

☆

犬に縄張り

誰にでも言い分があること、という。

(柏崎)

犬にもくれず柵にも置かず

物を惜しんで誰にもやらす結局腐らせてしまうこと。

(六日町)

犬にも吠えられると腹が立つ

無視しても良いようなつまらん奴でも、あまりがみがみ言われると腹が立つものだ、という意。

(佐渡相川)

犬の糞の高上がり

身分をわきまえないで上座につくこと。

(長岡)

犬の糞で敵とる

卑劣な手段で報復すること。

犬の糞の化け物

「人に嫌われている者のこと」(『三条市史・資料編8 民俗』)。

(三条)

犬の逃げ吠え

弱い者が喧嘩に負けて罵りながら逃げて行くときなどの形容。

(柏崎)

犬の蚤で噛みあてる

まぐれ当たり、の意。「狗の蚤の噛み当て」(『譬喩尽』)。

☆

犬の道を覚えたよう

「馬鹿の一つ覚え」に同じ。

(六日町)

稲の穂と命は長いほど良い

稲は土で作れ、麦は肥えで作れ

「稲は地力でとれ、麦は肥でとれ」とも。稲作では堆肥を施すことで地力が増し、良質な米が多くとれる。麦は逆に基肥や追肥をやらなければ収量が上がらない。

(上越三郷)

亥の子の餅は石で搗け

佐渡には関西の風習が入っていて、無病息災や豊作を祝う亥の子餅の行事が行なわれていた。*亥の子：おもに西日本で行なわれる十月亥の日の行事。田の神が帰る日とも言われ、餅を搗いて祝った。但し、「石」を量の単位とすると余りにも多い。「亥の子搗き」と称して、この日子どもたちが縄に付けた石で地面を打つ行事もあり、「石で搗け」の意味が不明。

(佐渡相川)

亥の子餅と有卦の餅は外へ出すな

家内で食べないと幸福が逃げるからという。有卦は陰陽道という幸運の年回り。

(佐渡相川)

猪の向こうやぶり

向こう見ずで、がむしやらにつき進むこと。

命に替える宝なし

☆

「身にまさる宝なし」(『北条氏直時代諺留』)。

今ないた鳥がもう笑う

(山北町)

泣いていた子がすぐ機嫌を直して笑ったときなどに冷やかしていう。

鋳物師話して踏鞴たたらにかけられた

(柏崎)

鋳物師は、金属の鋳物を造る職人。踏鞴は溶鉱炉に風を送るふいこ。人と話して心を入れ替えさせられることか。

芋種盗んでも子種盗むな

(上越三郷)

姦淫は盗みよりも悪い意。*子種盗む：不倫をして子を宿すこと。

芋の誕生日、十月十三日

(上越三郷)

その日を過ぎると美味しくなるという。民俗知識。

いやだいやだは、女ごのくせ

(長岡)

女は好きでもいやだというのが口癖。江戸時代の富本繁太夫の日記『筆満可勢』に、「ダイキライダ」が新潟の芸者の口癖とある。現代では誤解を生む諺である。

いやで幸い、好かれちゃ困る

いやで承知が何なるば

(長岡富曾亀)

嫌ならばどうして承知することができようかの意で、男女の事柄

などに言う。

いやならさらおけ皿やのカボチャ、種蒔いても千もなる

知つていながら何を聞かれても教えない人のこと、というが不明。

入り日の雨は七日続く

入り日よければ明日天気

入り船に良い風、出船に悪い

同じことでも立場によつては利点になったり欠点になったりすること。何にでも良いということはあり得ない意。一般にもいう。

煎り豆と娘十七はあるうちは手を出す

(長岡富曾亀)

イルカの番神まいり

(柏崎)

春、イルカの群れが鰯を追つて柏崎の番神沖にやつて来ることをいう。

色が黒くて茄子マンジョ

(長岡富曾亀)

色の黒いことの比喩か。*マンジョ：女性の性器。

色気と盗人氣ぬすまじのない者はない

「大工おこころと盗みぬすころの無い人はいない」ともいう。

色の白いは七難隠す

「色の白ひは七難隠す」(『譬喩尽』)。女性の容貌はなんといいつても色白であること。

☆

困炉裏にかじり付いても死んではならぬ

(柏崎)

困炉裏はたの弁慶

内弁慶に同じ。

(佐渡両津)

色を見てあくをさせ

染め物をする時に灰汁を加えるタイミングがあることから、状況を見て判断せよとの意。『毛吹草』にも出ず。*あく:灰汁。

☆

祝い事は延ばせ、仏事は取り越せ

祝い事は延期しても良いが、仏事は期日よりも早めに行なった方が良い意。

鯛煮た鍋

くさい仲という。縁のある者同士のこと。「鯛ヲニ夕鍋―遠キ縁ノアルヲ云」(『諺苑』)。

☆

鯛料理に包丁使うな

言わば語らば浄瑠璃平家

(佐渡、海府)

悲しさつらさを感じて、せつないときに言う。文弥節や説経節など佐渡で盛んだった悲劇的な語り物を例に出していたもの。

因果の提灯、盆でも下がらん

(分水)

未詳。不運な死者は弔つて貰えないことか。

上野市、魚買い

(十日町)

「上野市、柿買い」ともいう。上野市は十日町市(旧川西町)の上野に立つた十一月十五日から七日間の歳の市で、野菜・呉服・青苧・四十物を商い、正月の買物客で賑わったという。類似の諺に「千手市、桃買い」がある。

上の旦那、下の乞食

(六日町)

「上の旦那、下の乞食」。世の中、上を望めばきりが無いが、また下には乞食もいることを思えば、今の境遇で我慢できるものだ、という意(城内地区古老の話)。

上見るより下見て暮らせ

「上」は自分より裕福な人、恵まれた人のこと。「下」はその逆。

上見れば際限がない

暮らしの望みについていう。

魚ごころあれば鯛心

(佐渡相川)

魚心あれば水心、と同じ。

魚、蛸三年

(柏崎)

「烏賊、蛸三年」ともいい、天然痘が治った後でそれを食べてはならない期間をいう。俗信。

浮世の馬鹿は起きて働く

(柏崎)

「寝るほど楽はないのに起きて働く馬鹿もある」と同意か。あくせく働く者を皮肉った諺か。

鶯の初鳴き

有卦も祝わにや無卦となる

(佐渡相川)

有卦の幸運もお祝いしないと逃げること。

兎の毛で突いたほど

(佐渡相川)

「僅かなこと、小さいこと」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)。

丑年は不作なし、子年に豊作なし

牛に乗って犬に吠えられるよう

(六日町)

まったく怖くない意。

牛の尻を洗うたようだ

牛の尻はいつも汚れているので、さつぱりしたことのたとえ。

牛の小便十八町

☆

長つたらしいこと。なお、「小便一町」といえば小便している間に

一町の距離を歩いて進むことができる意。『諺苑』にも載せる。

牛の綱をまたぐとお産が重い

丑の日に葬式を出すな

死人が続くからという。禁忌。

牛も人も七回食うて七回泳げ

(佐渡相川)

「七日盆には七遍食うて七遍泳げ」(『佐渡腰細の民俗』)と同じ。盆の入りの七月七日の習慣。

後ろ足で砂を蹴る

(長岡富曾亀)

「後足で砂をかける」とも。去るときに腹いせするような場合にいう。

牛を売って馬にした

(佐渡両津)

「牛を売って馬を買う」ともいう。「牛を以て馬に易ふ」の転訛であろう。劣った方を捨てて良い方に乗り替えたこと。

嘘つき盗人の始まり

(山北町)

嘘つき世渡り上手

(長岡富曾亀)

真面目一筋な人よりも、適当に嘘をつける人のほうが世間をうまく渡って行けること。

嘘と坊主の髪はゆったことがない
(山北町)

「ゆったこと」には、言ったことと結ったことが掛けてある。

嘘の三八

(寺泊)

三のものを八にも言う嘘つき。

嘘の七不思議

(山北町)

七不思議にも嘘がある。

打たぬ太鼓は鳴らん

原因がなければ結果もない意。

卯辰の雨は巳にかかる

卯・辰の日に降り出した雨は翌日の巳の日まで続くの意でもあるが、災難が身に降りかかることを譬えたものともいう。

内器量より外器量

(山北町)

家に居るときの態度や身だしなみよりも、世間での態度や身だしなみが大切である意。

内蹀は蚤にもつませるな

(佐渡相川)

内蹀を蚤にくわれると良くないという俗信。一般に「男の向う臍は蚤にも喰わすな」(『譬喩尽』)ともいう。

うちの身上は嬢でもつ、嬢の腰巻は紐でもつ

(長岡)

家計は主婦の才覚で良くも悪くもなること。後半の「嬢の腰巻は紐でもつ」は語呂合わせ。

家の中に女房二人は要らない
(山北町)

内弁慶の外すくだまり

(長岡)

*すくだまり…すくむこと。小さく縮むこと。

内弁慶のそとみそ

(山北町)

*そとみそ…人見知りすること。また、泣きべそをかくこと。ミソは軽蔑の意。

内弁慶のそと猫

(南魚沼)

打ち豆汁と雪道は後ほど良い

「雪道と魚の子汁は後ほどよい」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』)「〇〇」などともいう。

打ったとこの腫れるように

「直ぐさま結果の現はることをいふ」(小林存『越後方言考』)。

美しいも皮一重

(長岡富曾亀)

美人だといつても皮膚の皮一重だけのこと。人間、中身はみな同じ。

打つも舞うも一人でする

(佐渡相川)

「歌フモ舞モ独舞」(『諺苑』)のもじりか。能楽の盛んな土地ら

しい諺である。 *打つ…太鼓や鼓などをたたたくこと。

独活うじに種米

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

(佐渡相川)

うなごうじの高あがり

「犬の糞の高上がり」と同じく、身分をわきまえない僭越な行動をいう。 *うなごうじ…便所の蛆虫。

うまいますいは塩加減

(長岡富曾亀)

美味しいもの食うた後は油断するな

(三条)

うまいもんは宵に食え

うまい物は貯えて置いて味を悪くしたり腐らせるよりも、その日の宵のうち早く食べる方がよい意(熊代彦太郎著『俚諺辞典』196)。「美うまいモノハ宵ニクヘ」(『諺苑』)。

☆

馬があつても鞍がなきや使われん

(佐渡相川)

うまく行つて当たり前

(長岡富曾亀)

馬首相談、和木弁だ

(佐渡両津)

馬首・和木は、何れも佐渡両津の地名。「和木と馬首は一村で他所だ。川が一筋無か良かる」という俚語もある。未詳。

馬好きには馬の話

馬の糞の川流れ

(南魚沼)

各自勝手に振舞うことという。

馬の糞、やち下駄で踏んづけたようだ

(三条)

器量が悪いことをいう。

馬の背に蒟蒻こんじやく

優柔不断な人のこと。また、揺れてぶるぶるすることの形容。

馬の踏んだミミズを蟻子が巻く

(南魚沼)

踏んだり蹴つたりのひどい目にあうこと。

馬は馬づれ牛は牛づれ

それぞれに似合った相手が良い。

馬、蛇の夢は良い、栗の夢は悪い

(上越三郷)

馬持たずに馬かすな

(六日町)

「子持たずに子くれんな」と同類。馬を持ったことが無い人は馬の扱い方をよく知らないからである。

生まれ在所は訛りで知れる

生まれた時から八十

(六日町)

自分の能力を謙遜するという表現という。ただし、他人を評するときには無能の意となるか。

生まれる先の腰巻

(佐渡相川)

出産の禁忌。

うみ柿づくし柿をとぶらう

☆

外見だけで判断する愚かさをいう。腐れそうな膿み柿とよく熟した柿は見た目は似ているが雲泥の差。ただし、「同病相憐れむ」の意ともいう(『柏崎市史』)。『諺苑』には「熟柿ノウミ柿」とある。

海霧は雨、山霧は晴れ

(佐渡相川)

海に刃物落とすな

海の神の怒りをかうからという。

海のごとは船子ふなこに問え、山のごとは樵夫きこりに問え

海の物は塩で殺せ

海産物は塩で処理せよ。

海は手でふたできぬ

「人の口に戸は立てられぬ」と同じ。

(三条)

海腹川背

海の魚は腹から焼き、川魚は背から焼くのが良いこと。

(寺泊)

梅漬けは手を選ぶ

梅漬けの味は漬ける人に左右されること。

浦瀬女に桂男

(長岡)

浦瀬・桂は、長岡市の地名。浦瀬には美女、桂には美男が出る意。逆にして「桂男の浦瀬女」ともいう。

うらみは水に流し恩は石にきざみ

(上越三郷)

他人に対する恨みは出来るだけ忘れ、受けた恩はいつまでも忘れないようにすべきだ、の意。

売り手に買い手

値段の交渉など、商売は売り手買い手の双方で成り立つ意。

売り物には花咲かせ

☆

商品は飾り立てるのが良い。「売物ニ花ヲ飾レ」(『諺苑』)。

売り物は毛むしれ

(柏崎)

「売り物には花咲かせ」と同じか。

浮気と乞食は止められない

(上越三郷)

「(うわ) き…(こじ) き」と脚韻をふんだもの。

浮気者に子なし

うんだ柿がつぶれたとも言わん

☆

なんの消息もないこと。また、何も返答しない者を批難している。

「うんだ鼻がつぶれたとも言わねえ」(六日町)。「膿だ物が潰れたともいぬ」(『譬喩尽』)。

生んだ子より育ての子

生んだだけの子より、他人の子であつても手塩にかけて育てた子のほうが可愛いこと。

雲洞庵の土踏んだか

(南魚沼)

雲洞庵は旧塩沢町にある曹洞宗の古刹。山門を入つた石畳の下には数千巻のお経があり、そこを踏むとおのずから仏法が身につくと言われ、一度は参詣すべき寺院とされていた。次項のように関興庵と対にして称えられる。南魚沼地方の諺。

雲洞庵の土踏んだか、関興庵の味噌なめたか

(六日町)

関興庵は臨済宗の古刹で、雲洞庵と同じく旧塩沢町にある。

運と果報は生まれつき首にのつている

(長岡)

運鈍根で金持ちになる

(佐渡両津)

*運鈍根：事を成し遂げるのに必要な三つの条件、幸運・愚直・根気のことという。

運は天にあり、ぼた餅は棚にあり

☆

「運は天にあり」と同意。「ぼた餅は棚にあり」は語呂合わせの附加。「命八天二在ホ夕餅八棚二在」(『諺苑』)。

運は天に任せる

うんぶてんぶ

「運否天賦」の意で、思いがけぬ不運に見舞われた時などに使うという。(川合和江著『寺泊のことは』1980)

えくぼ千両

えくぼには千両の値がある意。

餌の銭かぶり

(柏崎)

「下宿の漁師は餌の銭まで負担してしまう」(『柏崎市史』)意と
いう。

得たとき食わねば食う時やねえ

(六日町)

「ご飯と言つたら火事より急げ」とか「ご飯と言つたら鎌でも置け」と同じく、食事の大切さを言つた諺ではないか。(池田亨氏
教示)

枝またただせば限りがない

(佐渡両津)

薄い血縁はたどりだすとときりがない意。「特に佐渡では親戚でないと思つていた人でも、話を聞くと何かしら遠い親戚に当たつていることがある」という(渡邊清香氏)。*枝また…遠い親戚のこと。

越後女に上州男

昔、越後から上州へ出稼ぎに行つた女たちがそこで見そめられて結婚する例があつたことから生まれた諺だろうという(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)。パターン化された表現の一つ。

越後のガンな食わんねえガンだ

越後方言で代名詞に使う「がん」(もの)を「雁」の肉に掛けて皮肉つたもの。

越後の食い倒れ

(長岡)

越後人は食べ物に金を費やす。

越後のつれ小便

(長岡)

越後の者は人と一緒に行動しがちであること。「越後の連ればり」(『城内郷土誌』)ともいう。「ばり」は小便のこと。なお、『諺苑』に「関東ノツレ小便―備後ニテハ備後ノ連小便ト云、石見ニテハ石見ノ連小便ト云…」とあり、越後以外の各地にある諺である。

越後の昼晴れ

(長岡)

越後の雨は昼間になると晴れる傾向にあること。

越後の人は肋骨三本足りぬ

(上越三郷)

江戸の人が越後の人を馬鹿にしていった語という。

越後の一つ残し

「越後の食い残し」ともいう。会食のときなど、最後に一つだけ残つた食べ物には誰も手を出さない傾向がある。

越中禪、向こうからはずれる

「当て事ともつこふんどしは先からはずれる」と同じ意か。

縁あれば千里

縁があれば遙か遠方の人とも夫婦になることがある意。

縁起船乗り酒屋者

(寺泊)

漁師と酒造りの杜氏には縁起を担ぐ者が多いこと。

縁起船乗り博奕こき

(寺泊)

漁はいちかばちかの賭けと同じこと。

縁談話はおかのえ様に限る

(山古志)

*かのえ…庚。「おかのえ様」は庚申講。

縁の下の磐持ち

(長岡富曾亀)

縁の下の力持ち。*磐持ち…むかし若者たちが大きな石を持

ち上げて力くらべをした習俗。

縁は艫綱、子は碇

夫婦の關係は船を岸につなぎ止める艫綱のようなものだが、生まれた子は船をしっかりと停泊させる碇のようなものだ、の意。

遠慮と親のもんはするもんでない

(六日町)

人の厚意は遠慮するものでない、親とのセックスはするものでない、の意。(城内地区古老の話) *親のもん…親の性器。

遠慮飢し伊達寒し

☆

遠慮して食べ物に手を出さないでいるとお腹がすくし、薄着で見ればばかり気にしていると寒いものだ、の意。「伊達の薄着」という諺もある。「賢者卑墮涙し、伊達寒し」(『譬喩尽』)。

おいたおいたの大くらい

(長岡)

もう終わりだと言いながら大食する客のこと。

負うた子に、抱いた子

(佐渡相川)

我が子はどれも可愛い意か。

*たげいた…手で持つ意の方言。

「たがく」ともいう。

負うた子より抱いた子

☆

「負ふた子より懐ひた子」(『譬喩尽』)。縁の遠い者より、縁の近い者の方が可愛いという意。乳を飲ませるには子を抱く。

会うてただ居る宮の神主

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

大犬、狼よりは古家の漏りがおっかない

☆

昔話にもなっている。*古家の漏り…老朽化した家の雨漏り。「虎狼ヨリ漏が畏」(『諺苑』)。

大男総身に智恵が廻りかね

☆

体が大きいだけで智恵の無い者をいう。

大風に灰まいたよう

(佐渡相川)

何事も無かつたかのように。また、とりとめのない虚言についてもいう。

大風の過ぎたあと

☆

大勢のにぎやかな宴会の後で、皆が帰って急に静かになったときなどに言う。「大風ノ吹タアトノヤウ」(『諺苑』)。

大川で尻洗う

☆

「流れ川で尻洗ふ」(『譬喩尽』)と同意か。

大金より小金取れ

(山北町)

一攫千金の夢を追うよりもまじめに働いて稼ぐのがよい、意。「大取シャウヨリ小取シロ」(『諺苑』)と同じ。

大釜の底は、がらり八杯

(六日町)

大釜は、底が見えて飯がもう無くなつたようでも、よくすくい取ればまだ八杯もある意。「おおごこのかてはち、こうげても三杯」

と同じ。裕福な家の財産は無くなったといつてもまだかなり残っていること。

大鴨が葱を背負つて舞いこむ

(上越三郷)

願つてもない偶然の幸運。

大年をとるより小年とれ

(佐渡相川)

似た諺に「大取りするより小取りしろ」があるが未詳。

大きい大根辛くない

(上越三郷)

「山椒は小粒でぴりりと辛い」、「小さいナンバン辛い」の逆。

おどこのかてばち、こうげても三杯

(巻)

「大家のカテ鉢なげても八杯」ともいう。 *かてばち…「混ぜ飯を作る時に用いる木の容器」(大橋勝男編『新潟県方言辞典』)。

大きいものには吞まれよ

(山北町)

「長い物には巻かれろ」と同じ。

大取りも小取り

☆

一度に大儲けするよりも堅実に少しずつの儲けを重ねた結果が良いこと。「大取シャウヨリ小取シロ」(『諺苑』)。

大木の下に小木なし

(山北町)

通常は「大木の下に小木育つ」という。山の実態から言えば、大きな木の下には陽が当たらず草木が育ちににくい。

大苗に豊作なし

(上越三郷)

稲の苗が大きいと、籾の収量が多く期待できそうだが実はそうではないこと。

大崎女の乳を握ったか、八色原で野糞をこいたか(六日町)

「雲洞庵の土踏んだか、関興庵の味噌なめたか」の類と同じという(『城内郷土誌』)。

おおふ万金丹

(長岡富會亀)

おお菜食いの身上壊し
金のかかる惣菜を沢山食べることを戒めたものという。

(村上)

金の使い方がおおらかなこと。「身分不相応の贅沢な金遣いという」(『三条市史・資料編8 民俗』)。万金丹は江戸時代の薬であるが、語呂合わせに用いている。 *おおふ…大風。

大勢に手なし

☆

大勢に対して小勢では立ちむかえない意。時流には抗しがたいといった意味にもなる。『諺苑』にも載せる。

大船浮かぶと小舟も浮かぶ

(佐渡相川)

弱小のものが余慶にあずかること。

大水に飲み水なし

(上越三郷)

物がたくさんあつても、肝心の用に立つものがないこと。

大家のかて鉢なせても八杯

(長岡)

裕福な家にはなんでも多くある意。

大雪小雪ダラク荒れ

(佐渡相川)

旧曆十一月二十三日の大師講の日は海が荒れるので漁を休むといふ。それに関連した諺。

大雪に不作なし

大雪の年は豊作になる意。

大雪は豊作の前兆

「雪は豊年の表示」(『譬喩尽』)。

☆

陸に上がった河童

持っている能力をまったく發揮できない状態になること。

お金一代、人間二代、味三代

(上越三郷)

お金は阿弥陀ほど光る

お金は尊いものという意。

お庚申の夜語り

庚申の夜は一晚中起きていたことから、退屈と眠気を払うため

にさまざまな物語や世間話をした、その習慣をいう。「話は庚申さんの晩に」。

芋がら大木

(長岡富會亀)

「芋殻」は、皮をむいて繊維を取った後の麻の茎で、軽くもろいことから、大きくても力のないもの、大きくてもそれに見あつた実質の伴わないものの意。

芋殻を折るようなもんだ

(柏崎)

事を為すにわけもなく簡単なこと。芋殻は、皮から麻を取つたあとの茎で、軽くもろく、簡単に折れる。

置き酌失礼持たぬが不調法

(長岡富會亀)

未詳。『富會亀民俗誌—富會亀郷土誌(上)—』に載せる。

起きて働く果報者

病気で寝たりしないで毎日起きて働けることが幸せなこと。

沖で碇据えるまで小便するな

(佐渡相川)

小便すると不漁になるからという。あるいはまた、「小便するとは途中で仕事をなげだす隠語」ともいう(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。

沖にも出ず磯にも着かず

☆

中途半端でどっちつかずなこと。優柔不断な人にもたとえるといふ(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。「沖二モツカス磯二モツカズ」(『諺苑』)。

お客三杯、亭主八杯

☆

客にかまわず亭主ばかり飲んでゐること。「亭主八盃客三盃」(『諺苑』)。

お客三杯手八杯

右と同じ。 *手…亭主。

奥歯の抜けた夢は不吉

(上越三郷)

送り団子の迎い小豆

(巻)

十月二十九日の神送りと、十一月二十九日の神迎えに供えるべき供物をいう。

贈り物は奇数にせよ

(上越三郷)

お粥けいのそら煮

(佐渡相川)

「シイナ粥を温め直して食うような貧しいくらし」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。

桶が腐れば菜が腐る

(佐渡両津)

漬け物の桶が腐れば漬け菜もだめになることから、依存しているものに左右される関係をいう。

お香々三切付けるものでない

(上越三郷)

お講にもソウデンにもこれ一つ

(長岡富曾亀)

一張羅しかなく晴れ着もなにも一緒であること。

*ソウデン…

「馬の爪を切つたり血を取つたりする場所で、馬の神である蒼前の神を祭つてあつた。ソウゼン《蒼前》をソウデンとなまつて惣伝の当字で書てあつた」(水沢謙一編『富曾亀民俗誌』注より)。

虎魚おこじの下り潮に会うたよな面

(村上)

不器量な顔をいう。 *おこじ…海の魚、オコゼ。

怒り上戸に泣き上戸

(長岡富曾亀)

酒飲みの二つの性癖。

おこわはお手の甲

(柏崎)

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

お先たばことお先まんま

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

お産は女の大役

惜しがればおしが食う

(六日町)

*おし…聾啞者を言うか。

押し膏薬に吸い膏薬

(六日町)

押したり引いたり交渉のテクニク（城内地区古老の話）。

おしゃれしやれても惚れ手がない

（長岡富曾亀）

お化粧をして奇麗に着飾っても惚れてくれる男がいないこと。男に縁のない女の嘆き。また、そのような女を茶化していう。一般にも言う諺。

おじおばは鳳仙花の種

（長岡富曾亀）

家から離れてどこで所帯を持つかわからないからである。

おじと綿打ちは食うが役

（柏崎）

*綿打ち：古くなつた蒲団綿などを打ち直して柔らかくする職人。
*おじ：弟。

おじは貸すが馬は貸さぬ

次男坊よりも農耕馬が大切というわけである。

叔父見りや荷が重い

「叔父見りや荷が重い」ともいう。そんなに重くない荷物でも、叔父に会うと手伝つてくれるだろうという安心感から急に重く感じるようになること。

押せに引つ張り

（長岡富曾亀）

押せというときには引つ張る、すなわち反対のことをする意。

おせん泣かすな、火事出すな、前の田の草人に取らせるな

（上越三郷）

遅牛も早牛も淀に着く時は一つ

☆

「早牛も淀、遅牛も淀」（『毛吹草』）。「遅牛も淀まで、速牛も淀まで」（『譬喩尽』）。行き着く先はおなじこと。

おだてともつこには馬鹿が乗る

（上越三郷）

*もつこ：昔の運搬用具。縄を粗い目に編んで綱を作り、四隅に綱を付けて二人で担ぎ、土や石などを運んだ。人の乗り物ではない。

落ち着き三杯

（柏崎）

酒宴に遅れて駆けつけてきた者に、続けて三杯飲ませて落ち着かせること。

おつかし臭い達磨の屁

（三条）

わけもなく容易なこと。

おっさんとカボチャはなりしれだ

（佐渡相川）

カボチャは栽培に手間がかからないことからいう。
*なりしれ：無精者。

夫は妻と母の橋渡し

（上越三郷）

お寺と雪隠へ空手で行くな

（長岡富曾亀）

「寺と雪隠（せんいん）にや手ぶらじゃ行けぬ」（六日町）ともいう。

お天とう様と三度の飯はついてまわる (上越三郷)

人間、どこへ行つても食へることに心配はいらない意。

男心と秋の空

「女心と秋の空」ともいう。女から見て男心の信用できない意。

男心と川の瀬は夜の間に変わる

「男の心と川の瀬は一夜にかわる」(『毛吹草』)

男だてより小鍋立て

(佐渡相川)

気つぶの良いところを見せて他人のために役立とうとするよりも、まず自分の家の生計を立てることが大事だ、の意。一般にもいう。

男の子はつき持つ

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

男の目には糸をひけ、女の目には鈴をはれ

男の目は細いのが良く、女の目は丸く開いたのが良いこと。一般にも言う。

男は一生に一度地芝居と伊勢詣りはするものだ (南魚沼)

南魚沼地方の諺。

男は気でもち膾は酔でもつ

「男ハ気テモチ膾ハ酔テモテ」(『諺苑』)

男ほいとの一人心

(村上)

「訳のわからない不平や不満をこぼすことのたとえ」(『村上市史・民俗編』下巻)。*男ほいと…男の乞食。

男の眼つたれ女の眼つり

(長岡富曾亀)

それぞれ相応しくない器量をいう。

男やごめに蛆がわき、女やごめに花が咲く

☆

*やごめ…やもめ。「婦女には花咲き、鰥男には虱咲く」(『譬喩尽』)

男立派で尻あつば

(巻)

見てくれだけのかつこよさを軽蔑したもの。*あつば…糞。

踊りに花火

(佐渡相川)

「楽しみや幸せが重なること」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。

鬼のおらぬ地獄

(佐渡相川)

「地獄」には、江戸時代に隠し淫売婦を置いた地獄宿の意がある。ただしこの諺には、苦しい境遇を譬えて、鬼が居ないだけで地獄のようだといった意味もあるか。

鬼のそら涙

(長岡富曾亀)

冷酷非情な者が心にもなく悲しい様子を見せること。「鬼の空念仏」などと近い。

小野見天神、化粧詣り

(佐渡相川)

未詳。小野見は、佐渡北部の海府海岸にある地名。小野見天神堂があり、初天神に書き初めなどを奉納し、参詣したという（浜口一夫氏談）。

小野見のもんに出合うたよう

（佐渡相川）

愛想のないことという。

お祖母さん子は三百安い

☆

「祖母^{おば}育ち三百安い」「婆育ちは三文安い」ともいう。『諺苑』には、「婆ソダチハ銭カ百ヤスイ」とある。育児に関する教訓。

おば借りたら姉返せ

「理屈の通らないことのとえ」（『故事俗信ことわざ大辞典』）という。 *おば…妹。

伯母のとこへ行くより秋山へ行きやれ

☆

秋山は秘境の秋山郷か。山奥だといつて嫌われる秋山郷でも貧乏な伯母の所よりはましだということ。熊代彦太郎著『俚諺辞典』では「貧乏な伯母の所へ行くよりは秋山へ行け」として、飛驒の諺とする。

おびやこのように物を食いたがる

産婦がそれまで産屋に籠もつて特別の待遇を受けたことから生まれた諺。（小林存『越後方言考』より） *おびやこ…産屋^{うがや}子。オビヤは産後二十一日間のことという。

お振る舞いに行く前に馬肥え東ね

「馬肥え東ね」の作業をすると手がきれいになるからという。

お風呂は首つきりのご馳走

（上越三郷）

小俣男の塔ノ下女

（山北町）

小俣・塔ノ下は、岩船郡山北町の地名。それぞれ美男美女が出るところという。

御神酒あがらぬ神はない

神前には必ずお酒を供えるように、どんな神だつて酒を好むのだから、人間が好むのは当然という酒飲みにとつて都合のいい諺。

親おぐれば子貧乏

（山北町）

親が死んでも食休み、軒端の下でも下り^お休み

親が死んでも食休み

「親が死んでも昼休み」とも。

親が辞儀する、子が手を出す

（佐渡相川）

親孝行と火の用心は灰にならぬ前

*灰になる…親の場合は火葬（死）、家の場合は焼失。

親子の仲にも銭は他人

「金銭に親子無し」ともいう。

(佐渡兩津)

親父はおれより年上

当たり前のことをいう。

(長岡富曾龜)

親と月夜はいつもよい

(長岡)

親に貸した金と味噌の塩

取り返すことが出来ないもの意。

(山古志)

親に似ぬ子は鬼子

「親に似ぬ子は鬼子」(『譬喩尽』)。

☆

親に似ぬ子は川に流せ

子が親に似るのは当然という意。

(山北町)

親にまさるは竹の子ばかり

「親勝りの竹の子」ともいう。「^{たけのこ}笋は親に^{まさ}増る」(『譬喩尽』)。

☆

親の意見と冷や酒は後で効く

「冷酒と親の意見はあとから効く」ともいう。「冷酒は親の異見と同じ」(『譬喩尽』)。

☆

親の意見と霧雨はあとから効く

霧雨は当たらないようでも気付いたときにはびつしより濡れること
からいう。

親の意見と茄子の花は千に一つの無駄もない

茄子の花には必ず実がなることからいう。逆に「冬瓜ノ花ノ百一
ツ」(『諺苑』)という諺もある。

親の恩と春雨は当たるが知れぬ

「親ノ罰ト小糠雨ハアタルガシレヌ」(『諺苑』)。

☆

親の首に縄かける

首に縄を掛けられるとは、罪人として逮捕されること。現代の法律と違つて昔は子どもの犯罪に親が連座したことから、子どもへの戒めにいつた。

親の雪隠で糞をこく

親がかりで何の才覚もない人。 *せんちん：便所。

(長岡富曾龜)

親のばち、菰かぶついても当たる

*菰：わらで荒く編んだむしろ。

(上越三郷)

親のばちは子にあたる

親の降る雨子にかかる

親の悪事は子に及ぶ意。

(佐渡相川)

親の物は子の物

(佐渡相川)

親の守りで子おもしろい

☆

以下の「親守り子機嫌」と同じ。「親の傳ついでで子嬉うれひ」(『譬喩尽』)。

親ばか子畜生

「親ばか子ばか」の意とすれば、親が甘やかしすぎた子は人間以下の畜生と同じになる意。親への戒め。

親ばかチャンリンそば屋の風鈴

(上越三郷)

明治期のはやり歌の文句「おやまかちゃんりん」のもじり。

親腹七日

(六日町)

新生児は七日間乳を飲まなくとも大丈夫だという意。「里腹七日持つ」と類似した諺。

親見て子貰え

親守り子機嫌

☆

「親のもりで子嬉しい——親がもりすれば子が喜ぶとなり」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1969)。子どもにとつて一番嬉しいのはやはり親が直接子守りしてくれるときだが、働かなければならない両親はそうもしてられない。

親を見て子を知る

お湯の寿命は水となる、嫁の寿命はばばあとなる

(上越三郷)

折戸男の興野女

(巻)

折戸は、旧巻町の地名。

終わり初物

☆

その年とれた最後の野菜。「終り初物」(『諺苑』)。

終わり初物で七十五日生きのびる

「初物を食うと七十五日長生きする」と同じ。一般に「初物七十五日」と言うが、『諺苑』では「前後七十五日ノ間ハナベテ初物ナリ」というのが原義で、その後、食べると長生きする意に変わったものだろうという。

負われりや抱かれる

(佐渡相川)

調子にのつて甘えること。

尾を振る犬は打てぬ

向こうから慕ってくる者、頼ってくる者を、むげに追い払うことはできないこと。

オンゴロベイも魚にん仲

(佐渡両津)

佐渡の古謡に「ゴウモリも鳥ニンジユウ、オンゴロベエもユウ(魚)ニンジユウ」があるという(山本修之助著『佐渡民俗』ことば事典)。

1987)。「ドンゴロベも魚の人情」と同じ。 *オンゴロベイ…メ
ダカ。

女の立ち話、騒動のもと

女はおしゃべりだから立ち話でも大きな騒動のもとになることがある意。(長岡)

女と米の飯は白いほどよい

(長岡)

女と山菜は見置きするな

(山北町)

若い娘はすぐどこかへ嫁ぐかも知れないし、山菜はあつという間に伸びてしまうからである。「山のもとと嫁の見置きはするものではない」(佐渡)ともいう。

女と塩した物はすたりが無い

(佐渡両津)

塩蔵品がすぐには腐らないように、女性も年をとつても結婚相手に困ることはない意。

女に白歯見せるな

(三条)

女を誘惑することになるからという。

女の腰巻、火難を避ける

(柏崎)

近隣に火災が発生したとき、女性の腰巻を掛けたり振ったりすると類焼を免れるという俗信。

女の子持腹、はせ舟が通る

(佐渡相川)

「はせ舟」は荷物を運ぶ小型の舟。乳児のある女性は大食すること。「子持ち女は荷付き馬でも通る」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)ともいう。

女の子産んだら桐一本

(上越三郷)

女の怖がりと猫の怖がりは嘘

(柏崎)

『諺苑』には「女ノ寒ト猫ノ飢ハ手ノワザ」とある。

女の十三稚児の舞納め

(長岡富曾亀)

稚児は神社の祭祀に仕える子ども。舞楽や神楽などに参加する。女の子は十三歳頃になると生理が始まるから、血の穢れがあることによつて神事に加わることを禁じられた。

女のすたりもんは無

☆

「女と塩した物はすたりが無い」と同じ。また、「世界に余つた女は無」(『譬喩尽』)にほぼ同じ。 *すたりもん…流行遅れのもの、また役に立たなくなつたもの。

女の節句が来るので雪が降る

(佐渡相川)

佐渡では桃の節句(新暦四月三日)頃に寒くなる日があるといふ。

女の横座は日三日しかない

(佐渡相川)

女がのんびりできるのは正月の三が日しかない意。 *横座…家で亭主の座る席。

女は着物髪型

(長岡富曾亀)

女の器量は着物と髪型で決まること。

女は産にこりず、漁師は海にこりず

(佐渡両津)

出産も漁も大変だが、さりとて一度でこりる者はいないこと。

女厄年十九のかね付き、泣きかね、別れかね

(佐渡相川)

女性も結婚して十九の厄年を迎えるころには苦勞する意か。

*かね：昔の風習で、既婚女性が齒を黒く染めた鉄漿おほくろのことと思われる。

おんぼろさんぼろ

(柏崎)

次の諺「おんぼろさんぼろワカメの行列」から分かるように、ぼろぼろの着物の形容。

おんぼろさんぼろワカメの行列

(山北町)

着ているものがぼろぼろになった状態を、海藻のワカメを垂らしたようだと比喩的にいったもの。

おんまが通ればチョンチョン雀がよけて通る(長岡富曾亀)

力のある者にはかなわなないこと。

貝殻で海をはかる

(上越三郷)

まったく無理なこと。

階段から落ちた怪我は大きい

(佐渡相川)

海底濁れば雨となる

かいもちかつぎ、つぎ盗人ぬすびと

(長岡)

「もち米倒しのつぎ盗人」と同じ。実家に里帰りした嫁が、様々なものを婚家に持ち帰ること。

蛙、口から吞まれる

☆

「口は災いのもと」と同じ。空腹の蛇に蛙がうっかり自分の子を与えると言ってしまった話から生まれた諺。「蛙は口から吞まる」と(『譬喩尽』)。

蛙子の尾の抜ける時

(佐渡両津)

*蛙子：おたまじゃくし。成長すると水から上がって尾が抜けて蛙になる。

顔に似ぬ心

(佐渡両津)

人間の見た目と内心が異なることをいう。

嬬かがと井戸水は替えたほどいい

(長岡富曾亀)

新しくするほど良い意。

嬬と馬が全身上

(六日町)

「嬬と馬は半身上」と同類。

嬬と馬は半身上

(三条)

女房と馬の善し悪しが家の財産の半分を左右する意。

嬬の悪いは六十年の不作

(長岡富曾亀)

「嬬の悪いは六十年の凶作」とも。

嬬半身上かかはんしんじょう

女房の善し悪しが家の財産の半分を決めること。

嬬を叱るのもこ馳走のうち

お客の接待に謙遜して「何もお構いしませんで」などというように、不十分な接待を女房のせいにして叱つてみせるのもお客へのサレビスであること。女房を叱つてみせることでもっと懇切な持てなしをしたかった気持ちを表わすのであるが、今日では多少理不尽。

柿が赤くなると、医者どんが青くなる

(長岡)

「蜜柑の皮が色付いろづくと藪医の顔が青なる」(『譬喩尽』)。

柿の皮は嫁に、梨の皮は姑に

(佐渡相川)

柿の木三本あれば金が残る

(寺泊)

*かきの木三本：義理欠き、恥かき、事欠き。

柿の花踏んで田植える

(豊栄)

柿の花が落ちるころは田植えの時期であること。

かぎ様渡す

(長岡富曾亀)

未詳。*かぎ様：囲炉裏の自在鉤かぎのこと。

かくまどどんの首は見たことがない

(三条)

馬鹿げたことを言うなの意。「ドンノクビと柄窪は見たことがない」(長岡)ともいう。*かくま：不明。*どんの首：首筋のこと。

かぐらが蚊を呑む

(分水)

わずかで物足りないこと。「蛇、蚊呑んだようだ」(村上)とも。

*かぐら：獅子頭。

駆けつけ三杯

☆

遅れて駆けつけて一気に三杯飲んで人に追いつくこと。あるいは、「無作法なるものの遽あわてて食事するさま」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)ともいう。

かげかん十日

寒明けの十日間が最も寒さが厳しい意。*かげかん：寒明け。

陰口いうと影がさす

(佐渡相川)

影の神のイブ木をとると風が吹く

(佐渡相川)

*影の神：佐渡相川の後尾の海岸にある巨岩で、朝には金北山の影が映るといふ(浜口一夫氏談)。*イブ木：不明。

瘡と虱は隠すほどふえる

(佐渡相川)

傘と提灯、借りたらすぐ返せ

(上越三郷)

一般には、逆に「傘と提灯は戻らぬつもりで貸せ」という諺もある。

笠のしずくも宿の得

(佐渡相川)

「宿、味噌、木損、カカ手間損」の逆。

頭がふらねば尾がふらぬ

「頭が動けば尾も動く」の逆で、上の者が動かなければ部下も動かない意か。

火事に唾

(六日町)

鍛冶町衆の長評定

(村上)

相談に時間がかかつて話がまとまらないこと。『村上市史・民俗編』下巻によれば、和釘を作つて生計を立てていた鍛冶職人たちが、明治二十年代に洋釘が入つてきたとき、その対策を協議したが、なかなかまとまらなかつたという話から生まれた諺という。

「小田原評定」に同じ。 *鍛冶町：村上の町名。

鍛冶屋の明日に、紺屋の明後日

(長岡富曾亀)

当てにならないこと。「紺屋のあさて」(『毛吹草』)。「髪結の足下

へ往て、紺屋の明後日」(『譬喩尽』)。

鍛冶屋のこんだ市

(巻)

頼んでおいた金物を市の日に取りにゆくと、また今度の市までには仕上げておくと言うばかりで、当てにならないこと。

*こんだ市：この次の市。

鍛冶屋の七十五日

貸す阿呆に、なす阿呆

(長岡富曾亀)

*なす：返す。

春日のしゃぎりで雪つかい

(柏崎)

未詳。春日は、柏崎の地名。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

片足棺桶

(長岡富曾亀)

遠からず死にそうであること。「棺桶に片足突つ込む」ともいう。

堅いもの握るのはへのこと箸ばかり

(六日町)

仕事をしない者をあざけつていうか。 *へのこと：男の性器。

片口聞いては理が解らぬ

☆

「片口聴テ理ヲツケナ」(『諺苑』)、「片口聞いて公事を分くるな」などと同じく、一方だけの言い分を聞いて善し悪しの判断をしてはならないこと。

形に似た粽^{ちまき}を巻く

(佐渡相川)

分相応のことをせよ、の意。佐渡の粽は越後の笹巻と異なる。

片照り片降り不作のもと

(寺泊)

年の前半が日照りで、後半が雨続きの年は不作になること。天候不順は農作物に悪いからである。

かた餅にきなこ

(長岡)

相性の良くないこと。かた餅にきな粉はくつつきにくい。「きなこにかた餅」ともいう。

かたもっこ

*もっこ：昔の運搬用具。縄を粗い目に編んで綱を作り、四隅に綱を付けて土や石などを運ぶもの。二人で担ぐものだが、それを一人で担ごうとするのは頑固で偏屈な人。(小林存『越後方言考』より)

かたもっこ担ぐ

もっこは棒に吊して二人で担ぐことから、ある人の主張に賛同すること。「片棒かつぐ」と同じ。(小林存『越後方言考』より)

語り下手の聞き上手

(山北町)

郭公豆まけ

郭公鳥が鳴くころが豆の蒔き時。

刈った茅^{かや}が音をたてると雨になる

(佐渡相川)

茅は、枯れて乾燥したススキのこと。湿気が高くなつて雨の降る時にそれが音を出すことを経験的に知っていたのであろう。

買つてもできない人枕

(上越三郷)

人の体を枕にしたときの冗談にいうが、意味は他にもあるか。

河童に塩をあつらえる

(長岡富曾亀)

筋違いなこと。まったく無駄なこと。「カワウソに塩をあつらえる」と同じ。

河童の木登り

(長岡富曾亀)

河童は陸上の木とは無縁な川に住む妖怪だから、見当違いなことをする意。「魚の木登り」ともいう。

家庭の円満はお互いの遠慮から

(上越三郷)

標語的で、新しい諺であろう。

門松余計くぐる

(三条)

年を取つて経験が豊かなこと。「塩引余計食つた」と同じ。

金槌^{かなづち}の川流れで頭が上がらん

人に負い目があつて頭が上がらなときなどという。

金槌の川流れ

「鉄椎ノ川流れ―首ノアカラヌ諭」(『諺苑』)。

☆

金と相談

支払い能力の問題であること。

(長岡富會亀)

金には金が付く

金の有る所には更にいつそう金が集まること。

(佐渡兩津)

金を積むより信用を積み

(上越三郷)

カボチャ蜂のよう

落ち着きのないこと。

(佐渡相川)

竈の口は八石山に向けよ

竈の口に風が良く入って燃えやすいからという。八石山は柏崎と小国との境にある標高五百メートル余りの山。

(柏崎)

かまどをつぶす

家が破産すること。ほかに、「竈を分ける」「竈を立てる」などの表現もある。

(長岡富會亀)

上ぎいこの着倒れ、下ぎいこの食い倒れ

(寺泊)

「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」の地方版。旧寺泊町大字郷本の諺で、上在郷は本山・寺泊など年友の地を境にして寺泊町の北側の集落を指し、下在郷は夏戸・郷本など年友を境に南側の集落を指し、それぞれの地域の生活スタイルをうまく表現したものの。「上在郷は江戸時代から北前船交易で賑わうなど、寺泊の中

でも商業が発達した地域である。定期市が立つ燕水分水地域にも近く、上在郷の人々は世間の流行に敏感な生活を送っていた。

これに対して下在郷は寺泊有数の農業地域で、この人々は世間にはやや無頓着で、自給自足の生活を送っていた。ただし、これも戦前までの話で、両地域の個性は現在薄まりつつある」(長岡市教育委員会寺泊分室の旭さん調査)という。なお、郷本在住の八十五歳の男性は、「私が住んでいる郷本は下在郷です。私の子どものころ、尋常高等小学校に上がって上在郷の人たちと一緒にになると、まず着ている着物がきれいで驚く。着物は着物でも、上在郷の人はきれいな着物、私たちは継ぎはぎだらけの古い着物だったんです。今はそういう差はなくなっただけ、昔はあったんですね」と話してくれた(同、旭さん調査)。

雷の多いは上作

これと逆に、「雷少き年は稲実入少し」(『譬喩尽』)ともいう。

(長岡富會亀)

鳴の高飛び、雇いの高枕

カモメが高く飛ぶと翌日はしけるといい、船乗りはその時に備えてたつぷり休養をとる必要があったからであろう。北前船の船乗りの諺。(瀬波郷土史研究会編『北前船・小廻船と瀬波湊』1997)

(瀬波)

茅野のクワイクワイ

(長岡)

ヨシキリの鳴くようにおしゃべりの人。ヨシキリは鳴き声が実になぎやかな鳥である。

茅野の雀

(上越三郷)

「茅野のクワイクワイ」と同じか。おしやべりの人。

痒い所に手が届かない

辛子^{からし}は氣違いにすらせろ

「辛子」は、大根おろし。

烏^{からす}にぶつけるべとも無い

*べと…泥。

(佐渡相川)

(六日町)

烏の糞かき

足が汚いこと。

(長岡富曾龜)

烏の口にケラが余った

☆
貪欲な烏も食べ残すもの。すなわち、どんなに貪欲な者でも欲しがらないものの意。「烏の口からケラが余る」(佐渡両津)ともいう。「烏ノ口カラケラガアマルーケラハ木ノ名。ケラノ木ノ実ハ烏啄ハマズ」(『諺苑』)。

烏のもの忘れ

烏が自分の隠したものを忘れるように、置き所を忘れたときなどという。

(長岡富曾龜)

烏の物を隠したよう

隠し場所を忘れてしまったときという。

烏は黒いに憎まれず口に憎まれる

☆
人の反発を招くのは話す言葉だ、という意。「烏八色ノ黒イニ憎マレンデロニ憎マル」(『諺苑』)。

空茶は出すな

(山北町)
「空茶」は何も添えずにお茶だけを客に出すこと。お茶を出すときには漬け物でも茶菓子でも何かを添えて出すのが礼儀とされる。

空茶は米搗きよりこわい

(柏崎)

からつ火焚けば隣の身上があがる

(六日町)
囲炉裏や竈に、鍋釜を掛けず、火だけ燃やすことは不経済と考えられていた。それを皮肉つたもの。

空鍋^{からなべ}掛けるな、水の中に湯を入れるな

(佐渡相川)
葬礼の習俗からの、日常の禁忌。

から湯たてると隣が栄える

(佐渡相川)

借り着より洗濯

立派でなくとも自分の物がよいこと。「小袖着ての奉公より樓檻^{つしれ}着ての我世」(『譬喩尽』)と同類。

借りて借り得、貸して貸し損

貸した者は忘れないが、借りた者は忘れるからである。また、借りた物は返す気がなければ自分の得になるし、貸した物は相手に返す気がなければ戻ってこないから損になる。貸し借りは、えてしてそうなるものである。

借りてきた猫

鼠を捕らせるために借りてきた猫。その猫の習性から、他家へ行くとき急におとなしくなる子どもなどをいう。

借りるときの地藏顔、返すときの閻魔づら

(長岡)
古くからある諺。「用あるときの地藏顔、用なきときの多んま顔」(『北条氏直時代諺留』)。

借りるときの恵比寿顔、返すときの閻魔顔

金品について、借りるときは笑顔になるが、返すときは不機嫌になるといふ、人間の一般的心理を誇張した表現。

軽い返事に重い尻

(長岡富曾亀)

可愛い子に他人の飯を食わせる

可愛いほど叱る

(長岡富曾亀)
叱るのは憎いからではなく、可愛いからだということ。

カワウソに塩をあつらえる

☆

昔話から。当てにならないこと。『諺苑』にも載せる。

川尻があくと天気がよくなる

(上越三郷)
「秋になって田から水が落とされる頃になると天気が良くなる」という意味です(三郷地区のお年寄りの話)。

川中でほた

(六日町)
「地獄で仏」と同じ意味という。*ほた…木の幹か。

考え作、実をとらん

(長岡富曾亀)
「頭の中や机の上でいろいろ考えても、実行が伴わない農業は、結局は実収入を得ることは出来ない」という意味(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)という。

寒九の雨は虫になる

(村上)
寒の九日目に、雪ではなく、もし滅多に降らない雨が降ったりすれば、その年は作物に虫害が多いという。

寒九の雨に土用三郎

いずれの雨も作物に悪い予兆であること。

寒九の水で夏の水にあたらぬ

(佐渡相川)
俗信。*寒九…寒に入つて九日目。

寒九の水はくさらない

(上越三郷)
寒に入つて九日目に汲んだ水は腐らないこと。

寒九の水を飲むと風邪を引かない

関興寺の味噌なめたか

(南魚沼)

南魚沼地方の諺。関興寺は、南魚沼の塩沢町にある臨済宗の古刹で、雲洞庵と並称される。諺にも「雲洞庵の土踏んだか、関興寺の味噌なめたか」と並称される。一度は参禅すべき道場であること。

寒四郎

(長岡富曾亀)

寒の四日目の天気がその季節の天候を左右すること。

寒中の雪は百日目に大荒れ

(佐渡相川)

寒中の雪、大雪のもと

(佐渡相川)

寒中の雪は海の潮が速くなる

(佐渡相川)

寒搦き米は土用を越せる

虫が付かず、品質が落ちないこと。

鉋とヤスリ

(柏崎)

いずれも物を削る道具だが用途が違う。対象によって手段をかえなければならぬことか。

カンニョンさんの夜にイカ大漁

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

寒のうちの長雨は夢にも見るな

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

寒のかどめ一つ雷は事を起こす

天候による凶事の予兆。「師走雷は国の乱れ」(『新発田市史資料』第五卷・民俗)ともいう。*かどめ：佐渡方言では曲がり角の意。

勘六が戻った

劍持隼一郎「ことわざお国めぐり・3 新潟の巻」(『言語生活』1978 No.318)によれば、この諺にはつぎのような背景があったという。戊辰戦争のとき会津軍に頼まれて偵察にいった六日町の遠藤勘六という者が官軍の捕虜になつて捕まつたため、会津軍は情報を得られず敗走した。家人が勘六も殺されたものとあきらめていたところ、戦争が終わつて彼は帰つてきた。そこで、大切なときに役に立たないものたえとしてこの諺が生まれたのだという。

がえつちの面に小便

(荒川町)

「蛙の面に小便」と同じ。「蛙ノ面へ水」(『諺苑』)。

*がえつち

：蛙の方言「げあつち」「げつち」と同じ。

がらと言えば田螺汁

(山北町)

音を聞いても察することができずの意（柳田国男『なぞとことわざ』）。田螺は食用にもされた。似たような諺は他県にもある。

元日にくしゃみするは長命の相

元日に薬鍋を出すな

元日のお日様は大きい

元日の太陽はいつもと違って大きく見えること。

雁の中にドウまじり

ひとときわ目立つ意。 *ドウ…朱鷺。

（長岡富曾亀）

聞いて千金、見て一文

聞いた話と実際がまったく異なっていること。

（上越三郷）

気が利いて間が抜ける

余り細かいところに気が利き過ぎると、かえって思わぬ失敗をすること。一般にもいう。

聞けば聞き腹がたつ

「聞けば聞腹きこはらとて聞くと腹はらが立たつもの」（『譬喩尽』）。

☆

汽車の汽笛が良く聞こえると天気が変わる

（山北町）

羽越線が開通した後にできた諺。

雉のめつと別れ

仲の良い夫婦が離別するのは何かよつほどの事があつたからだと
いうこと。（渡邊清香氏調査） *めつと…夫婦。

（佐渡両津）

キスの腹、磨いたよう

「鮭の腹、磨いたようだ」と同じ。腹蔵ない人の性格についてい
う。

キスは内蔵が少なく腹がきれいな魚であることからいう。

汚く稼いできれいに暮らせ

☆

汚く稼ぐとは、不正をすることではなく、汗や泥にまみれて勞
働すること。汗水厭わず稼いで清楚な暮らしをせよ、の意。「汚
ふ働き奇麗に喰へよ」（『譬喩尽』）。

気違いの後押ししても馬鹿の尻押しするな

（清里）

狐を天馬に乗せたよう

（柏崎）

「馬の背に蒔藪」と同じく、落ち着かない様子をいう。なお、
一般に「狐を馬に乗せたよう」という諺もある。（柳田国男『な
ぞとことわざ』では「狐を馬に乗せたやうな男」として、「ばか
とも利口ともわからぬやうな人」と注する。） *天馬…荷物を
運ぶ小舟の伝馬船。

木で鼻かんだようだ

「木で鼻をこくつたよう」と同じ。無愛想なこと。

絹着るか菰着るか

(佐渡相川)

金持ちになるか乞食になるかは心がけ次第。

木の箸と竹の箸を一緒に使うな

(山北町)

気(木) 違いだから。

希望あらざれば努力なし

(上越三郷)

希望もないのに努力する気は起きない意。

木もと、葦うら

(柏崎)

木は元から、葦は末から燃やすと良い意。竈や囲炉裏で火を焚く方法についていう。

木もと、竹うら

(柏崎)

木と竹の割り方。あるいはまた、木と竹の燃やし方が。

きやでいざれ

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌 — 富曾亀郷土誌(上) —』に載せる。

胡瓜はお宮のテンノウ様にあげる前は食べるな

(山北町)

六月十四日、岩崎地区の神社に胡瓜を奉納する。その前に食べると手が曲る、という。禁忌。

去年の暦であてにならぬ

(長岡富曾亀)

器用の者ほどのめしこぎ

(柏崎)

良い仕事ができる者にかぎって怠惰な傾向があること。

器用貧乏、村の宝

☆

器用で村のためによく働くが、自分はいつも貧乏に暮らして居る人のこと。「細工貧乏人宝」(『諺苑』)。

霧雨と親のバチは、当たらんように当たる

☆

「親ノ罰ト小糠雨ハアタルガシレヌ」(『諺苑』)と同じ。

霧雨と親の意見は身にふりかかる

着れば着寒い

☆

「アマリサムガリテ衣服ヲ多ク着スルホド寒シトナリ」(『諺苑』)。

「寒くなりて衣服を多く着るも猶寒き心地すとの義」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。重ね着しても衣服だけでは寒い意。着れば着るほど寒い、ともいう。

着れば着風

(佐渡相川)

着飾ればそれなりの品格が出ること。

切れ物持ったら敵と思え

(佐渡相川)

刃物を持った者には用心せよ。

きんかの空耳

(長岡)

耳の遠い者が自分に都合のよいことだけを聞き取る意（川合和江著『寺泊のことば』1980）。*きんか：難聴の人。耳の聞こえない人。

金銭に親子無し

金銭の問題になると親子でも自分の権利を主張しがちであること。

金銭は浮き物

金銭はひと所に留まらず人から人へ渡るものであること。

寧丸が上がったり下がったり

気が気でないこと。

（六日町）

金時の火事見舞い

紅潮した顔を譬えたもの。金時（金太郎）は赤い顔で描かれるからである。

金北山の種蒔き猿

雪形のこと。佐渡では、金北山にこの雪形が出れば種籾を蒔いても良い時期になる。

義理とふんどしは欠かせない

男にとってどれも無くてはならないもの。「義理トフンドシハセネハナラヌ」（『諺苑』）。

☆

義理ばるより頬ばれ

（佐渡相川）

世間の付き合いよりもまず自分のことを考えよ、という意。

食うたら喰うた目を見せよ

（佐渡両津）

人の世話になつたら、それなりのことをしなければならぬこと。あるいは食べたならその分働きの意。一人前に仕事をしない人に対する批難でもある。（渡邊清香氏調査）

草一荷、米一升

（上越三郷）

昔は肥料の代わりとして田に草を入れた。「草一荷」すなわち一背負い分の草を田に敷き入れれば、米一升分余計に収穫できること。ただし今日のコシヒカリの場合は肥料をやりすぎるとかえつて良くないという。

腐つても鯛の骨

（長岡）

おちぶれても、もとの品格があること。

腐り味噌にも取り得がある

（佐渡両津）

どんなものにも良い点があること。

腐れ柿がずくし柿を笑う

（長岡富會亀）

つまらない者同士がお互いに嘲笑し合う意。「熟み瓜が熟み柿を笑う」（熊代彦太郎著『俚諺辞典』1969）とも。ただし「腐れ柿がずくし柿を笑う」は、腐敗と熟成の違いが分からない愚かな者の意にもなる。*ずくし…熟した意。

串柿の抜き食い

（長岡富會亀）

串柿は串に刺して乾燥させた干し柿。少しずつ次第に消費し尽

くしてゆくこと。一般にもいう。

櫛を贈り物にするものではない

(上越三郷)

しくしく泣くといけないからとか、苦をもらうからだという。逆に「櫛を落とすと苦が消える」とも一般にいう。俗信の一つ。

九十九夜、いかに待たる

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

鯨波の祭りは雨祭り、川内の祭は天気祭り

(柏崎)

全く逆に、「川内の祭は雨祭り、鯨波の祭は天気祭り」ともいう。

葉九層倍、百姓百層倍

(長岡富曾亀)

葉も原価に比べれば高価な物で大もうけになるが、農作物も蒔いた種の量に比べれば収穫量は遙かに多いこと。

糞皮三寸、身ではない

(三条)

「屎つ皮三寸、身の内でない」とも。*糞つ皮…皮膚の表皮。

くそくそが羽根を広げたよう

(柏崎)

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

下さるものなら夏の深かかくつ沓

(巻)

くれるものなら何でももらいたい意。*深沓…雪中に履くわらくつ。

口身上

(長岡富曾亀)

「口貧乏」の逆で、甘い物もいける酒も飲めるなど、食べたり飲んだりすることに恵まれていた人のこと(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)という。「口果報」(『諺苑』)に同じ。

口と腹は大違い

(長岡富曾亀)

口で言うことと、心で思っていることとは大いに違うこと。

口に入れるもんならあんまのピツピでも

(長岡富曾亀)

食い意地が張っていること。*ピツピ…笛。

口のききようでお里が知れる

(長岡富曾亀)

言葉遣いで育った環境が分かること。

口の付いたものは片口もいや

(佐渡相川)

けちで食べ物を惜しむことを強調したもの。*片口…片方に注

ぎ口の付いた容器。

口は親まかせ、尻はせんちまかせ

(巻)

親がかりで生活に不自由しないこと。*せんち…便所。

口はすんぐり

(佐渡両津)

「すんぐり(すんぐり)」は、小さな独楽で、よく廻ることから、

口はどのようにも廻るものであること。すなわち信用できないものである意。(渡邊清香氏調査)

口は重宝

言うだけならどんなサービスもできるからである。

口貧乏

食べ物の好き嫌が多いこと。

(長岡富曾亀)

口を控えて腹立てず

言葉を少なくして腹を立てないことが、穏やかに世を過ごすための賢明な方法であること。

(上越三郷)

九日餅は搗くな

九日、十九日、二十九日に餅を搗くなという禁忌。とくに正月の餅は暮れの二十九日を避けた。

(山北町)

熊蔵もん

ならずもの、与太者のことという。「六蔵もん」と同じ。

(柏崎)

組、親類

「親類より近くの組が大切」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)。

(佐渡相川)

久米の親爺の尻まくり

久米は、柏崎の旧別保郷の地名。かつてそこから柏崎の町へ薪や柴木を売りに来た男たちがいて、その風俗という。

(柏崎)

蜘蛛が縦に巣をかければ雨が降る

縦に巣を張れば雨にあたりにくい。

(山北町)

暗い所へ金が貯まる

参考：京都では「明るい家には金が溜まらぬ」といって薄暗い家

(六日町)

を好んだという(『故事俗信ことわざ大辞典』)。それと関係あるか。

暗闇から牛を引つ張り出したようだ

動作がのろい人、はつきりしない人をいう。「闇から牛牽摺出だす」(『譬喩尽』)。

☆

車に乗る人、乗せる人、そのまた草鞋を作る人 (柏崎)

一般には「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」という。人それぞれの役割によって世の中が成り立っている意。また「駕籠に乗る人、担ぐ人」だけならば、同じ人として生まれてもその境遇によって大きな差があること。

くれ上手の貰い上手

惜しみなく物を与える人は、また他人から多くの物を貰うから、決して損はないこと。

(長岡富曾亀)

暮れぬ前の提灯

「転ばぬ先の杖」と同じく、前もつての備えの大切さをいう。

(長岡富曾亀)

食わず貧楽

論語から出た諺といい、一般にも言う。貧乏でも不当な利を求めず、それなりに楽しく暮らすこと。『諺苑』にも載せる。

(佐渡両津)

鍛台はぶなの木、立っていれば芽が出る

田打ちの掛け声。まじめに働かず、怠けてつっ立つたままであること。鍛台のブナの木に芽が出るとたしなめたもの。*鍛台：鉄

(山北町)

の齒を付ける木の部分でブナ材を用いた。

傾城買いの草履はかず

「傾城買の尻切草履」(『譬喩尽』)。外で派手に遊ぶ人も家では質素であること。

けら腹立てば鳥喜ぶ

「けら腹立てば鶉よるこぶ」(『毛吹草』)。鶉を捕らえるのになら(螻蛄)を餌にするからという。

喧嘩すると銭三文損がいく

喧嘩は何もならないどころかかえつて失うものがあること。

下戸の肴荒らし

宴席などで下戸は酒が飲めないから食べ物に手が出る。『諺苑』にも載せる。

下戸の建てた倉はない

「飲まで建てた倉はない」ともいう。「下戸の建たる蔵も無し」(『譬喩尽』)。

げじげじも一生、なめくじも一生

「これも一生、あれも一生」に同じ。『諺苑』に「ハモモ一期エジモ一期」をあけて、「一生涯ハ貴賤賢愚皆トモニヲナシト云喩ナリ」とある。身分によらず賢愚によらず皆それぞれに等しく一生があること。「鯛も一期、海老も一期」(『世話尽』)。

げすの一寸、のろまの三寸、馬鹿の開け放し(長岡富曾亀)

戸の閉め方についていう。「下衆ノ一寸戸」(『諺苑』)。

げすの楽しみは寝楽しみ

つまらん奴の楽しみは寝ることだけの意。

げすの成り上がりは餅の皮をむいて食う

今まで貧しかった者が急に成り上がると余計な贅沢をしたり教養のない滑稽なことをしてかす意。「榮耀には餅の皮剥」(『譬喩尽』)。

下駄を預ける

死者の出た家に一泊したら三晩泊らなければならぬという俗信があり、他家に下駄を預ければ一晩で帰れるという。なお一般には、問題を他人に任せる意で使っている。

鯉師、香具師、馬喰

あまり良くない者たちの意。

鯉になれ鯛になれてつても蛙の子は蛙

(六日町)

こうぐり膾で皿なめた

*こうぐり：魚のカワハギ。酔の物がたいへん美味しいという。「愛吾鱠で皿咄る」(『譬喩尽』)の「愛吾」は若狭でとれる美味い魚という。

こうぐり膾で酒三升

(佐渡相川)

カワハギの膾を肴にすれば美味しく酒が三升も飲めること。

庚申の日に孕んだ子は盗人になる

庚申の夜は、一晚中寝ずに起きている慣わしだったので、この夜は夫婦ごとをしてはならない意が込められている。『長岡市史』
民俗編)

庚申にも茅刈りにも

晴着も野良着も同じ一張羅の意。「お講にもソウデンにもこれ一つ」と同じ。

川内の祭りは雨祭り、鯨波の祭は天気祭り

川内・鯨波はいずれも柏崎の地名。全く逆に、「鯨波の祭は雨祭り、川内の祭は天気祭り」ともいう。

川内の昼なかのようだ

川内は、柏崎の山間部にある地名。山あいのため日中でもうす暗く感じられたので、薄暗い状態の比喩として使われた。

肥え背負いは半休み

肥やしの運搬は帰り荷がないから。

肥え畑の痩せメメズ、痩せ畑の肥えメメズ

栄養がある畑のミミズはいつでも食べられるから安心してがつがつ食べないが、痩せ地のミミズは必死で食べるから太っていること。人間にも当てはまる場合がある。

小男の大まら

*まら…陰莖。「小男の大摩耶」(『譬喩尽』)。
おおまや

黄金は屑の中でも光る

本当に価値のあるものはどんな所にあっても頭れること。

志は松の葉に包め

贈るものよりも気持ちの方が大事だから、礼物は少しであつてもするべきだという意。「志は木の葉につむむ」(『世話尽』)。「志ハ松ノ葉」(『諺苑』)。

心二つで身は一つ

「心二つに身は一つ」欲する所二ありて、一方を為せば、一方を廃せざるべからざるを云ふ(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。「心は二つ身は一つ、渡りかねたる二瀬川」(同)とも。

腰巻とナンバンは赤いほど良い

女房の腰巻が色がさめていたり、汚れていたりしてはみつともないからである。*ナンバン…赤唐辛子。

乞食が馬持ったようだ

身分不相応なこと。「乞食ノ馬ヲ買タヤウ」(『諺苑』)。

乞食が米をこぼしたようだ

「ほいとがこごめこぼしたようだ」(三条)とも。あきらめが悪くていつまでもぶつぶつ文句を言っていること。「花子坊主ノ米ヲコボシタヤウニイツマテモツブヤク」(『諺苑』)。「鉢婆が米こぼし

☆

(佐渡兩津)

☆

☆

たやうに「(譬喩尽)」。

乞食に朱椀

身分不相応なこと。『諺苑』にも載せる。物乞いするときに朱椀は似合わない。 *朱椀：朱塗りの立派な椀。

☆

乞食の喧嘩で手間暇かまわぬ

つまらぬ争いに時間をかけていることを批難している。(長岡富曾亀)

乞食の餅焼き

餅の焼き方。早く食べようと絶えずひつくり返したりしていいじつていると、餅は焦げずに良く焼けることからいう。(長岡富曾亀)

乞食の宿はしても、子守の宿はするな

村上に「泥棒に宿貸しても、守り子に宿貸しするな」の諺があり、「子守の集まる所(宿)は大変だ」(『村上市史・民俗編』下巻)からという。おそらく「主の宿しても子持ちの宿しんな」などと同意であろう。(上越三郷)

乞食袋と西風は晩になるほど大きくなる

一日中、物乞いして廻った乞食の袋が、晩になればもらったものでいっばいになるように、西風も夕方には強くなる意。熊代彦太郎著『俚諺辞典』に越後地方の諺とする。

小姑一人鬼千匹

小姑は、何かとうるさい婚家の娘。嫁にとって小姑の存在は鬼千匹にも相当すること。(山北町)

小姑は鬼八疋

(六日町)

こたつの前で当たり前

当たり前の意。「当たり」に、こたつの火にあたる意を掛けたもの。(長岡富曾亀)

こつても我が用に走る

他人の言うことをなかなかかきかかない者でも、いざ自分のことになると積極的に動くこと。 *こつて：「こつてうし」とも。大きな牡牛のこと。(佐渡相川)

言づけは荷にならぬ

言づけは当てにならない意。または、荷物にならない意。(三条)

子ども川端火の用心

子どもの水難と火災に用心せよの意。(長岡富曾亀)

子ども三人産んで親の恩を知る

「子どもは三人生まんと親の恩が分からん」ともいう。(山北町)

子どもと人形はつかうほど良い

文弥人形やのろま人形など人形芝居が盛んな佐渡に生まれた諺。

子どもの喧嘩に親の出る阿呆

(長岡富曾亀)

子ども風の子、大人は火の子

「子供ハ風ノ子」(『諺苑』)。 *大人は火の子…大人になると寒がりになつて火の側が恋しい意。

子どもを持って泣いても、持たずに泣いた人はいない ☆

子どもをもつての苦勞もしいがあること。「子無ふて泣者無ひ」(『譬諭尽』)。

粉糠三升あれば婿に行くな

「糟糠三合有らば入婿はすな」(『譬諭尽』)。

この道ばかりは別

「色は思案のほか」なども。 *この道…男女の事がら。

この村ばかりにや日は照らぬ

日はどこでも照る。どこにでもチャンスはあること。「コ、バカリ日ハ照ズ」(『諺苑』)。

この世におつかないもんは古家の漏りと米びつの舌出し

「古家の漏り」という昔話がある。「大犬、狼よりは古家の漏りがおつかない」(佐渡両津)ともいう。

子は親の肩を見て育つ

(柏崎)

子は親の見習いする

(佐渡相川)

木挽きの一升飯

(長岡富曾亀)

木挽きは製材職人。力仕事だから一升飯を食べないとやつて行けない。

コブシの花さかりはゼンマイの盛り

(長岡)

山菜が出る時節を知る目安。 *ゼンマイ…山菜。

瘤の上の腫れ物

(六日町)

「重荷に小付け」と同じ意で、悪いことが重なることか。

駒のまらの内ぼたき

(六日町)

未詳。 *ぼたき…暴れること。

こみつな男に青菜見せるな

(佐渡相川)

青菜はゆでるとびつくりするほど量が少なくなるからである。「青菜の世帯はこんちの男に見せられない」とも。 *こみつな…けちな。

小麦倒しにみみが出る

*みみ…キノコ。 *小麦倒し…梅雨どき。

米作り飯になるまで水加減

稲作は苗の段階から水管理が大切であることを、飯の炊き方についていわれる知識に掛けて言ったもの。標語的で新しい諺と思わ

れる。

米の黒いのは三徳、四徳

玄米での保存の良さをいったものかというが、未詳。

(柏崎)

子持たずに子くれんな

子どもを育てた経験の無いものは不安だからである。

(長岡富曾亀)

菰を着ても錦を巻け

着物が粗末でも帯が立派だとなんとか見られる意。

(六日町)

肥やしより亭主の足あと

田畑の作物は、肥料よりも手間暇かけることが大切である意。

(長岡)

これも一生、あれも一生

「鱧はむも一期、蝦えびも一期」(『毛吹草』)。

(長岡富曾亀)

ころんだ箸も起こさぬ

気が利かず、また無精者であること。

(長岡富曾亀)

怖いものは馬鹿と借金

(山北町)

困窮は浜から上がる

(柏崎)

「魚がとれないの意」(柏崎市史)という。「飢饉は海から」(『諺苑』)の諺があるように、世の中の困窮はまず漁村から始まることらしい。

困窮年の秋上げ

待ちに待ったうれしい出来事か。

(長岡富曾亀)

困窮年の雑魚

不作のときはささいな物でもありがたい意か。

(長岡富曾亀)

根性よし、父ててなし孕む

若い娘を戒めたもの。「心よはふしてて、無し子をうむ」(『世話尽』)。

☆

根性よしの義理知らず

お人好しだが、大切な世間の付き合いを知らない者のこと。

(佐渡相川)

今度と化け物には会ったことがない

当座の断りに言う「また今度」という言葉をあてにならないこととして嘲ること。

こんにやくの化け物

こんにやくは蒟蒻芋こんぴやくいもから作るが、ほんの少しの芋の量で沢山のこんにやくが出来るので、その驚きをいったもの。

(長岡富曾亀)

碁打つより田打て

遊んでいないでまじめに仕事をせよ、の意。

(佐渡相川)

五月の雷は稲に良い

五月のヒルノトウは嫁に食わずな

(佐渡相川)

*ヒルノトウ…ふきのとう。

五月日照りは困窮のもと

(長岡)

五月日照りは不作になること。

五月豆さすな、六月ごま蒔くな

(佐渡相川)

*豆さす…豆を植えること。

五月わらびは嫁に食わせるな

(六日町)

子ができないからだという(『新発田市史資料』第五卷・民俗)。

後家三代貧乏

(長岡富曾亀)

後家の所帯が三代続けば貧乏になること。なお、熊代彦太郎著『俚諺辞典』には新潟が寡婦の多い土地として「新潟は八百八後家」という諺も載せる。

後家の高なし

(分水)

再婚のときは家柄を気にしないものだという意。

替女五人は縁起が良い

替女は五派に分かれていたという伝えからいう。その揃った数を吉兆に関係つけたもの。

替女と契れば薪割りが上手になる

(十日町)

身持ちの堅い替女を口説き落とすことが困難であることからい

う。

替女の段物のようだ

つまらない長話を言う。替女の歌う段物は演唱時間が長く文句がよく聞き取れなかつたからであろう。小千谷辺りの諺。

替女の荷造り

大きな風呂敷に荷物を詰めたり出したりすること。

替女の初子

物を入れたり出したりしていることらしいが不明。

替女の百人米こゝろ

替女が多くの家から少しずつ門付けにもらった米は、それを食べると健康になるとか、子供に食べさせると丈夫に育つとか言われた。(大山真人『わたしは替女―杉本キクエ口伝』)

替女を後生で泊める

替女に泊まってもらうと後世の功德になるという信仰からである。(『越後風俗志』第五輯)

替女んさの荷のようだ

旅回りする替女の様子から、大きな風呂敷を背負っている女性の様子をいう。

ごまのおそ時き、小豆の早時き

それぞれ適切な種播きの時期をいう。「胡麻の遅時おそき赤豆あづきの速種はやね」
☆

(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

ごまめの歯ぎしり

力のないものが地団駄踏んでもどうにもならないこと。一般にもいう。ごまめは、正月料理に使う堅く干した小イワシ。

☆

五月五日に田植えんな

佐渡にいう禁忌。「四月三日、五月五日とて大悪日、雨すれば洪水す」(『譬喩尽』)。

☆

ごんた、いじろく

良いものも悪いものもすべて一緒にすること。

(村上)

権兵衛の踊り

「骨折つても見栄えのしないこと」(『三条市史・資料編8 民俗』)。

(三条)

ごんべたらるべ

大同小異であること。権兵衛、太郎兵衛は百姓の一般的な名前。

(清里)

西念寺の談義で、まだある

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

(佐渡相川)

財布の底と心の底は人に見せるな

(長岡富曾亀)

逆さに振っても鼻血も出ない

(長岡富曾亀)

作土一寸、米一石

田の土を一寸深く耕せば、一反(十アール)あたり一石(約一五〇キロ)の米の増収が期待できること。

桜切る阿呆に梅切らぬ馬鹿

桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿

酒で殺されるは泥鰌ばかり

泥鰌汁には酒を入れる。酒飲みの自己弁護。

(長岡富曾亀)

酒と朝寝は貧乏の近道

(上越三郷)

鮭の腹、磨いたようだ

腹の中がきれいなこと。「キスの腹、磨いたよう」と同じ。

(柏崎)

酒飲みは台所前つめる

酒代のために家計を圧迫するからである。

(佐渡相川)

酒は酒屋に、魚は納屋に

未詳。「酒は酒屋、餅は餅屋」などの言い換えか。

(柏崎)

酒も嘔んで飲み

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

サシ虫は俵編んで待て

(長岡富曾亀)

「虫ざしは俵 以編んで待つていろ」と同じ。稲に虫が付いたら豊作になる前兆だから俵やカマスを多く作って待つていろ、の意。

五月鯖、嫁に食わすな

(柏崎)

さつこり刺して縁とらぬ

(佐渡相川)

せつかくの苦勞も最後の仕上げをしないと失敗に終わること。画竜点睛を欠く。「尻も結ばぬ糸」(『毛吹草』)に同じ。*さつこり…裂織り。古い布を裂いて作る織物。

さつまいものつるかえし

(上越三郷)

蔓を何べんもかえすと芋が大きくなるという。

里芋は田植えの歌聞いて芽を出す

糸魚川市の諺。

佐十爺白

(佐渡相川)

劍持隼一郎「ごわざお国めぐり…新潟の巻」(『言語生活』1978 No.318)によれば佐渡生まれの諺で、つぎのよじな背景があつたという。両津の片野尾の佐十(さとお)爺さんがある家の白を修理してやるといつて元の状態より悪くしてしまつた。そこで、ある物をなおそうとしてかえつて前よりも悪くすることをおのよじに言うようになったという。「砂糖ジュース」が掛けられている

のだらう。

砂糖屋の前を走つたよう

砂糖屋の前を走つただけでは甘味と無関係だから、食べ物に甘味が足り無いことをいう。

砂糖屋の前素通り

(三条)

甘さが足りないこと。「砂糖屋の前すこかぶり」(村上)ともいう。

里腹七日持つ

☆

通常は「里腹三日」(『譬喩尽』)という。実家に帰ってきたあとでは七日間は空腹を感じない意。婚家ではいつも遠慮して食べない嫁も実家ではたらふく食べてくるからである。

佐渡に無いものは狐と盗人

狂言『佐渡狐』にいうように、佐渡には落はいるが狐はいない。

佐渡の付き合いだおれ

(佐渡相川)

「京の着倒れ、大阪の食い倒れ」などと同じ類の諺で、佐渡では交際費で貧乏になる意。

佐渡は一度行かぬ馬鹿、二度行く馬鹿

「一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿」のもじりだらう。田中つとむ著『新潟のごわざ一〇〇話』に紹介するが、佐渡のために言えば、その魅力は一度では味わい尽くせない島である。

鯖の生きぐさ

☆

鯖は外見が新鮮に見えていても腐敗が早いことからいう。「鯖の生腐とて元来生にても弱き魚なり」(『譬喩尽』)。

去りあとへ行くとも死にあとへ行くな

☆

再婚する場合のことで、離婚した相手は良いが、死別した相手は良くないこと。一般にもいう。「去アトへハイクトモ死アトへハイクナ」(『諺苑』)。

猿が白背負つたようだ

(山古志)

昔話から。体に余る大きな荷物を背負つたときの様子をいう。

猿が柿さわしたようだ

(三条)

まだ食べごろではない食べ物をすぐ出してきて食べようとする。と。とくに「神仏に供えたかと思うと直ぐにおろして食うこと」(『三条市史・資料編8 民俗』)という。

申酉荒れに戌亥風

☆

申と酉の日は海が荒れ、戌と亥の日には風となる。天氣の循環を言う。「申酉荒れて戌温し」(『譬喩尽』)。

騒ぎ西大寺

(六日町)

簡単には解決できないトラブルが発生したときなどに言うことばで、「さあ、騒ぎ西大寺だ」などと使う(城内地区古老の話)。西大寺という寺院で起きた騒動に由来するらしいが、未詳。

三月節句は毒餅、九月節句は福餅

旧暦三月の節句はこれからつらい農作業が待っていることを思う

と餅も美味く思われぬが、秋はそろそろ農作業も終わりで節句の餅もゆつくり味わつて食べられることから、その気持をいっただもの。

三月の花鱈はなだら

(佐渡相川)

未詳。ちなみに「三月の…」という諺の例には「三月の花見風」

「三月の桜サメ」(『諺苑』)などがある。

三月の木の股さけ

思いがけなく降る春の雪のこと。

産後の立派はほめたものでない

(佐渡両津)

三十後家は金貴い

(長岡富會亀)

未詳。『富會亀民俗誌—富會亀郷土誌(上)—』に載せる。

三十三のさね転ばし

(長岡富會亀)

女子三十三歳の厄除けの祝いを「さねかくし」とか「さねおとし」などという(館野清著『魚沼地方方言集』1983)。それと関係した諺。「三十三」の音を「産重産」にかけて出産を忌む風習がある。「三十三のさねもぎ」(六日町)ともいう。なお、男子四十二歳の厄除け祝いは「鞆丸落とし」という(同『魚沼地方方言集』)。池田亨氏によれば魚野川東岸側に顕著な厄除けの祭り、本来は同性同士の飲食であったが近年は同級会になっているという。
*さね…女性性器の陰核。

三十過ぎての女の子の意見

「彼岸過ぎての麦の肥え、三十過ぎての親の意見」に同じ。無意味なこと。

三十後家は刃売り

稀少価値があるから高く売れる意。また、三十歳から一歳ずつ年が増すほど主婦として良くなる意か。

三条男の加茂女

三条（三条市）は美男、加茂（加茂市）は美女が出る意。

三条もんは生き馬の目を抜く

三条以外の地から三条の人々の性格をいつたものだろう。

三寸流れれば清の水

「流れ水、三寸」などと同じ。

三寸流れは大川だ

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

三反田の人あと

未詳。『清里村史』に載せる。

さんちのスジマキ

宮路の祭り（四月二十三日）のころ、苗代のスジマキをしたという。「さんち」は「さんちち」。二十三日の略。

三人、子長者

子どもが三人いれば立派なものだ。

三人づれのひとり乞食

三人で旅すると、一人があぶれがちになる。「三人旅は一人乞食」（六日町）ともいう。なお、江戸時代の『諺苑』には「三人バクチノ一人乞食」という例がある。

三人水は残すな

一つの容器から三人で水を飲むことは葬礼のときに行うことだから、日常では禁忌。

三年味噌に四年大根

味噌の三年目、大根の漬け物の四年目は、それぞれ最も美味しくなるころという。

三べん目の定の目

三度目の正直。三度目が大事。「三度目は定の物」とも。

三宝荒神を立てる

未詳。三宝荒神は龍の神。

サンマ嫁に食わすな

「秋茄子嫁に食わすな」の類。サンマも秋が旬の魚。

三隣亡に屋根葺くな

暦の三隣亡は家の建築を忌む日とされ、この日に家を建てると

（長岡富曾亀）

（長岡）

（三条）

（長岡富曾亀）

（佐渡相川）

（長岡富曾亀）

（佐渡相川）

（佐渡相川）

隣り近所三軒を火災で焼くという俗信がある。

在郷の大飯食い

(長岡富曾亀)

*在郷：田舎（田舎者）。

雑魚の魚まじり

☆

魚の群れに雑魚が混じっている状態で、集団の中にはつまらない人間も混じっていることの譬え。一般にも言う。「ゴマメノト、マジリ」、「シヤコノト、マジリ」（『諺苑』）。

座頭の小便向こう見ず

(長岡富曾亀)

向こう見ずを強調したもの。座頭は目が見えない。

箆で水汲む

やつても無駄なこと。

しいな半分、実半分

(佐渡相川)

未詳。*しいな：実が充分はいらぬ稲穂。

椎谷の市でうますぎる

(柏崎)

椎谷は、馬市が立った柏崎の地名。「馬過ぎる」に「美味過ぎる」を掛けたもの。

椎谷の馬の糞ながし

(長岡)

七月上旬の大雨。七月一日は椎谷で馬市が立ったという。「高野の大屎流し（三月廿二日の雨を云也）」（『譬喩尽』）。

椎谷の観音さんのようで沢山の人

(柏崎)

塩と女の過ぎたのはどうにもならぬ

(三条)

*塩が過ぎる：塩辛い意。

塩引余計食った

(三条)

「年取り魚をいっぱい食った」、「門松余計くぐる」などと同じ。年功者をいう。

四角に臭うコタツ尻

(長岡)

四角の座敷を丸く掃く

横着者の仕事ぶりをいう。また、こまかなところまで気持ちが行き届かない意。一般にも言う。

四月とうびる嫁に食わずな

*とうびる：野草の野蒜。

四月のアブラメ嫁に食わせるな

(佐渡相川)

*アブラメ：沿岸の岩場にすむ魚、アイナメ。

四月農には帷子着て、五月農にはぬのこを着ろ

四月は寒くとも農作業がきついから汗をかくので薄着が良く、五月の農作業は比較的楽だから厚着をしないと寒いこと。

四月の日に心ない者に使われるな、十月の日に心ない者を
使うな

☆
四月は日が長いからうつつかりするとその分長時間労働をすること
になるし、また十月は日が短いから早めに仕事を切り上げること
になることからである。「春の日、人に使われんな：：」ともい
う。「四月の中の十日に心無く人に雇れな」、「十月の中の十日に
心無く人を雇ふな」(「譬喩尽」)。

死ぎ馬に鍼はり

(清里)
手遅れでなにもならないこと。「葬式すんでの医者話」と同じ。

仕事するより工面

(長岡富曾亀)
「段取り八分」ともいう。やみくもに仕事をしてても能率が上が
らないこと。

仕事は大勢、うまいもんは小せい

☆
仕事は大勢でする方が早く終わるし、美味しいものは少ない人数の
方が多く食べられて良い意。「仕事八大勢デシロ、食物ハ小勢デ
クハ」(「諺苑」)。また「仕事は大勢、うまいもんは一人」ともい
い、利己主義者を皮肉つた意もある。「まんまは大将、仕事は少
将」とも類似。

仕事は薬、だお者の病氣

仕事は体を動かしているから健康によいこと。
*だお者もん…：怠け
者。

仕事は仕舞いが大事

(長岡富曾亀)

仕事はノユギリ引く間まにせよ

物を運搬するような場合、行きも帰りも手ぶらにならないよう
に効率よく働くべきことをいう。

仕事は半丁、口弁慶

口ばかり達者で仕事ができない人のこと。
*半丁…：半人前。
(巻)

四十過ぎての道楽と七つ下りの雨は止らぬ
(長岡富曾亀)

上下逆にもいう。

四十女と春降る雪は固そうでとけやすい

四十くらがりの五十ばつちり
(長岡)

四十歳ころは視力が落ちるが五十歳になるとかえって良くなるこ
と。

四十九のくどき子
(長岡富曾亀)

「十九厄年やしねえでも孕む」「四十七の産み仕舞い」「四十八
の恥かきつ子」「八十八のとぼきり(子袋)」など女性の年齢と
関係した出産の諺。産み仕舞いとされた四十七歳を過ぎての高
齢出産についていったもの。

四十腰の五十肩

(長岡)

四十歳には腰、五十歳には肩が痛くなる。

四十後家がメがいい

(長岡富曾亀)

再婚女性は四十歳ぐらいが人生経験豊かで良い意か。

四十七の産みじまい

(長岡富曾亀)

女性は四十七歳までが出産年齢である意。

四十二のきんたま落とし

(長岡富曾亀)

前出「三十三のさね転ばし」参照。「四十二の寧丸もぎ」(六日町)とも。

四十二の二つ子

☆

「四十二の二歳子は親に祟る」(『譬喩尽』)。「愚俗四十一歳ノ時ノ産ル子翌年ニ歳ナルヲ四十二ノ二ツ兒ト云テ棄ル真似ヲシテ他人ニ拾ヒトラセ取テソダツ」(『諺苑』)。

四十の手つ暗がり

(長岡富曾亀)

近くが見えづらい老眼をいう。

四十八の恥かき子

(長岡富曾亀)

高齢になってできた子で恥ずかしい意。

下田男と栃尾女

下田村と栃尾市は、それぞれ美男美女が出るところという。

舌はわざわいの門

(山北町)

七が盒蓋こわすよだ

(柏崎)

乱暴なことらしいが、未詳。*七…人名。*盒…ふた付の容器。

七月照りの七乞食

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

七月に茄子を植えると仏茄子

(上越三郷)

茄子の植え時の禁忌。

七月わらび嫁に食わすな

(村上)

七が鉄砲、打ちつ放し

(柏崎)

無分別なこと。「七の鉄砲、無鉄砲」とも。「馬鹿ノ鉄砲ウツタヤウ」(『諺苑』)などと同類。

七こに八こ

(佐渡相川)

泣きつ面に蜂、の意という。

七夕立あれば上作

(長岡富曾亀)

知ったかぶりの恥かき

(長岡富曾亀)

しつぺたとほつぺたの違い

(長岡)

同じようであるが違いの大きいもの。

死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

それがあれば満足の意。「減らぬものなら錢一貫」、「負わず借らずに子は三人」(『譬喩尽』)。なお、「へらぬものなら金百両、死なぬものなら子一人」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1969)ならば、金は減るものだから百両でも足らず、子は死ぬこともあるから一人では足りない、の意になる。

死なば三月

西行が「願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎ(二月)の望月の頃」(山家集)と詠んだ季節は、雪国ではひと月遅れの三月あたりに当たる。

死なば盆前、飲まば飯前

(長岡富會亀)

どうせ死ぬなら盆前が良い、どうせ酒を飲むなら飯前が良い、とのこと。

死人の部屋には猫を入れるな

(山北町)

葬礼の禁忌。

死ぬ死ぬというて死んだもんじゃない

(長岡富會亀)

死ぬ死ぬというのは同情を買うためや単なる脅し文句にすぎないこと。

死ぬ死ぬの長生き

(長岡)

死にそうな人ほど長生きすること。

死ぬ者目から

(佐渡相川)

「人生は目から終る」ともいう。

柴切ったあとには嫁に拾わせるな

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

しば草かぶつてから人のことをいえ

(佐渡相川)

人の評価は死んだあとでようやく定まること。相川の「二見地区では土葬の時、しばをかぶせる」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注) 習俗があった。

四分一

(山古志)

「四分の一の利息を取ることから強欲のたとえ」(『山古志村史』注)。

渋柿も串柿にすれば甘くなる

(柏崎)

ちよつと手を加えたり工夫をすれば物は良くなる意か。

島が近く見えれば雨が降る

(山北町)

「山が近くに見えると雨」(上越・三郷)と同じ。 *島：粟島をいう。

始末もごまつもならん

(長岡富會亀)

片づけられないこと。「(五まつ)は、(しまつ)の(し)を四

に解して続けた語呂合わせの造語。

霜月の糊つけ日和

(長岡)

十一月の晴天にはハリ板に糊をつけて洗い貼りをしたことからいう。

借金は質においたほうがいい

☆

そうはできないが、そうありたいこと。一般に「借金を質に置く」といい、無理な金の工面をする譬え(尚学図書編『故事俗信』とわざ大辞典』1982 小学館刊)。「借金ヲ質ニ居」(『諺苑』)。

しゃべらぬほど利巧なことはない

(山北町)

「沈黙は金」の意。

しゃもじは耳かきにならぬ

(六日町)

大が小を兼ねない場合もあること。

しゅうとめと麦は踏んだほどよい

☆

麦の芽が出るころの麦踏みの農作業の大切さを教えたもの。「舅の門と麦畑は踏むほど善し」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)ともいう。「舅の門」を踏むとは、舅の家を訪問すること。よく訪問することでほめられるからである。「しゅうとめ」については、葱の芽や蒔の臺の俗語とする説もある。

「俗に葱花の芽、蒔の臺をしゅうとめといふ。麦としゅうとめは踏かよいといふ俗語も此をいへる也。めは芽の義なり」(谷川士清編著『倭訓栞』)。

姑の十七、見たことない

(佐渡相川)

嫁に向かつて自分が若いときのことをあれこれ言っている姑を皮肉ったもの。

姑婆さとこたつやぐらの足

(六日町)

必要だがじゃまになるもの、の意。

姑婆さと粟畑は踏んづけた程よい

(六日町)

「舅の門と麦畑は踏むほど善し」の転訛であろう。

姑より利口な嫁は姑苦勞する

(上越三郷)

主婦は家庭の太陽

(上越三郷)

標語的で新しい諺と思われる。

春風満作

(長岡富曾亀)

春風の強い年は作がよいこと。「順風満帆」のもじりか。

春風秋米

「春風満作」と同意で、春に風が多い年は豊作だという意。

正月十一日の夜は女に髪結わせぬ

(佐渡相川)

「沖でイカ場道具が乱れて困る」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)からという。

正月に女が最初に死ぬと七墓つく

*七墓つく…村で七人が亡くなる意。「正月に女の葬を出せば其町其年に七人葬を出だす。咒て人形七ツ川へ流すといへり」(『譬喩尽』)。

しょうたれじゃれこき

洒落こきに限つて無精者であることをいう。*しょうたれ…怠惰で、だらしない人。無精者。*じゃれこき…洒落こき。着飾ること。

正得盆損

神社は正月に得をして、盆に損をする。「寺方は盆徳正損」(『譬喩尽』)。

庄屋の跡は茄子畑

栄枯盛衰の世の中。

知らざ半値

知らないものは半分の値段に見積もつておけ、の意。「知らぬことは半分直」(『譬喩尽』)。

知らで問うのが法の式、知って問うのが仁義問い

「知って問うは仁義、知らで問うは法の道」ともいう。(佐渡相川)

虱と借金は隠せば殖える

(山北町)

尻と言われても口と言われるな

「人の尻馬に乗る愚か者とは言われても、先に立つて煽動している張本人と言われぬようにせよ」(『故事俗信ことわざ大辞典』)の意。「尻トハイハル、トモロトイハル、ナ」(『諺苑』)。

シロウマの一尋飲み

大酒飲みのこと。*シロウマ…盃。

白紙も信仰から

「鯛の頭も信心から」と同じ。

白飯に豆腐汁

大に馳走の意。

師走の業さらし貝

「寒のアワビの業さらし」とも。「業さらし」には、やつかいものの意があるが、不明。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

師走の八日吹雪

「陰曆十二月には八日ずつ続けぶぶく」(『佐渡相川の歴史・資料集九』)という。「師走の八日吹とて八日宛統けて風吹もの」(『譬喩尽』)。

四月三日に種蒔くな

「四月三日、五月五日とて大悪日、雨すれば洪水す」(『譬喩尽』)。

真言と盃はくるほど良い

(佐渡両津)

*くる…盃が自分に巡って来る意と、真言を重ねて唱える(繰る)ほど呪文の効果がある意を掛けたもの。

身上も寵も立たん

(長岡富會亀)

一般にもいう。生計が立たないこと。寵は一家の暮らしの象徴。

身上が太れば体も太る

(長岡富會亀)

栄養状態も良くなるからであろう。

身上と盃はでつかいほどよい

(長岡)

酒を飲むときにいう。酒飲みのみ。

身上見るより倅見い

(佐渡相川)

嫁にやるときは家の財産よりも婿の人間性を見て決めよという意。

神先仏後

(佐渡相川)

祭る順序か。

身代とぼた餅は大きいが良い

(佐渡兩津)

死んだ子は利口

(長岡富會亀)

死んだ子を惜しむ親の気持ち。実際以上に良く思われるものがあること。

死んだ先を見たもんじゃない

(長岡富會亀)

死んだちや臭い

(佐渡相川)

話だけきいてもそんな気になること。

死んだもんの因果

(長岡富會亀)

一般にもいう。死んでしまつては悪い運命だと諦めるしかないこと。死んだらおしまいだ、の意。

死んだんの死に損

(六日町)

*死んだんの…死んだ者の。

真鍮らつぱ

(三条)

ほら吹き意。

死んで死に損ないは無い

(六日町)

*死に損ない…死ぬべきときに死ねないこと。

辛抱する木に金がなる

(山北町)

つらい生活も我慢して働くことで財産ができる意。「木」は、金の成る木に、その気の「氣」をかけたもの。

新米まんまにとろろ汁

(長岡)

新米のご飯に長芋汁をかけたものは、最高のご馳走。

信用は無限の資本なり

(上越三郷)

爺貯める、息子樂する、孫使う

☆

「祖父は辛勤する、子は樂する、孫の代は乞食する」(『譬喩尽』)。

地蔵様に毛の生えたような

(六日町)

その人にそぐわない非常に滑稽な服装のこと(城内地区古老の話)。

自分勝手と紋付きはすたらない

(上越三郷)

未詳。『ふる里に伝わる 諺、いいならわし、格言』に載せる。

自慢子慢、馬鹿の家

(上越三郷)

子の自慢ばかりしているのは馬鹿の家。

自慢は知恵の行き止まり

☆

自慢することは良い知恵をひねり出すことの放棄につながる。

「自慢は知恵の行き当り」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』199)。
一般にも言う。

蛇がかんばちでも構わない

(六日町)

追い詰められて開き直ったときのことば(城内地区古老の話)。

*かんばち…スズメバチのこと。

蛇に蠅

(村上)

容易なこと。

十月の別れバエ

最後までうるさく飛び回っているハエ。

十九の古婆、二十五の小野郎

女の十九歳、男の二十五歳はそれぞれ厄年。女は十九でも老婆、男は二十五になってもまだ青二才の意か。

十九厄年やしねえでも孕む

(六日町)

女十九歳の厄年には性行為をしなくとも子を孕む意。妊娠しや
すい年齢であること。

十五夜の餅、喰わんうちは作ほめん

(長岡)

十五夜になるまでは収穫の見通しが立たないこと。

十月の小春

☆

陰曆十月をいう。「十月ノ小六月―十月ノ小春トモ云」(『諺苑』)。

十月の五、六月

☆

「十月の小六月」が訛つたものか。十月ごろの小春びよりをいう。

「小六月―十月ヲ云」(『諺苑』)。

十月のテツカリ、ババコロシ

(長岡)

十月の天気続きは農家の仕事が死ぬほど多忙になる意。

上戸毒知らず、下戸薬知らず

(佐渡相川)

酒呑みは酒の害を知らないこと、また酒の飲めない人は酒が薬に
なることを知らないこと。一般にも言う。

上州の着倒れ、越後の食い倒れ

(長岡富會亀)

上手なうそより下手なまこと

(上越三郷)

女郎買いのぬかみそ菜

☆

「女郎買いの尻切れ草履」と同じ。外で派手なようでも家では質素でけちに暮らす人。「傾城買の糠味噌汁」(『譬喩尽』)。

女郎買いの草履錢こぎり

(佐渡相川)

「女郎買いのぬかみそ菜」と同じ。*こぎり…値切ること。

人生は目から終る

(上越三郷)

老化を一番早く感じるのは視力だから。「死ぬ者目から」ともいう。

西瓜と嬥の腰巻は赤いほど良い

「腰巻とナンバンは赤いほど良い」と同じ。

水神様過ぎれば鍋の中のいおも逃げる

(村上)

「十一月半ばになると、急激に鮭の遡上が少なくなる」(『村上市史・民俗編』下巻)ことをいう。*水神様…十一月十五日の年中行事。*いお…村上地方で鮭のこと。

据え風呂で牛蒡洗うよう

☆

『城内郷土誌』に「大きな○○に小さな○○」と伏せ字で注記。

卑猥な諺。『諺苑』にも出。

好きがたりとタスの紐

(六日町)

好いた者同士の縁組みは長続きしないこと。親が決めた結婚の方が良い意。*タス…「藁で作った大きな頭陀囊のやうなもの。摘取った桑の葉などを入れる」(小林存著『越後方言考』1975)。テゴ、フゴともいい、藁ダス、縄ダスや、アケビ蔓・フジ蔓製などさまざまの素材を編んで作る(池田亨氏)。その紐は切れやすからいう。

すきつ腹にまずいものなし

(長岡富會亀)

杉の木と男の子は育たない

新潟平野の砂地には松が多く杉はあまりない。男の意気地なさをそれに掛けていつたもの。「新潟にては杉と男はたぐぬ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

すけごのあしでも喰いたい

(分水)

魚が大好きな人をいう。*すけご…魚の行商人。

スケトウの嫁入り

(佐渡)

腹に子(たらこ)を宿しているスケトウ鱈を比喻にした、できちゃった結婚のこと(田中つとむ著『新潟のことわざ』一〇〇話)という。

雀子に針

(南魚沼)

貧乏人をいじめること。

雀の酒盛りのようだ

(佐渡両津)

一般にもいう。つまらぬ者たちのにぎやかな酒宴の様子。

捨て子に産土神

(佐渡両津)

捨て子にも必ず養い親が付くこと。世の中はなんとか渡つていけるものだ、という意。

酔でも蒟蒻でも食われない

(六日町)

どうしようもないこと。

脛一本、まら一本

(六日町)

男のからだ一つの内意。

脛に疵あれば竹藪は通れぬ

☆

「脛に疵ある者は、竹藪に入る能はず」、脛に疵持ちて笹原歩行

かれず」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1969)。悪事を隠している

者は心にやましきがあるから人中に交われない意。ただし、『諺

苑』には「脛二瘡モチャ笹原走ル」とある。

脛に毛の無いんに金貸すな

(六日町)

すみがかんじん

(清里)

角が肝心の意か。

住むば山川

(長岡)

住むなら山と川のあるところがよい意。

相撲取りは負けた話はせぬ

(佐渡両津)

相撲取りは自慢話ばかりする傾向にあること。

住もうばおどこの犬

(巻)

どうせ住むなら旦那様の家の犬がいい意。

相撲場のくずれたよう

(佐渡相川)

喚声などで騒がしいさま。

守門岳の雪が消えるとツアツアの財布がからっぽになる

(栃尾)

栃尾市の諺。「弥彦山の雪が無くなると父の財布も空になる」と

同類。*ツアツア：ツアーツア。父親や夫、家の主人をいう。

するようにならないで、なるようになる

(長岡富曾亀)

ものごとは思い通りにはなかなか行かないで、自然の流れにそつ

て行くものであること。「為すようにならないで、なるよう

になる」ともいう。

せいふろで尻こいた

(長岡富曾亀)

意味不明なことをぶつぶつ言うこと。*せいふろ…据え風呂。

せいふろの上がりたては親でも惚れる

(長岡富曾亀)

せいふろの上がりたては親でも惚れる

(長岡富曾亀)

入浴後の若い娘には色気が出ることをいう。

せかぬ者の節句ばたらき

(佐渡相川)

「どうずり者の節句働き」(山古志村)なども。

関田の風雲、妙高の笠雲

(上越三郷)

雨や風になる予兆。 *関田：地名。

石仏にものを言わせる

☆

口が堅い者、口数の少ない者に話をさせることの困難さをいうか。
『諺苑』にも載せる。

世間はるより障子はれ

(佐渡相川)

*世間はる…見栄をはる。

せせなぎ穿るとミニミスが出る

☆

「穢い所をほぢくると蚯蚓出る——人のあらを穿鑿すると、種々の醜汚なる所が益々生ずるとの義」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』(1906)。 *せせなぎ…溝。

せちうどが三晩泊まれば、猫の面が三尺になる (六日町)

「せちうど」は、正月三が日あたりに嫁(婿)の家へ餅を持って年始泊まりに行く客のこと。小正月に行く場合は「こちゆうど」という。二泊三日ぐらいで帰るのが良いとされた。それ以上の場合は猫もうんざりすること。(池田亨氏教示) 「冬ノ雨が三日降ルト猫ノ顔ガ三尺ノビル」(『諺苑』)。

なお、「寒の雨が三日続けば猫の顔が三尺になる」(暖かくて猫

ものんびりする) などという諺もある。

節季ナンズの春ムカシ

節季は「十二月中頃から末にかけての呼称」(渡辺富美雄編『新潟県方言辞典・中越編』)。節季には謎々を掛けるものだし、正月には昔話を語るものだという意。

節季の風邪は買うてもひけ

(長岡富會亀)

一般にも言う。節季は商家の決算期で多忙だから休めないが、風邪をひけば公然と休めるからである。

節季の金は羽が生えて飛ぶ

(長岡富會亀)

年末は何かと出費がかさむ意。

節句の菖蒲の枯れるよう、六日の菖蒲の流れるよう

(六日町)

五月五日に晴天、六日に雨のときは豊作という。

節句働きは薬代になる

(柏崎)

普段働かず、わざわざ人が休む節句に働いても、体をこわして薬代を得るのがせいぜいだという意。

せつない時の神頼み

「苦しいときの神頼み」と同じ。

節分の夜早く寝ると年を取る

(佐渡相川)

節分は立春の日の前日で、年の変わり目とも考えられていた。ち

ようど大晦日のようなものであり、大晦日は夜遅くまで起きている習慣があったことからいう。

せやみこきの節句ばたらき

(山北町)

*せやみこき…怠け者。

世話焼き(ごう)焼き

(清里)

口うるさくて人に嫌われる老婆のことを「世話焼き(ごう)焼き婆」ともいう。

千刈り百姓四五間

(佐渡相川)

「佐渡では、中流の農家は奥行き四間、間口五間(または六間)が普通であることをいう」(鈴木棠三編『新編故事ことわざ辞典』1992)。

千刈田作るより一人口はなせ

(佐渡相川)

「千刈田」を作るよりも子ども一人奉公に出して口減らししたほうが、家の経済的な負担が軽くなる意。千刈田は一町歩の水田。

千刈り百姓食うや食わず

(佐渡両津)

一町歩の田があつても、生計を立ててゆくにはきびしいこと。

千手市、桃買い

(十日町)

千手市は旧川西町(十日町市)の千手に立った八月七日から五日間の雑貨市で、お盆の買い物客で賑わったという。類似の諺に「上野市、魚買い」がある。

雪隠大工

(長岡富會亀)

下手な大工のこと。

雪隠で尻ぬごわず

(長岡富會亀)

きちんと決まりをつけないうこと。

千の倉より子は宝

(山北町)

千服呑んでも立ちタバコ、軒端の下でも下り休み

(荒川町)

未詳。『荒川町郷土史』に載せる。

千三つ百ぬらり

(佐渡相川)

千三つは嘘のこと。「せんずらり」とも言う(館野清著『魚沼地方方言集』1982)。「百ぬらり」は不明。

千三つ万から

(柏崎)

千に三つも本当のことを言わないほら吹きのこと。

千両のかたに七もり笠一かい

(長岡富會亀)

大金をつまらないものに換えたこと。「百両のかたに編笠一蓋」と同じ。

ぜいきん役なし

(佐渡相川)

「のんびりと仕事もなく暮らすこと」(『佐渡相川の歴史・資料

集九』注。

銭金は他人

親子でも金銭上のごことは他人と同じだということ。「銭金に親子なし」ともいう。

銭がホツポ突つづく

(清里)

「戦前の子どもは銭を持たなかつたので、祭りなどに親から銭をもらうと、その銭がホツポ(懐)を突つついて、何を買うかを促すところから、貧乏人の一時的な金持ちの、胸がときめくわくわくした状態をいいます」(三郷地区のお年寄りの話)。*ホツポ…ふところ(懐中)の幼児語。

銭と名がつきやヒゼンでもいい

(長岡富曾亀)

金銭欲が強い人のこと。*ヒゼン…皮膚(皮膚病)か。

銭とらん仕事はしても口食わん仕事はするな

(佐渡相川)

*口食わん…食べて行けないこと。

銭取りやんめい、死にやんめい

(長岡富曾亀)

「銭取り病、死に病」と同じ。儲けることに夢中になると命も失いかねないことか。*やんめい…病やまひ。

銭は有つても苦勞、無うても苦勞

(長岡富曾亀)

善根七村鍋かけず

(柏崎)

「善根は、久之木・佐之久・飛岡・石川・久木太・坂の下・大の田、の七村を総称した地名。鍋かけずとは、家族全員が冠婚葬祭などに招かれて相手先で食事をするので、その日一日は食事のために家で鍋をかけることがないこと。つまり、善根の人々は親戚同様の深い付き合いをしていたこと」(地元の人話)という。相互扶助が行なわれていた地である。

ゼンマイ山には嫁をやれ、コゴミ山へは娘をやれ

*ゼンマイ、コゴミ…山菜。ゼンマイは山の急斜面などに生えているが、コゴミは苦勞しないでも採れる所に生えている。

葬式すんでの医者話

早朝姑のにつこりは赤信号

(上越三郷)

「朝げのチャツカリ、姑のニツカリ」を近代的に言い換えたもの。

総領の十五は貧乏の盛り

(上越三郷)

まだ家計の足しにもならず、何かと出費が重なるからであろう。

葬礼場の犬の糞

人が近づかない意の悪口という(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)。

そうれん泣きのよう

(佐渡相川)

葬儀では長く泣くから、なかなか泣きやまないことをいう。

*そうれん…葬礼。

葬礼場のすかんぼ

(三条)

「瘦せていて背ばかり高い者のこと」(『三条市史・資料編8 民俗』)。

*すかんぼ…野草。食べると酸っぱい味がする。

そうれん草鞋わらじのよう

(佐渡相川)

出来の悪い草鞋のこと。

息災が金儲け

(佐渡相川)

健康第一。

底無し上戸

(山北町)

大酒飲み。

そそう手早

(清里)

仕事は速いが、できばえが粗末なこと。

曾地の惣太か花田の花蔵、悪田の仁まだか春日のあんばい

(柏崎)

未詳。曾地・花田・悪田・春日は、いずれも柏崎の地名。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

曾地の反り齒か花田の鼻糞、吉井の夜ん糞

(柏崎)

それぞれの土地の悪口言葉、か。曾地・花田・吉井は、いずれも柏崎の地名。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

袖の下の情け

(佐渡両津)

「袖の下」は一般に賄賂のことだが、人知れずかける情けの意か。

外が明るくなれば、家の中は暗くなる

(三条)

照明が無かつた時代のことである。

外孫かわいがる気があつたら、犬の子かわいがれ

(佐渡相川)

所詮外孫は余所の子だということ。「孫を養かふより狗飼まわへ」(『譬喩尽』)とは少し違う。

ソバははりかけ畑に蒔け

*はりかけ…山を切り開いた痩せ地。

ソバは日照りに蒔け

反り鎌にこごみ鉈

☆

鎌の刃はあまり湾曲していないほうが鋭利であり、逆に鉈は弓形になっている所がよく湾曲していれば木や竹を切るときに鋭利であること、という(熊代彦太郎著『俚諺辞典』196)。逆に「こごみ鉈に反り鎌」ともいう。

損して得とくとれ

☆

少々の損を恐れていては儲けることができないこと。損したことが却つて後の得になることもある意。「損シテ徳ヲトレー損ヲシテ利ヲミヨ」(『諺苑』)。

損は身代わり

(山北町)

損してもその替わり自分の身が安全ならば幸いとすべきこと。

死馬引きにもお庚申の塔にも

(六日町)

「お講にもソウデンにもこれ一つ」、また「庚申にも茅刈りにも」と同じく、着替えを持たない一張羅であること。

雑炊の塩辛いと女の気の強いは持ちあつかい

(長岡富會亀)

*持ちあつかい…もてあますこと。

雑炊の焦げる臭いのする所へ嫁くれるな

(六日町)

雑炊は水をたくさん入れて煮るから、そう簡単に焦げるものではない。それを焦がすのだからよほど経済をわきまえない家だといふこと。

雑炊の焦げつきは嫁に、お粥の焦げつきは娘にくれる

(六日町)

雑炊のこびつき嫁に食わせんな

(山古志)

「暖め雑炊嫁に喰はすな」(『譬喩尽』)とも。*こびつき…鍋や釜に焦げ付いた飯。

太閤様でも子守はいやだ

(長岡富會亀)

大食は短命

(佐渡兩津)

大漁不漁は三年周期

(寺泊)

田植え女に秋男

(長岡富會亀)

「五月女に秋男」ともいう。田植えのころは女たちが中心となって働き、収穫期には男たちが中心となつて働くことからいう。一般にもいう。

高い所へ箕もち

(柏崎)

もともと富んでいる人にさらに利益を加えること。「高い所へ土持ち」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。

高いものは火の見やぐらと源助そば

(柏崎)

*源助そば…未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

高く止まったお寺の鳥

(長岡富會亀)

つまらぬ人間の傲慢な様子。また、もったいぶった様子をいう。いわゆる、お高くとまる意。

高町からもらった猫のようだ

(柏崎)

おとなしいこと。*高町…柏崎に隣接する刈羽村に上高町、下高町の地名がある。

宝、身につけよ

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

竹に花が咲くと枯れる

(山北町)

竹にはめつたに花が咲かない。花が咲くと実がなり食用となる。

竹之高地のモ、種芋原のハチャ、虫亀のネラ、蓬平の

アキヤ

古志郡山古志村の地名を並べ、それぞれの村の特色ある方言を述べたもの。

竹の花は凶作

竹は親より子が育つ

「筍ノ親マサリ」(『諺苑』)。

☆

蛸と一つで我が身食う

(佐渡相川)

財産や貯えを取り崩して生活すること。

田下も畦^{あぜ}下も同じ

(清里)

いずれにせよ、どのみち同じだといふこと。「畦走つたも田走つたも同じこと」とか「田から出るも畦から出るも同じこと」と同類。

たたかれた者が目が寝れても、たたいた者の目は寝れん

(佐渡相川)

この場合は、愛の鞭としてたたいた者のことであろう。悪意をも

つてたたいた場合はむしろ逆になる。

たたけ山火事、掘れ貉

(六日町)

山火事を消す方法。火をたたき、土を掘って延焼を止める。

ただほど安いもんはない

(長岡富曾亀)

逆に「ただほど高いもんはない」ともいう。

立ち聞きするより後生願え

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

達者たきぎ焚かず

(六日町)

「紺屋の白袴」と同じ。「た(達者) … た(薪) … た(焚かず) …」と頭韻を踏む。

達者のしくじりや菰^{こも}かぶる

(六日町)

*菰かぶる…乞食になること。

立っている者は親でも使え

(山北町)

辰に裁つて巳に着い

(佐渡相川)

着物は辰の日に裁つて巳の日に着ると縁起が良いこと。

たて木羽

(柏崎)

「木羽」は、木^こつ端^はか。囲炉裏での燃やし方をいう。「木もと葦^わうら」などと同じ。

縦膳は据えるな

(山北町)

お膳の木目が縦になるように置くのは葬式するとき。

縦の物を横にもしない

横着者、無精者。

田天王に田んぼに入ると目が潰れる

*田天王…六月七日の田の神を祭る日。

田中の医者どん、もとより悪い

(長岡)

田舎の藪医者は人の病気を治療前よりも悪くすること。

棚元で薬罐引きずる

(山古志)

お茶ばかり飲んでいること。

他人の飯にや骨がある

(長岡富曾亀)

*骨…トゲ。食事にじゃまになる魚の小骨。

頼めば越後から米搗ぎに来る

(長岡富曾亀)

人は熱心に頼まれればきつと引き受けること。越後の出稼ぎ者の仕事には米搗ぎもあった。福島方面でも言われる諺。なお、柏崎の山間部では逆に「頼まれれば江戸へ米搗ぎでも行く」と誇らしげに言うところ(剣持隼一郎「こゝろわざお国めぐり」3新潟の巻、『言語生活』1978 No.318)。

頼めば鬼も人喰わぬ

☆

「鬼も頼めば人食はぬ」(『譬喩尽』)。人を食う鬼でも、食ってくれと頼むとかえつて食わない意。また、どんなに冷酷な人間でも必死にお願いすれば慈悲心をもって対応してくれるものだということ。

田畑荒らしても子は荒らすな

仕事よりも育児を大切にせよ、の意。

たまごに目鼻

色白で器量がよいこと。一般にも言う。

たまたま起きて猫踏みつぶす

(佐渡相川)

未詳。運のないことか。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

鱈場のくつあんこ

(寺泊)

思いがけなくうまいものにありついたときのこと。
*くつあんこ…魚。

鱈場のだるま烏賊

(寺泊)

思いがけなくうまいものにありついたときのこと。

垂れすだれ育ち

(三条)

戸を開けて閉めない者をとがめるときなどという。
*垂れすだれ…乞食の小屋の入口にある垂れ藁のこと。

俵に十俵さべる

(三条)

よくしゃべる意。 *さべる…しゃべる。

田を歩んでも、岡を歩んでも

(六日町)

「畦走つたも田走つたも同じ」と同じ。

タンスは枕のかわりにならぬ

(佐渡相川)

大は小兼ねるとはいえ、用途の違うものは代用できない意。

代がかわれれば世が変わる

(上越三郷)

世の中の変化を実感できるのは上に立つ者が代替わりするときで、家庭の中でも同じである。

大工ごころと盗みごころの無い人はいない

(佐渡相川)

「色気と盗人氣のない者はない」ともいう。また「泥棒せぬは氏神ばかり」などともいう。

大黒の脛へ味噌

(南魚沼)

金持ちや有力者に更に利益を与えること。「雀子に針」の逆。「長者ノ脛へ味噌ヲ塗ル」(『諺苑』)。

大根盆前、ソバ盆後

種子の蒔き時。

大根蒔きは土用

(村上)

「土用の初日に播いたものを」入りぐちまぎ、二日目、三日目、四日目のものを「一番まぎ」、「三番まぎ」などという(『村上市史・民

俗編』下巻)。

大師講の跡隠し雪

(佐渡相川)

弘法大師伝説によつて、大師講のころ降る雪をいう。 *大師講

：旧暦十一月二十三日から同月二十四日にかけての年中行事。

大師講様過ぎれば鍋の中のいおも逃げる

(村上)

「水神様過ぎれば鍋の中のおも逃げる」と同じく、鮭の遡上が少なくなることをいう。大師講を境目とする諺に「大師講の小豆粥を食て蠅は去る」(『譬喩尽』)などあり。

大難が小難

(佐渡相川)

災難もこれくらいで良かったと慰めるときなどという。

だおもんのいつときわざ

(佐渡相川)

怠け者が手間暇かけず一気に雑な仕事をすることをいう。

*だおもん…怠け者。

抱こうと言えば負われる

(佐渡両津)

一般に「抱こうと言えばおぶわれよう」といい、つけあがつて甘えること。

だしの風は山の風

(寺泊)

黙り虫壁を破る

(山北町)

無口な人が話し合いの最後に重大な発言をするなど、意外な一

面を表すこと。或いは、無口な人がかえって機敏な行動をとること。「だんまりの壁破り」ともいう。

団子雑炊は八人で火たけ

(長岡富曾亀)

「ソバの火は八人で燃やせ」などの諺と同じく、団子雑炊は強火で煮るべきだという意か(池田亨氏)。

団子なずきの餅ねむり

(新津)

未詳。『新津市史』に載せる。

段取り八分

(上越三郷)

仕事をするときは工夫が大切であること。「仕事するより工面」ともいう。

旦那さんと七助

(柏崎)

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

だんまりの壁破り

(長岡)

無口な人が意外な大声を出したりして周囲を驚かせること。

小さいナンバン辛い

(佐渡相川)

山椒は小粒でびりりと辛い、に同じ。「大きい大根辛くない」の逆。*ナンバン…唐辛子。

近い仲にも礼儀

(佐渡両津)

気心の知れた親友であつても礼儀は欠かさない、昔はそんな年寄りが多くいた。

近い火で手あぶる

☆

近火で手をあぶる、ともいう。他の災難を意に介さないこと、または眼前の小さな計略をいう(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

近くに嫁ぐ人は七つの徳をもっている

(上越三郷)

昔の嫁の立場からすれば、実家が近いことは何かと都合が良かったからいう。

近くの神様より遠くの神様

(長岡富曾亀)

近くの神社や寺院よりも遠くの神社や寺院の方がなんとなく尊く感じられるもの。人物の場合でもその傾向が見られる。

近づくと神に罰当たる

(佐渡相川)

「触らぬ神に祟りなし」を反対に言ったもの。

茶の花下向く年は大雪

長所伸ばせば短所が消える

提灯持ちの先は馬鹿がなる

提灯の明かりは周囲を照らすだけで前方を照らすものではないから、その先を歩く者は暗闇に行くことになる。

提灯持った人は前を歩け

「提灯持ち後に立たず」、「提灯持ちは先に立て」と同意。提灯は廻り全体を照らす明かりで、それを持った人が後ろにいたので、は夜道の役に立たない。

提灯持ち後に立たず

☆

「提灯持った人は前を歩け」と同じ。「後悔先に立たず」と組み合わせて「後悔先に立たず、提灯持ち後に立たず」（熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966）という言い方もある。

帳面よしの筆よし

（長岡富會亀）

未詳。字が下手なことか。

『富會亀民俗誌 — 富會亀郷土誌

（上）—』に載せる。

チンがハクシオンした面

（長岡富會亀）

狎がクシヤミをしたような顔。

*チン…小型犬の狎。

ちんこの使い

（村上）

用事が足りないこと。

*ちんこ…犬。

杖を頼つても人を頼るな

使っている鍬は光る

勤勉の象徴。

月が大笠かぶると雨が降る

（山北町）

*大笠…月の廻りにできる光りの輪。

月暈^{かき}日暈は雨

*暈…月や太陽のまわりにできる光の輪。

月立つと米の値上がる

（村上）

「月が改まると、米は蓄えが少なくなつて値上がる」（『村上史・民俗編』下巻）。

月の朔日^{ついたち}、日の七日

（佐渡相川）

旅立ちを避けるべき不吉な日という。

月の上り暈^{がき}、日の下り暈^{くだ}

☆

「月の上り暈、日の下り暈、これ雨の示し」（『譬喩尽』）。暈は月や太陽の周りにできる光の輪のこと。月が昇るとき、また太陽が沈むときに暈ができると雨になるということ。

月夜十五日、闇夜十五日

（佐渡両津）

一般にもいう。人生には良いときもあれば悪いときもあること。

月夜に大風なし

月夜廻りの蟹は身が少ない

月夜の蟹は餌を取らないので身が痩せているという俗信。中身が空っぽなことを「月夜の蟹」ともいう。一般にもいふ。

つし猫のようだ

（村上）

人見知りする子どもなどにいう。 *つし…藁葺きの家の、屋根裏の物置。そんなところに生まれた子猫は、まだ外の世界を知らない。

土に着いた金は堅い

堅実に貯めた金は残る意か。

(佐渡両津)

釣った魚に餌はやらない

一般に、結婚前は妻に何かと贈り物をしていた夫が、結婚後はさっぱりしなくなつたときなどの譬えに言う。

つつじの花盛りはわらびの出盛り

綱木女の赤谷男

東蒲原郡三川村の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

(三川)

椿伐る馬鹿、植える馬鹿

椿は生長が遅いことからいう。

燕が低く飛ぶと天気が悪くなる

(山北町)

ツバメも手に取りや臭い

かつこよく見えても難点があることか。

(佐渡相川)

爪で拾つて箕でこぼす

☆

苦勞して少しずつ得たものを一瞬にして失うこと。また、小錢を節約しても他のところで浪費すれば何もならない意。「升ますの物惜しんで斗の物失う」。「爪つめで拾ひろつて箕みでこぼす」(『諺苑』)。

爪ほうきで貯めた金

苦勞して少しずつ得たもの。

(山北町)

強いものマツカーサーとオツカーサー

(清里)

敗戦後の日本を占領した連合国軍司令官マツカーサーを入れてい
るから、太平洋戦争後に生まれた諺。

連れが良ければ善光寺まいり

(佐渡相川)

一般には、伊勢詣りのついでに良い連れがあれば熊野まで足をの
ばす意で「連れが良ければ熊野詣で」という。

聾つんぼの早耳

☆

耳の遠い老人などが、自分に不利な話になると、なぜか早く聞
きつけること。『諺苑』にも載せる。

亭主の好きなぼた餅湯漬け

(佐渡相川)

亭主の好みには諦めて従わなければならぬこと。

亭主は丈夫で留守がいい

丁寧ていねい殺し

ほめ殺しと同じか。

丁寧無調法

「礼も過ぎれば無礼になる」と同じ。

(佐渡両津)

敵と思わば大切にせよ

てつきよが馬でうまいもの嫌い

(柏崎)

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

てつこうの早泣き

(分水)

きかん坊の癖にすぐ泣き出す子をからかうときに言う。

*てつこう…きかん坊。

手つぶり八貫、ほいと一貫

(六日町)

「手ぶり八貫」と同じ。

手でせぬ口尻口で物を言う

(佐渡相川)

「実行しないで言うだけ」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)の意。

手にする子はなぐられない

(六日町)

「窮鳥懐に入れば獵師もこれを殺さず」の類。

手の中に入れたよう

(長岡富曾亀)

手放しのあかんめい

(六日町)

最大限の軽蔑の意。「あかんめい」は、子どもが軽蔑や拒否をする時の、片手または両手で目尻を押さえて下げる「あかんべー」であるが、手も使わないでする「あかんべー」の意でそれを強調したものである(城内地区古老の話)。

手ぶり八貫

何か手土産などを持って来るべき訪問に、何も持たずに手ぶらで来たことを皮肉つたもの。または、何も無いのに多く持っているふりをする者のこと。あるいは、男は手ぶらでも八貫の値打ちがある意。

手前の雪隠にばかり糞こいてて

(六日町)

内弁慶で、世間知らずのことか。

手間はありもん

未詳。

てろろが鳴くと日照りが続く

(山北町)

*てろろ…カワセミの一種アカシヨウビン。水乞鳥ともいう。キョロ口とも。馬に水をやり忘れた馬喰の女房が鳥に変じて水を求めて鳴くという昔話がある。

天一天上雨降らず、十方暮れ風吹かず

(佐渡相川)

*天一天上・十方暮…いずれも歴の上の特定の日。十方暮は干支相剋の凶日で、佐渡では九月二十四日を十方暮といひ「十方暮になつとるし、野暮な風は吹かん」ともいう。また天一天上は

天一神が天に上る日という。「天上雨無しとて暦の中段の天一天上は日和続く」とも、「天太郎とて暦の中段の天一天上の入の日雨すれば雨続く」とも（『譬喩尽』）。

天竺と柿の軸ほど違う

（佐渡両津）

「しく」の音を掛けたもの。

貂てば兎

（村上）

早合点で軽率なこと。

天道様と米の飯は付いて廻る

「天道様と米の飯は何処にもある」とも。

天道人を殺さず、弁当腹を空かさず

（長岡富曾亀）

後半は前半のもじりで、弁当の用意があれば空腹でも安心の意。

天王小豆に地蔵ソバ

（村上）

*天王：七月十四日の年中行事、天王祭り。 *地蔵：七月二十三日の年中行事。それぞれの種を蒔く時期をいう。 『譬喩尽』に「地蔵雨とて毎七月廿四日は雨するもの……」ともある。

天は高うてもここんで通れ、地は低うてもそろりと踏み

（佐渡相川）

慎ましく用心して暮らせば問題がないこと。

出そいで出ないのは、いい衆の葬礼とシヨウカチ小便

（長岡富曾亀）

*いい衆：金持ちの旦那様。 *シヨウカチ小便：糖尿病を消渴しょうかつといひ、消渴小便は排尿に支障のある病気の一種。

でつこいどこのモッコ持ち

（長岡富曾亀）

*でつこいどこ：金持ちの家。 *モッコ持ち：「善事なり悪事なり有る上に更に付け加えること」（小林存『越後方言考』1975）。

「大黒の脛へ味噌」と同じ。

でつこいもんに絡まれ

（長岡富曾亀）

「寄らば大樹の陰」と同じ。

出つけたものは庭の隅からでも出る

（佐渡相川）

習慣化したことなどは、なかなかやめられない意か。 *出つけた：出ることが慣例となっていること。

出時知らずの上がり時知らず

（佐渡相川）

家から仕事に出かける時刻と仕事をやめて帰ってくる時刻についていう。時間にだらしないこと。

出針は縁起が悪い

*出針：出掛ける前の針仕事。

出穂水かけよ

（長岡富曾亀）

稲の穂が出るころには田に水をかける必要がある。農作業の知識。

出る出る三年、出て三年、かかって三年、後三年

（佐渡相川）

治りにくい疥癬（皮膚病）のことという。「疥癬はかいて三年、かいで三年、かぶ三年」（『譬喩尽』）。

十日の菊、六日のあやめ

菊の節句の翌日の菊、端午の節句の翌日の菖蒲は、意味が無い。

「後の祭」と同じ。「六日ノ菖蒲」（『諺苑』）。

冬至カボチャに年取らせるな

（荒川町）

冬至にカボチャを食べると風邪を引かないなどの俗信があり、冬至に食べるべきカボチャを新年までとつて置いてはいけないうこと。

冬至から一日米粒ほどずつ延びる

（荒川町）

「冬至の日から筵の目一つずつ日が伸びる」ともいう。

冬至過ぎれば藁の節一ふしずつ日が長くなる

（村上）

冬至トウヤは冬なか

（佐渡相川）

*トウヤ：祭礼の中心となる輪番の家をいう頭屋か。佐渡では冬至ごろ次の年の頭屋を決めるといふ。

冬至十日前

冬至の十日前あたりが最も日が短く感じられる意。

冬至にカボチャを食べば風邪をひかない

冬至の日から筵の目一つずつ日が伸びる

豆腐食ってしらばくれ

（南魚沼）

盗み食いをして知らんぶりすること。ただし、その盗み食いには他人の妻との密通の意味も含むという。豆腐は噛まずに飲み込めるし、歯にもくつつかない。また匂うこともないので、盗み食いしてもしらばつくれることができることからいう（城内地区古老の話）。

豆腐に銚

かすがい

唐箕の先にいるのと同じ

（清里）

唐箕は、回転羽で風を起こして籾などを選別する機械。隙間風が強く居心地が悪いことの譬え。

灯明を口で吹いて消すものではない

（山北町）

十日にとって二十日に払う

（佐渡相川）

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

十日の十寸

とおか とうすん

十日かかってようやく十寸縫うような、気ままでのんきな仕事ぶりという（川合和江著『寺泊のことば』1980）。

遠くて近いは男女の道、近くて遠いは在郷の道

得仲間の損外れ

(佐渡相川)

自分が得するときは仲間、損するときは外れる。自分にとつて都合が良いときだけ付き合う意か。

床屋のぼうぼう頭

(山北町)

「紺屋の白袴」と同じ。

所に合わせて絵をかけ

☆

実情にあった対策を取れ。「所に似せて絵を画く」(『譬喩尽』)。

年取り魚をいっぱい食った

(長岡富曾亀)

それだけ年齢を重ねて経験豊かだという老人の誇り。

年夜の晩げの火のようだ

(村上)

大晦日の晩は、ドンド火と言って囲炉裏に大きな火を焚いたが、通常の日に囲炉裏で大きな火を燃やすと、不経済なことからそう言つて批難した。

年寄り子ども

(長岡富曾亀)

年寄りは子どもと同じだ。

年寄りつ子は寒がる

☆

年寄りに大事に育てられた子はひ弱であること。ただし、中国の故事によつて老年になつて生まれた子は寒がりだというのが本義

だとする説もある(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

年寄りつ子は三文安い

(佐渡相川)

子どもが甘やかされて育てられるから世間での評価が低いこと。

年寄りと釘の頭は引つ込むほど良い

「年寄りと金釘は引つ込んでゐるほどよい」ともいう。

年寄りと紙袋は詰めねば立たぬ

☆

「老人は食を欲するものなる故にいふ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

年寄りの達者と春の雪

(長岡)

年寄りの達者なのは長続きしないこと。春の雪を譬えにした例に、「春の雪と叔母の杖は剛こたふ無なひ」(『譬喩尽』)など。

年寄りの昔話

(長岡)

年寄りはすぐ昔のことを言い立てる。「年寄りの昔話がたり」ともいう。

年寄りの昔語り

(長岡富曾亀)

年寄りの腕まくり

(佐渡相川)

年に似合わないことをする意。

枋堀男と荷頃女

(枋尾)

栃堀・荷頃は、栃尾市の地名。それぞれ美男美女が出るところ
という。

栃堀下駄の塩谷草鞋

(栃尾)

栃尾市の村の風俗。町へ出かけるとき、栃堀の人は下駄を履き、
塩谷の人は草鞋を履いたという。

ととつぽ、うらつぽの話

(長岡富曾亀)

「始めも終りも明確でない話」(『富曾亀民俗誌』注)。*うら
つぽ…末とか突端の意。

隣の家に倉が建つと腹が立つ

(佐渡相川)

隣のかさ飯

(村上)

隣家のものは何でもうらやましい意。*かさ飯…山盛りご飯。

隣のけんさ焼き

(荒川町)

「隣のものは雑炊でもうまい」の類。*けんさ焼き…ご飯を
ぶして棒に付け、味噌を付けて焼いた食べ物。

隣のじんだに味がある

☆

*じんだ…糞汁。糞汁味噌。また、枝豆をつぶしたのもいう。
「隣ノジンダ味噌」、「隣ノジンダ味噌ガヨイ」(『諺苑』)。

隣のものは雑炊でもうまい

(長岡富曾亀)

飛び込み猫は飼うな

(山北町)

子猫をもらうにも作法があつて、ただもらうものではない。例え
ば、親猫へ食べさせてくれといつて煮干しを相手方に贈るとか、
米一升を贈るとかして子猫をもらうのが作法である。「走り込み
猫を飼うな」(『新発田市史資料』第五巻・民俗)ともいう。

寅と八日に物裁つな

(佐渡相川)

裁縫に関する禁忌。

寅の日に葬式するものではない

(山北町)

死霊が千里行つて千里戻るからという。

鳥食うてもどり食うな

☆

*どり…鳥類の肺臓。鳥の肺臓は毒だとされた。トリとドリの近
似から、似て非なるものに惑い失敗するなどの意にもなる。「鳥
ハクフトモドリクウナ」(『諺苑』)。

鳥目にハツ目

(荒川町)

夜盲症にはヤツメウナギが良い。

鳥も止まり時、嫁も行き時

(佐渡両津)

鳶が鳴くと風が吹く

(上越三郷)

鳶も物を見ねば廻らん

(寺泊)

鳶が空を旋回するのは地上に餌を見付けたときで、人も報酬がないと働く気が起きないこと。

毒にも薬にもならぬ

どこの鳥も黒い

「どこへ行っても鳥の頭は黒い」ともいう。どこへ行っても人間はそう変わらないものだ、の意。

どこの山盛る

(佐渡相川)

「身分不相応を皮肉ったり、たしなめたりする」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)とくにいう。

どこを押せばそんな音が出る

人が思わず美声で歌を歌ったときの感動の言葉。

泥鰌穴見つけた気になって

(清里)

「泥鰌はすぐ泥の中に隠れるところから、自分に都合が悪くなると身を隠してしまう人。たとえば会計どきになるとトイレなどに行く人と言います」(三郷地区のお年寄りの話)。

土台石をはねる

(長岡富曾亀)

未詳。昔は石を地面に突きかためて土台とし、その上に家の柱を建てた。『富曾亀民俗誌——富曾亀郷土誌(上)——』に載せる。

土台石の腐るまで

(長岡富曾亀)

土台石も三代目

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

(柏崎)

土用くんだり、俵結うて待て

(佐渡相川)

*くんだり：佐渡で南風(午の方角の風)をさす。

土用七夕立は上作

(長岡)

土用に夕立が七へんもあれば、上作となる意。「七夕立七カより万作」、「土用の七夕立豊作の兆」ともいう。

土用次郎

土用の二日目の天気がその季節の天候を左右すること。

土用茄子は植えんもの、師走カボチャは食わんもん

佐渡新穂の禁忌。

(佐渡相川)

土用にぬのこ

(山北町)

土用のころでも急に寒くなるときがあること。また、無用のことをする意。あるいは逆のことをする意。「寒に帷子かたびら、土用に布子」。
*ぬのこ：綿入れ。

土用の筍たけのこ出たばかり

☆

出たばかりでその甲斐がないこと。「土用に生ずる筍は、腐敗して竹とならず故に出たばかりといふ謎とす」(熊代彦太郎著『俚

諺辞典』1906)。

泥棒に宿貸しても、守り子に宿貸しするな (村上)

「子守の集まる所(宿)は大変だ」(『村上市史・民俗編』下巻)からという。子をつれた者に宿を貸すと泥棒に宿を貸したよりも何かとたいへんだという意。

泥棒よけになるような夫婦ごと (六日町)

始めても無駄な老夫婦の房事。この諺の成立には卑猥な笑話が付いている。*夫婦ごと…寝室の夫婦ごと。

どんぐりがらの背比べ (村上)

「どんぐりの背比べ」と同じ。*どんぐりがら…イタドリという野草の茎。

ドンゴロベも魚の人情

小さなメダカだつて同じ魚の仲間だという意。*ドンゴロベ…メダカ。

どんのくびと柄窪は見たことがない (長岡富會亀)

*柄窪…地名。*どんのくび…首筋のこと。

無いが意見の総仕舞

放蕩者に意見しても聞く耳をもたないが、金銭が尽き果てれば意見するまでもなく放蕩がやむ意という(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

泣いて勝つは子どもの癖 (長岡富會亀)

無いとき貧乏、有るとき大名 (長岡富會亀)

金が手に入れば入つた分だけ計画性もなく使つてしまふ人という。これと逆に、「無い時に辛抱、有る時に節儉」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)という諺もある。

無いもんが食いたい

世の人の性癖。

長坂は長い、水金短い (佐渡相川)

未詳。*長坂・水金…佐渡相川の町名。『佐渡相川の歴史』資料集九』に載せる。

長袖が三人いると村潰れ (柏崎)

*長袖…労働に直接たずさわらない、神主、僧侶、医者、学者などのこと。

長虫と長袖に構うな (六日町)

*長虫…蛇。

流れ川、三寸 (佐渡相川)

いつも流れている川は、上流で汚しても三寸下がれば清いこと。

流れ水、三寸 (山北町)

川の水は三寸流れれば清くなる。橋で小便をした弘法大師を見

て汚いと言った人に、大師がそう言ったという話がある。

泣節にも流行がある

佐渡の諺。泣き節は、佐渡で盛んな文弥節。

なぎおもだか娘の草だ、えごえずぐも嫁取る草だ（村上）

田の草取りの労働についていう。*なぎ・おもだか…比較的除
去しやすい田の雑草。*えご・えずぐも…取りにくい雑草。

泣く子に乳

効き目があるものをいう。

泣く子は親のあつかい

子どもが泣くのは親の対応の仕方による意か。

泣く子は利口

（長岡富曾亀）

泣く子も鍋のはた見て泣け

（長岡富曾亀）

家が貧しい実態を見てほどほどに駄々をこねよの意。「泣兒も眼開
け」（『譬喩尽』）。

無くしても残るものは借金

（山北町）

総てを失つても無くならないもの。

投げどこへ投げたら落ちどこ見んな

☆

投げるべき所へ投げたら、後は落ちた所は見るな。熊代彦太郎著

『俚諺辞典』では、「なげとを見るときも落度おちどを見るな」とし、その意味については「悪事は其起りを知るも結果まで詮索するなと云ふ意か」という。

仲人口はあてにならぬ

「仲人そらごと」（『毛吹草』）。

仲人口は半分

「仲人口は半分にきけ」（『譬喩尽』）。

☆

仲人と大持

引きつけさえすればよい意という。

（六日町）

仲人の嘘八百

仲人口のこと。

仲人は草鞋八足

（六日町）

「仲人は金の草鞋」とも。縁談をまとめるには草鞋が八足もすり切れるほど双方の家に足繁く通わなければならないこと。

梨の皮は乞食にむかせろ、まくわの皮は長者にむかせろ☆

梨の皮は薄くむき、瓜の皮は厚くむいたほうが良いこと。「梨の皮は乞食に剥かせ、瓜の皮は大名に剥かせろ」（熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906） *まくわ…真桑瓜。

梨の馬鹿めが十八年

（佐渡相川）

「桃栗三年、柿八年、柚の大馬鹿十八年」ともいう。

菜汁と米の飯で不足を言うな

(佐渡両津)

茄子の木に瓜はならぬ

茄子の遠肥え

(山古志)

茄子の肥やしは根から離してくれるのが良いこと。

茄子の花と親の意見は千に一つも無駄がない

茄子は七さく、芋は八さく

(上越三郷)

「さく」は畦上げのこと。茄子も芋も手間がかかるもので、苦労しないと良くできない意という(三郷地区のお年寄りの話)。

茄子畑なすばたっ子

落ち着きのない子、または元気な子(田中つとむ著『新潟のことわざ』一〇〇話)。

なぜ風、山から出る

(六日町)

*なぜ…雪崩(なだれ)。

鉈なたが鎌

(長岡富曾亀)

親や目上の者に無理難題を言われても従わなければならぬという状態のことをいう。

鉈なたで頭かぶ剃るか、豊田屋へ行くか

(柏崎)

鉈なたで頭かぶを剃るのは痛い。豊田屋は不明。奉公の厳しいことという。なお、池田亨氏によれば類似の諺として次のような例があるとのことである。「野田へ嫁に行くか鉈なたで頭かぶを剃るか」(六日町)、「アカハネ風かぜに吹かりよか鉈なたで頭かぶ剃りよか」(湯沢)、「田中の吹きに遭うか鉈なたで頭かぶを剃られるか」(同、湯沢)。

菜、大根、半かまど

菜な、葉や大根は、かて飯いのうち半分はんぶんの量を占めること。

鳴った雷一度は落ちる

(佐渡相川)

ぶつぶつ小言が始まり、最後には怒りが爆発すること。怒りやすい人について言う。

夏海、秋山

(上越三郷)

夏は海の方が明るいと晴れ、秋は山の方が明るいと晴れる(『ふるる里に伝わる 諺、いいならわし、格言』注)。「春海秋山」(『諺苑』)の地方的な言い換え。

夏カンジキに冬マンガワ

その場になって慌てないように前もって用意しておくのが良いこと。*カンジキ…冬に用いる雪国の歩行具。*マンガワ…春の馬耕の農具で、馬に引かせて田の代かきに用いた馬鍬のこと。

夏作なつさくに綿入れ、冬作ふゆさくに帷子かたびら

(佐渡両津)

夏は厚めに、冬は薄くと、作物にかぶせる土の厚さをいう。「夏

作は布子を着せよ、冬作は帷子を着せよ」(山本修之助著『佐渡民俗ことば事典』1987)ともいう。

夏鯖、猫も食わぬ

夏寒きは洪水

夏の雨は馬の背を分ける

夏の雨は狭い地域に降るため、馬の背の左右でも雨と晴れが分かれることもある意。「夕立八馬ノ背ヲ分ル」(『諺苑』)ともいう。

夏の風邪は出る日が知れぬ

夏の鯛は犬さえ食わぬ

夏の作りは夜着を着せよ、秋の作りは布を掛けよ
夏・秋に畑作物を植えるとき、それに被せる土の厚さをいう。「夏作に綿入れ、冬作に帷子」と同じ。

夏の馬鹿は奥へ行く

家の奥は上座だけれども夏は外に近い方が涼しくてかえって良い。

夏の火は嫁に焚かせんぬ

暑いときに火を焚くのは大変だからで、嫁を大切に思いやる諺。逆に「冬の火は嫁に焚かせよ」ともいう。「夏ノ火ハ女ニタカセロ、冬ノ火ハ婦ニタカセロ」(『諺苑』)。

夏のぼた餅、犬さえ喰わぬ

「夏ノ餅ハ狗モクハヌ」(『諺苑』)。

夏は木の下、寒中はこたつ

なかなか離れられないもの。

名とるより得取れ

世間の評判よりも実利が大切の意。「名を取るより徳を取れ」(『譬喩尽』)。

七つ上りは明日の雨

夕方まで降った雨は上がつてもまた明日降り続く意か。*七つ…旧時刻法で夕方四時頃。

七つ劣りか三つ増しか

「夫婦は女が男より七つ年下か、女が三つ年上がうまく行くという意味」(田中つとむ著『新潟のことわざ』一〇〇話)。

七月子は投げてても育つ

「七つ子は投げておいても育つ」(六日町)。「七月ノナゲスハリ」(『諺苑』)。

七月子は育つが八月子は育たぬ

(長岡富會亀)

「七月児は立つても八月児は立たぬ」(佐渡兩津)ともいう。

七つ子のふつた糞は犬も食わぬ

(村上)

「子供の駄々、悪たれは手がつけられない」(『村上市史・民俗編』下巻)の意。

七つ下がりは通りが止らぬ

(長岡富會亀)

一般に夕方に降り始めた雨はなかなか上がらないといわれる。

七つ下がりへのンナシ茶

(長岡富會亀)

「朝茶は七里戻つても飲め」などの諺から見ても、逆に夕方に飲むお茶は良くないことをいうか。*へのンナシ：意気地なし、やぐざ者、間抜け者などの意とされるが、中魚沼生まれの池田亨氏は「おしやれこき」「伊達こき」の意という。

七つ晴れは明日のもつけ

(六日町)

夕方に晴れ上がった天気も明日は雨になること。「七つ上りは明日の雨」に同じ。

七つ前の子どもは神様

七つ八つは憎まれざかり

(上越三郷)

「五ツ六ツ八憎盛り」(『諺苑』)。

七日びに人より先に船おろすな

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

七日盆には七遍食うて七遍泳げ

(佐渡相川)

盆の入り七月七日の習慣。

七日病んで子を産め

☆

「七日子腹を病むでなりとも男の子を生め」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)の転訛か。

名の無い星は宵から出る

名の無い星は、つまらない者や用のない者などのたとえ。一般に
もいう。

怠け者の節句働はたらき

☆

「常せずの節句働はたらき」(『譬喩尽』)。

なやの百くら飯

(村上)

「漁師が遭難など万一の場合に備えて、一日に何度も食事をすること」(『村上市史・民俗編』下巻)。*なや…漁師。*百くら…百度。

成らん者の成り上がり

(佐渡相川)

本来は出世などしないはずの者が、成り上がったことを批判的にいう。「成功した人をねたむ場合」にも言う(『佐渡相川の歴史・資料集九』)。

熟なれても鯛

(佐渡兩津)

腐つても鯛の意。

苗代押しは一人婿が逃げる

農繁期の忙しさをいう。

(分水)

苗代時の婿泣かせ

苗代時には一人婿が逃げる

苗代時の寒さや、忙しさをいう。

苗代半作

「苗半作」あるいは「苗代七分作」ともいう。収穫は苗代の時点で半分決まること。稲作における苗の良否が作柄に大きく影響することを用う。

南天の実多ければ雪多し

(上越三郷)

何でもない牛は宵からでしゃばる

(佐渡相川)

「弱い犬ほどよくほえる」と同じという(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。「名の無い星は宵から出る」の転訛か。

南葉山の雨は隣のぼた餅より早い

(上越三郷)

*南葉山：高田市街から見て南西、新井市との境に位置する山。標高九百メートル余。

なんばん食いに金貸すな

(長岡富曾亀)

なんばんを好む者は食欲旺盛なので食事にも金を使うから、貸した金の返金もおぼつかないこと。

二階へ上げて梯子を引く

(巻)

人をおだてておいて知らん顔をすること。

二階から足下げる

(佐渡相川)

「品物の値段など折り合わぬ時」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)という。

逃がした魚は大きい

握り拳丸

(六日町)

懐手をして仕事をしない者のこと。

握りギンタマにホドコ手

(長岡富曾亀)

仕事を人に任せて自分は見ているだけの人。

*ホドコ手：懐手。

憎い子ほど物与えよ

(山北町)

「悪い鷹には餌を飼え」の類。

憎い嫁から可愛い孫

(荒川町)

「にくにくの腹からいといとができる」と同じ。

にくにくの腹からいといとができる

☆

姑にとつては憎い嫁から可愛い孫ができること。「憎々の腹からか

わかわの子」 「憎々の腹からめごめごが生まれる」などともい
う。「ニクニクノ腹カライトイトカ出タ」(『諺苑』)。「憎い腹か
ら愛々が出ました」(『譬喩尽』)。

憎まれ子、頭堅い

世の中から憎まれる子は丈夫だ。

(佐渡相川)

西谷袖なしの塩谷前掛け

栃尾市の服装風俗の地域性。西谷の人は袖なしをよく着、塩谷
の人は前掛けをよく掛けること。

(栃尾)

西ツ風のとオバ迎へ

(上越三郷)

西は浄土の風

西風は穏やかである意。

(寺泊)

西貧乏、東大尽

西が貧しく、東が裕福な柏崎町の経済状況という。

(柏崎)

西海女と早川男

糸魚川市の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

(糸魚川)

二十九日は苦の餅、大年餅は搗かん

*大年餅：大晦日の餅で、「一夜餅」の禁忌。

(柏崎)

二十五の朝飯前までふとる

(長岡富曾亀)

*ふとる：体が成長する意。

二十五がすむと男は入り日

男は二十五歳が体力の頂点だという意。

(佐渡相川)

二十後家は立つても三十後家は立たぬ

三十になつてからの後家は操が守れない意。「若後家は立つれど
年寄後家は立て難し」(『譬喩尽』)。

(佐渡相川)

煮すぎたうどん

箸にも棒にもかからない意という。

(上越三郷)

煮た豆でない

必ず芽が出るから諦めるなの意。

(三条)

二代子に別れたよりつらい

悲しさを強調したもの。*二代子：跡取り息子。

(佐渡両津)

煮ても焼いても食わんねえのは姑婆さんと栗のいが

扱いかねる姑を嫁があきらめの気分という。

二度事二度

「二度あることは三度ある」と同じ。

(六日町)

二度叱って三度ほめよ

(上越三郷)

二度と効かぬ専福寺の目薬

(柏崎)

未詳。*専福寺：柏崎にある浄土真宗の寺院。目薬を売っていたがあまり効かなかつたらしい。

二人前は働けない

(柏崎)

二の息つかれぬ

(佐渡兩津)

二の句がつけぬ、と同じ。

二百十日のはしり穂

(長岡富會亀)

二百十日になつて出はじめる稲の穂のこと。一般にも言う。

*はしり…出はじめ。

二百十日の風祭り

(山北町)

この日、念仏申しをし、会食もする。二百二十日も同様に行なう。

荷物と病は軽いほど良い

女房と味噌は古いほど良い

「女房ト鍋釜ハフルイホドカヨイ」(『諺苑』)ともいった。

女房やくほど亭主ももてせず

女房を質に入れても味噌つくれ

(柏崎)

女房は膝元の仇

(六日町)

「二ツ子をなすとも女に心許すな」の類。

にわか雨と女の腕まくり

(荒川町)

恐れることはない意。「春の雪と女の腕まくり」ともいう。

鶏ははだし、雁鴨は水だ

(長岡富會亀)

当たり前のこと。

二月の石かやし

(佐渡相川)

「二月十五日に団子を仏に供える」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)こと。

人参の好きな者は助平

(柏崎)

人参は祭り過ぎて蒔け、牛蒡は雪融け水で蒔け

(佐渡新穂)

糠火で八反、葎簀で九反

(南魚沼)

未詳。南魚沼地方の諺。

糠味噌の味が変わる

「味噌の味が変わる」ならば、「家で一番大切な人間が死ぬとい

ふやうな予期意向の信仰」(小林存『越後方言考』)だという。

主の宿しても子持ちの宿しんな

子持ちの客を泊めると何かと世話がやけることからいう。一般に、「盗人の宿しても子持ちの宿するな」ともいう。

盗人に小づけ

盗人にさらに利を得させるような振る舞い。*小づけ：朝飯前の腹ごしらえをも言うが、また「重荷に小づけ」ともいい、荷物の上にさらに附加する荷のこと。

盗人に鍵を貸す

(山北町)

盗人の戸締まり

「盗人も戸締まり」か。他人の物を盗む者も自分の家の戸締まりはしっかりやること。

盗人のこわぐち

盗みが発覚したとき、居直つて悪事の正当性を主張したり、言い逃れを言ったりすること。

盗人の昼寝

盗人の宿はあつても子持ちの宿はない

「盗人の宿しても子持ちの宿するな」を、逆に宿を借る立場か

(六日町)

らいつたもの。「主の宿しても子持ちの宿しんな」の項参照。

ぬっそり牛の垣またぎ

(佐渡相川)

「おとなしい人はなにをしないでかすかわからないこと」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。

濡れた紙袋で口が開かん

(佐渡両津)

葱は人影でも嫌う

葱の栽培は日陰が良くないこと。

猫追うより魚片付け

☆

もとの原因を考えないで目先のことにばかりこだわっていることをたしなめたもの。「猫逐ふより魚を除けよ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)。

猫がいがむ

(三条)

不細工な作り物を軽蔑している。*いがむ：攻撃的になつてうなる。

猫に鯉節

猫にマタタビ泣く子に乳

猫にマタタビ泣く子にかんぞう、おじにひや飯当り前

*おじ…弟。

猫の紙袋で後下がり

「猫に紙袋で跡ちよりじや」(『譬喩尽』)。

☆

猫の座がわり

猫の習性から、人が立った座席にすかさず移つて座ること。

猫の手も杓子の手も借りたい

忙しいときのこと。

(山北町)

猫の鼻にニシン

「猫に鯉節」と同じ。

(佐渡相川)

猫の面倒見えぬ者は人の面倒も見えぬ

(佐渡相川)

猫、馬鹿、坊主

居場所をわきまえない者。

(山古志)

猫もらうなら親猫見てもらえ

「親見て子貰え」と同じ。

(佐渡相川)

鼠穴に水注ぐようだ

いつまで注いでもいつばいにならないことから、むなししい努力をいう。

(村上)

鼠っ子笹っ葉に包んだようだ

子どもたちが騒々しくさわぎ回ること、という。

(三条)

鼠捕る猫は後ねらう

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

(佐渡相川)

鼠の居ない家には住むな

火事のような変事があるから。

(山北町)

寝た牛は寝ておらぬ

いつまでも同じ状態が続くことはないという意。たとえば、家が今貧乏であつてもそのうち裕福に暮らせるようになるものだといった譬えに使う。(渡邊清香氏調査)

(佐渡両津)

寝溜めと食い溜めはできない

(山北町)

寝た目は一度は覚める

(佐渡相川)

寝てかたわになつたものは石の地藏さん

「寝て怪我した者はない」と同じ。

(佐渡両津)

寝て怪我した者はない

「負け惜しみや自嘲に」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)いう。

(佐渡相川)

寝てこそ金も儲けたれ

(柏崎)

金儲けはあくせく働くだけではだめだということ。

寝床の下の新聞紙まで出した

(佐渡両津)

*新聞紙…しんげえせん。へそくり。

寝不足あつても寝増しはない

ねぶちねぶちは敵かたきに潰つぶさせ

(佐渡相川)

*ねぶち…炎症で膿をもった部分。痛がるのを気の毒がついては押し潰つぶすことができない。「根太ねだは中の悪わるなるほど押し潰つぶすべし」(『譬喩尽』)。

ねまねまつてかく恥かたじけなく、立つてかく

(長岡富曾亀)

恥の上塗りかたじけなくをすること。*ねまる…座る。

寝るねるが法楽ほうらく

(荒川町)

寝ている間は苦もなく幸せなこと。寝た間が極楽、とも。

寝る子は丈夫

寝る子は肥る

寝るほど楽はないのに起きて働く馬鹿もある (長岡富曾亀)
怠け者に対する皮肉をこめた言いぐさか。

寝る目と食う口はきりがなし

(佐渡相川)

年始は盆まで

(長岡富曾亀)

農どきのアブラメは牛の尾にも食いつく

(佐渡相川)

*アブラメ…アイナメ(魚)。

農は人並み

(長岡富曾亀)

「ものは人並み、農は人並み」ともいう。農業は人並みにやっていけば何とかなる意。

鋸山の笠雪は大雪

(長岡富曾亀)

*鋸山…長岡市街から見て東南、栃尾市との境に位置する山。
標高七六四メートル。*笠雪…山頂付近をおおう雪。

鋸山の蓑雪は小雪

(長岡富曾亀)

*蓑雪…山全体をおおう雪。

残り物に福がある

☆

ノツタリ病人、結構病人

(佐渡相川)

*ノツタリ…忘れ者。

ノツタリもんの節句働き

忘れ者の節句働き。「ノラノ節句ハタラク」(『諺苑』)。

☆

野中の一本杉

ほかに身よりのないこと。

野は人なみ

農作業は人に見習つてやつていれば間違いないこと。

(上越三郷)

野は人まね

「野は人なみ」と同じか。

(清里)

上り知らずの下り土産のぼりくだ

上り下りは旅のこと。上方方面かみがたへ向かうのが上り。思わず予期しない良いことがあったときのことか。「のぼりしらずの下り土産」(『世話尽』)。

☆

飲まで建てたる倉はない

「下戸の建てた倉はない」と同じ。

(佐渡両津)

飲まん酒にや酔わん

火のないところに煙は立たぬ、などと同じ意。

(長岡富曾亀)

飲み気より食い気

「色気より食い気」のもじり。

(長岡富曾亀)

飲みたいやんめい、食いたいやんめい

飲食の欲望を病気に譬えていうか。*やんめい…病やまい。

(長岡富曾亀)

蚤の金玉

ごく小さいものの譬え。

(柏崎)

蚤の小便、蚊の涙

ほんのわずかのこと。

(長岡富曾亀)

蚤の一尋ひといろ

ごく短いものの譬え。

(柏崎)

蚤のめつと

夫が妻より小さいこと。「蚤の夫婦」。めつと…夫婦めおと。

(長岡富曾亀)

飲め、食い山王

無礼講の酒宴のこと(城内地区古老の話)。

(六日町)

のめしむじか鰻の七瀬走り

忘れ者が一気に仕事をしようとするときのことか。「だおもん(忘れ者)のいつときわざ」と類似。*のめし…忘れ者。

(六日町)

のめしこきの節句ばたらき

*のめしこき…忘れ者。

(長岡)

のめしこきの大まくらい

(長岡富曾亀)

*大まくらい…大食らい。

野呂間何をいう、団子は米の粉

馬鹿なことをいうな、当たり前だの意。他に、「野呂間何をいう、女房は嬢だ」、「野呂間何をいう、饅頭は麦の粉」などともいう。

*野呂間…佐渡の「のろま人形」のこと。

呑気な父さん

流行歌の影響か。

(山北町)

灰神楽、縁起がいい

嫁が囲炉裏で水や汁をこぼしたときなどに、かばつて言ったもの。

(分水)

*灰神楽…炉の火に水をこぼしたとき、灰が部屋中に舞い上がること。

吐いた唾が吞めるかい

(荒川町)

ハイハイのいうこときかず

(長岡)

返事はよいものの行動に移さない人をいう。

禿の横山稲妻光り、ここで光れば江戸まで光る、江戸の

若い衆は提灯いらぬ

(柏崎)

横山は、柏崎の地名。

はげんこうに生餅は大毒だ

(六日町)

*はげんこう…ハゲンは半夏。夏の時節の半夏生のこと。

ハサミと女子は使いがら

(村上)

使い次第で能力を發揮する意。「子どもとハサミは使いがら」ともいう。

箸一本で食べると片親になる

(上越三郷)

葬礼の禁忌。葬礼のときは一本箸で食べることからいう。

箸の上げ下げに世話をやく

走り馬に鞭

☆

ものがごとがいつそう勢いづくこと。「走る馬に鞭」(『世話尽』)。「駈け馬に鞭」(『毛吹草』)。

走り込み猫を飼うな

(新発田)

「飛び込み猫は飼うな」と同じ。

恥かき道具

(佐渡両津)

恥かき者。ドীগは「人」の蔑称的な言い方。

はじめトロトロ、なかパツパ、グツグツめに火をひき、

親が死んでもふたとるな

飯の炊き方。

蓮の葉に上がった糞蛙

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

畑の水練

一般には「曇りの水練」ともいう。「畠水練」（『諺苑』）。

☆

ハタハタ荒れ

中越海岸部の諺。富本繁太夫の日記『筆満可勢』文政十三年十月条に「此魚、寒の入より三百十日目に來る。其十日前後に成て風雨嚴敷時はハタ／＼荒という」とある。

ハタハタは三年の古傷を呼び起こす

（佐渡相川）

ハタハタは体を冷やすとも言われる（『筆満可勢』）。また、地方によつては「鱒は三年の古傷を呼び起こす」（山北）などとも言われる。また、「雉子を食へば三年の古疵も出る」（熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906）とも。

働く人形、首切らる

（佐渡両津）

佐渡の人形芝居に文弥人形よりも古い素朴な説経人形があつて、「熊野合戦」「浜松合戦」など激しく動く戦いの場面が好まれた。劇中、勇者によつて悪人の首が切り落とされる場面があるので、このように言う。働くは、人形が盛んに動くこと。軽率な行動を戒めたもの。

裸で尻まくりはできん

（長岡富曾亀）

「無い袖は振られぬ」などと同意。

裸、物落とさず

（清里）

何もなければ失うものもなく気楽である意か。

八月風のソバあたり

☆

はた迷惑なこと。収穫期の蕎麦は実が落ちやすく、風が吹くと困る。ソバに蕎麦と側をかける。「八月の風で蕎麦荒る」（『譬喩尽』）。

八月の別れ蚊

☆

「八月の終りの蚊はさすと痛い」（『佐渡相川の歴史・資料集九』注）からという。「八月の溢れ蚊」。「八月ノアバレ蚊」（『諺苑』）。

八十八夜の別れ霜

☆

八十八夜を過ぎると霜が降りなくなつて種蒔きなどに良いこと。佐渡でもいう。「八十八夜ノ別霜」（『諺苑』）。「八十八夜名残の霜」（『譬喩尽』）。

八十八のとぼうきり

男子が八十八歳の祝いに一升餅の「とぼう」（ますかき）を作つて配つたことをいう。女子の場合は「袋を縫う」といい、八十八歳の祝いに裁縫用具入れの袋を作つて近親者に配つたという。（舘野清著『魚沼地方方言集』1982）

八十八のよね餅

（長岡富曾亀）

米寿を迎えたことをいう。八十八歳を米寿と言ひ、その祝いに餅をついた。

八十八夜の晩の風

（佐渡相川）

八十八夜の風に注意せよという意で、種蒔き時期の目安という（浜

口一夫氏談。

八十八夜は風呂で持つ

(佐渡相川)

「モミ種を湯に浸し、わらで巻いておく」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注) ことからいう。

八年梅干し、三年味噌

(佐渡相川)

それぞれ最も美味しくなるころ。

八海頭巾は晴れたことはない

(山古志)

*八海頭巾：八海山の頂を雲が覆うこと。

八海鉢巻は降ったことがない

(山古志)

八海山にかかる雲の様を頭巾といい鉢巻という。

八海鉢巻の米山頭巾

(古志郡)

八海山、米山にかかる雲の様子で雨を判断するもの。古志郡の諺。

八海夕立の古志日照り

(古志郡)

八海山が夕立でも古志方面は降らないこと。古志郡の諺。

はっかで尻を洗ったよう

(六日町)

すつきりした気分、あるいはさっぱりした気分を言うか。

八卦八段、うそ九段

☆

「八卦は大抵うそなりとの義」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。

八細工にやで年を取る

(長岡富曾亀)

なんでもできる器用な人は、年中家の土間で仕事をしているうちにいつしか老いること。 *にや：庭などの作業場。 *八細工：なんでもできる器用な人。

八細工、お宮で年取る

(清里)

八細工の七貧乏

(山北町)

器用で何でもできるが、収入に結びつくような仕事はできないので貧乏している人という。

八朔一日は継子の腹さえふくれる

(佐渡相川)

八朔はご馳走をする日なので、普段は冷遇されている継子もこのときばかりは腹いっぱい食べられること。

八専大荒れ

民間暦でいう八専の日は天気がよくないこと。

八専片こと、つつ片降り

(寺泊)

雨晴の長続きは八専に入ってから三日間で決まること。

八専三郎、犯土五郎

(佐渡相川)

*犯土：暦で土を犯してはいけない日という。「八専に三日雨が降るとツチ五日間雨が降る」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』)。

八專竹は切るな

(佐渡相川)

雨の多い八專の日には虫が付くからという。

八專の時に屋根を葺くな

火事になるという俗信があつた。

八專八日、間日四日

(佐渡相川)

年曆の八專にあたる日が八日、それ以外の日が四日。足して十二支の一巡になる。八專は年六回あり、天候の目安とした。

はったけ山火事、剣野の二才火事

(柏崎)

「たたけ山火事、掘れ貉」と同じ。山火事を消火する方法。

*はったけ…叩け。*剣野…柏崎の地名。

八方細工、橋の下で年を取る

(上越三郷)

「八方細工」は八細工に同じ。「橋の下」は乞食の意。器用貧乏のこと。

初子産むとおじおぼ迷う

(佐渡相川)

出費のことが気にかかるからという。

八專三郎

曆の八專の三日目の天気がその季節の天候を左右すること。一般には「八專太郎」という。「八專太郎、槌次郎、土用三郎、寒四郎、此日降り出せば続き雨す」(『譬喩尽』)。

初茄子の皮をむく馬鹿さで、茄子の皮をむかぬ馬鹿

初もの食いは七十五日生き延びる

(六日町)

初物食べたら東向いて笑え

そうすれば長生きするという俗信。

(上越三郷)

初物を食うと七十五日長生きする

☆

百日長生きともいう。「初物喰へば七十五日生き延ばる」(『譬喩尽』)。

鳩が憎うて豆まかん

☆

せつかく豆を蒔いても鳩がきて食べてしまうから育たない。工夫もせずに鳩が憎いといつて豆を蒔かないと豆の収穫はできない。「鳩をこらすとて豆まかぬ」(『世話尽』)。

鼻かんで年取るだけ

(佐渡相川)

余生を送ること。

話し上手の仕事下手

(長岡)

口ばつかり達者で仕事がよくできない人をいう。

話し上手の聞き上手

(長岡)

「咄上手の聴下手といふことあり」(『譬喩尽』)。

話のお代わりはない

(荒川町)

「話の盛り換えはない」(三条)とも。同じことを繰り返して言わない意。

話は庚申の晩

(長岡富曾亀)

無駄話ばかりして仕事がおろそかになっているようなときにたしなめることば。

話は庚申さんの晩に

☆

「話は庚申の晩」と同じ。「仕事中の雑談をたしなめることば。庚申の夜は寝ないで夜を明かしたので」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)。「咄しは庚申の晩」(『譬喩尽』)。

話は尻へ来て終わる

☆

猥談あるいは尾籠な話題になると話が終わる意。「お尻咄しが出れば咄の仕舞じやげな」(『譬喩尽』)。

話半分腹八分

(長岡富曾亀)

人の話は半分に聞き、食事は腹八分に止めておくのが良いこと。

話半分

話が実態とかけ離れている意。

話半分、見て三つ一

(六日町)

人の話は事実の半分程度に聞け。実際に見てみれば本当のことは三つに一つくらいしか無いものだ、の意。

話や納屋町、火事は四谷へ

(柏崎)

未詳。納屋町・四谷は、柏崎市の地名。納屋町は漁師町で、四谷(四ツ家)はそれに隣接している町だが、しばしば火事を出していたという。

鼻汁出す子は肥る

(長岡富曾亀)

*肥る…良く成長する意。

花の下より鼻の下

(佐渡相川)

花より団子と同じ。*鼻の下…口。

浜が遠い

(三条)

水っぽくて塩気の足りないことという。

浜の松風音ばかり

☆

「貉のベエタで音ばかり」などと同じ。音だけで実態がないこと(評判や噂などについてもいうか)。「諺苑」にも載せる。

歯、まら、目

(六日町)

身体はこの順序で機能が衰えること。

早食い早糞、一芸のうち

早好きの早飽き

はや搦ぎの早飽き

(巻)

重労働の米搗きを例に、最初は威勢が良いがすぐ飽きてしまう人のことをいう。臼と杵で米を搗くときは時間をかけてゆっくり搗かなければならなかった。

早飯早糞出世のもと

(長岡富曾亀)

昔は、「はや飯はや糞はや走り」を「奴僕ノ三能」(『諺苑』)と言った。

早飯も芸の内

はやくし

☆

昔は「早飯モ一芸」と言つて奴僕能力の一つと見られた(『諺苑』)。

流行り物はすたり物

腹立てるより倉建て

人のことをあれこれ言うより一生懸命に働け、の意。

(佐渡相川)

腹の皮突つ張りや目の皮ゆるむ

腹八分目、医者要らず

腹も身のうち

暴饮暴食を戒める言葉。『諺苑』にも載せる。

☆

針ほどの穴から棒ほどの風

☆

わずかなすき間から強い寒風が吹き込むこと。転じて些細な事のために大事が発生することの譬えという(熊代彦太郎著『俚諺辞典』196)。「針ホドノ穴カラ棒ホトノ風カクル」(『諺苑』)。

春葬礼は戻つても逢え

(新発田)

縁起をかつく諺。

春の雨は沖から、秋の雨は山から

(上越三郷)

春の土用に天氣が良いと秋の土用も良い

稲刈りの予測など。

春のながせはあいぬ風

(寺泊)

南風でも寒いこと。ナガセは、下越の場合は「春季に日中北西から吹いて夜になって止む風」という(大橋勝男編著『新潟県方言辞典』)。*ながせ：南風。あいぬ風は、あいの風か。

春のながせは仏の風

(寺泊)

ながせが吹くと鯛や小鯛が寄つてくるからという。

春の日と親類の金持ち

次の「春の日とまま母は、くれそうでくれない」などと同意。

春の日とまま母は、くれそうでくれない

(長岡)

春の日は長くて暮れそうで暮れない。ケチな継母は物をくれそう

でくれなご。

春の日と欲しんぼうはくれるようでくれん

「秋の日と根性良しはくれんようでくれん」の逆。「春の日は暮さうで暮ぬ」(『譬喩尽』)。

春の日は夕飯食つて三里蒔け

春は日が長いから農作業も遅くまでできること。

春の日は墨が降り、夏の日は白粉が降る

(分水)

野良で働く女性たちの顔についていう。日が長くなる春はうつつかり日焼けして黒くなりがちだが、夏の盛りは用心するからかえって日焼けをしないことか。

春の雪と女の腕まくり

恐れることはない意。

春は海、秋は山

☆

それぞれ晴れてくると晴天になること。『諺苑』では「春海秋山」をあげ、「江戸ノ諺ナルヘシ」とし、春は海が霽はれれて晴天となり、秋は山に雲があると雨がふる意とする。

春は沖見れ、秋は山見れ

(瀬波)

気象の判断についていう。

春日照り餓死のもと、秋上げ半作

(新発田)

米の収穫についていう。*秋上げ半作：秋の収穫が半分に落ち

ること。

春南秋北

(長岡)

春は南の空が晴れていれば晴れになり、秋はその逆。「春東、夏は南に、秋は西、冬は北にて雨降ると知れ」(『譬喩尽』)。

春やあ、秋西

*やあ：佐渡の羽茂地区で東風をいう。*秋西：秋には西風が吹くこと。

半夏生は地に歛はんげしやう立てるな

(佐渡相川)

*半夏生：夏至から十一日に当たる日という。

半夏生は池や海の魚も浮く

(佐渡相川)

「急に日和がよくなり照り始めるので」(『佐渡相川の歴史・資料集九』)という。

半夏生はバンジョウ一匹いても浮き上がる

(佐渡相川)

*バンジョウ：秋刀魚。

半夏生半作

(佐渡相川)

「半夏生すぎでの播きものは半分の出来」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)ともいう。*半夏生：夏至から数えて十一日にあたる日。七月の始めに当たる。

半夏生に植えものするな

(佐渡相川)

半夏生には田に入らず

(長岡富曾亀)

ハング夏中、冬至冬中

(長岡富曾亀)

季節としてあたりまえであること。

半田半五左衛門、新道の弥十郎

(柏崎)

未詳。この文句の後に続けて「池のイタチにたまされた」ともいう。半田・新道・池は、柏崎の地名。半五左衛門、弥十郎は、その地の金持ちという。

馬鹿と雷は松之山から来る

十日町地方の諺。

馬鹿と鉄はたらは使いよう

馬鹿と闇の夜が一番怖い

(六日町)

馬鹿と夕立は妻有の方から来る

(南魚沼)

前の諺と同じく天氣が西から変わってくることをいう。*妻有
…十日町地方。

馬鹿な子ほど可愛い

馬鹿にかまう大馬鹿

馬鹿にかまえばとも馬鹿になる

(上越三郷)

馬鹿に理屈言わせい

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

(佐渡相川)

馬鹿の大足、こけの小足

(三条)

*こけ：馬鹿と同じく、思慮の足りない者をいう。

馬鹿の考え休むに似たり

☆

思慮の足りない者はいくら考えても妙案はでないから、いつそ考えない方がましだということ。一般にも言う。囲碁・将棋について「下手ノ稽たむ休ムニ似タリ」(『諺苑』)ともいう。

馬鹿の三杯汁

お汁のお代わりは二杯までがエチケツトという。

馬鹿の三杯、テエーロの五杯

(寺泊)

*テエーロ：馬鹿よりも上の大馬鹿。

馬鹿の長糸

(佐渡相川)

馬鹿の話と荒壁塗り

(山古志)

「周囲のことを考えない」(『山古志村史』注)意。

馬鹿の馬鹿ぶとり

(長岡富曾亀)

馬鹿の馬鹿喰い

(長岡富曾亀)

「馬鹿の馬鹿飲み」ともいう。

馬鹿の馬鹿気

(長岡富曾亀)

未詳。『富曾亀民俗誌—富曾亀郷土誌(上)—』に載せる。

馬鹿の馬鹿笑い

(長岡富曾亀)

馬鹿のまねする利口もん、利口のまねする馬鹿もん

(長岡富曾亀)

馬鹿、馬喰、博打うち

(山古志)

悪者たち。

馬鹿も休み休み言い

*言い…言え。

婆育ちは三文安い

「お祖母さん子は三百安い」などと同じ。甘やかされて育つからである。

婆育て子の三文足らず

(荒川町)

「婆育ちは三文安い」と同じ。

バラは嫁に取らせ

(佐渡相川)

*バラ…サルトリイバラ(植物)の方言であろうという(本間伸夫氏談)。

バンジョウのつかみ取り

サンマは海面近くの藻などに産卵するため、佐渡の外海府ではその習性を利用して中央に穴を開けた筵を海に浮かべ、そこにやつてくるサンマを手づかみで取る漁法があるという(真野町の山本修己氏談)。*バンジョウ…秋刀魚。

日陰の豆も時が来ればはぜる

☆

*はぜる…実が熟して固くなり殻を飛び出すこと。若者の性のめばえなどという。「蔭裏の菽も発氣時分には発氣る」(『譬喩尽』)。

光るほど鳴らん

(長岡富曾亀)

稲妻がしきりと光るときは雷の音がしないことだが、口で強そうに威張る人ほど実は弱い意。

東雷音ばかり

(長岡)

東で鳴る雷は音ばかりで夕立にならない意。「越後地方にていふ諺。東の方に雷鳴する時雨降らずとの義」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。なお、表現は「浜の松風音ばかり」のもじり。

東雷と女の腕まくり

(長岡富曾亀)

恐れることはない意。

東雷と死人は帰ったためしがない

(長岡富曾亀)

これも東に鳴る雷は雨を降らせることはないという意味だろう。
天気は西から東へと変わるのが順序だからである。

東虹は百日の日照り

(上越三郷)

東虹は晴れ、西虹は雨

(上越三郷)

東夕立、雨持たず

「東雷、音ばかり」と同じ。

火が尉じょうになる

☆

老人の白髪から、火が燃え尽きて白い灰になるさまをいう。

*尉…能楽で、男の老人をいう。

彼岸ジイラ

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

*シイラ

…日本海で漁獲される大型の魚。夏から秋にかけて食べる。

彼岸すぎても七荒れ

(上越三郷)

油断のならぬ天候をいう。

彼岸過ぎても七ななはだえ

(柏崎)

春の彼岸過ぎにも雪の降る悪天候が七回もあること。
…はだれ、すなわち春の淡雪。

*はだえ

彼岸過ぎての麦の肥え、三十過ぎての親の意見

☆

手遅れで役に立たないこと。何の効き目もないこと。「彼岸過ぎての麦の肥やし、三十過ぎての男に意見」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)

彼岸過ぎての麦の肥え、土用過ぎての稲の肥え

彼岸太郎

彼岸の一日目の天気がその季節の天候を左右すること。

彼岸太郎、土用次郎、八専三郎、寒四郎

☆

天候を左右するそれぞれの節後の日を一、二、三、四でまとめたもの。「彼岸太郎八専次郎土用三郎寒四郎」(『諺苑』)。

彼岸のわせグリ、わせアケビ

栗やアケビが始めて実るころをいう。

彼岸の海苔雪のりゆき

(長岡富曾亀)

春の彼岸に雪が降ると海苔がたくさん採れるという。

日暮れの山入り

(村上)

仕事に取りかかるのが遅い人をいう。日が暮れては山に入れない。

膝かぶの茶屋に腰掛ける

(村上)

しゃがんで肘を膝頭の上につき、少し楽な姿勢をとること。
*膝かぶ…膝がしら。

左孕みは男の子

(長岡富曾亀)

ヒツボウ神家においてババが頭とかした

(佐渡相川)

「正月十一日の夜は女に髪結わせぬ」の諺と関連して、「沖で漁具が乱れる」ときのことという。

日照り麻

日照りには麻がよく育つこと。

日照りかぼちゃ

かぼちゃは日照りが続くとよく育つこと。

日照りかぼちゃ、降り夕顔

夕顔は雨が多いと良く育つこと。

日照りに困窮なし

日照りは干ばつの危険もあるが、作物全体を不作にすることはないこと。次の「日照りに不作なし」と同じ。

日照りに不作なし

日照り綿

人言われが人を言い

自分のことを棚に上げて他人を批判すること。

(佐渡相川)

一口浄瑠璃と己が家を知らぬ者なし

(南魚沼)

南魚沼地方の諺で、この地方が芝居や俗曲などの盛んなところだったことを示す。同地方には「男は一生に一度地芝居と伊勢詣りはするものだ」という諺もある。なお、「一口浄瑠璃と我が家の門をくぐらぬ者はない」(佐渡)ともいう。*一口浄瑠璃：ちよつとした短い浄瑠璃の文句。浄瑠璃は江戸時代の語り物。

一口ものに頬を焼く

☆

わずかなことに関わつて失敗すること。「小欲を忍ばずして大過を得るをいふ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』199)。「諺苑」にも載せる。

ひとこと言えばふたこと返す

(長岡富曾亀)

ひと事と小俵はいいやすい

(上越三郷)

自分の事を棚に上げての、人の批判は、小さい俵が結び易いように、言いやすいものだ。「い」に、「言」と「結」を掛けたもの。

一つ劣りは金のわらんじで探せ (長岡富會亀)

女の側から婿とすべき男を言ったもの。男の側からは「一つめ増しは金の草鞋で探せ」となる。

一つ思い、二つ憎まれ、三つ見そめられ、四つ風邪ひき☆
「一つ思われ、二つ呪い、三つ惚れられ、四つ風邪をひく」(新井市) などともいう。クシヤミのこと。なお、クシヤミをひとつすると、おまじないに「思うたんびに逢われるか」と言う。人に思われると、その人に魂を鼻から取られるので、そのためにこう言うのだという。おまじないの言葉としては「ばか、こんちくしよう」ともいう。ただしまた「思うたら来いや」(栃尾市)、「用事あらば来い」(京ヶ瀬村) などともいう。「噴鼻二ツは譏らるゝ表示」、「嚏の名目、一褒、二譏、三笑、四風引」(『譬喩尽』)。

一つ雷、国がやかましい (長岡)

「一つ雷は国の騒動だ」(『新発田市史資料』第五巻・民俗) ともいう。

一つ雷は作のよい兆 (新発田)

一つ栗が落ちたよう (長岡富會亀)

未詳。『富會亀民俗誌——富會亀郷土誌(上)——』に載せる。

一つ鍋の鯨汁 (長岡富會亀)

未詳。『富會亀民俗誌——富會亀郷土誌(上)——』に載せる。

一つ二つは可愛い盛り、三つ四つはいたずら盛り、七つ八つは憎まれ盛り (長岡富會亀)

「五ツ六ツハ憎レ盛り」(『諺苑』)。

一つ返事 (長岡富會亀)

すぐ返事して承諾すること。

一つめ増しは金の草鞋で探せ (長岡)

一歳年上の女房が良いこと。「一つめ増しはめんば飯で探せ」(六日町) ともいう。

一つめ増しと七つ違いは金の草鞋で探せ

一つ違いの嫁と七つ違いの嫁は良い縁組みだという意。

一つのは犬も食わぬ (柏崎)

未詳。「越後の一つ残し」と関連するか。あるいは贈り物をするときの作法として、たった一つのは贈るべきでないという意か。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

人と小俵はゆいやすい (山北町)

*ゆう…言う、結う。「ひと事と小俵はいいやすい」と同じ。

人取り蛸が人に捕られる (佐渡相川)

ミイラ取りがミイラになる、と同じという。

人の馬のころんだような

(清里)

重大なことが起きてても我関せずの態度をとること。馬がころぶとは、農家にとって大切な農耕馬が病気になるって死亡のおそれがあるような事態をいう(城内地区古老の話)。

人の口ふさいでも腹はふさげず

(佐渡相川)

「腹」は心中の思いをいう。

人の喧嘩は買うても入れ

(長岡富曾亀)

喧嘩の当事者ではないから安心して仲裁を引き受けることができるとし、もし仲裁に成功すれば双方から感謝されるから損はないということだろう。

人の事いわば座敷三度見てもものいえ

(佐渡相川)

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

人の賽銭で鰐口たたく

(三条)

厚かましいこと。

人の財布で賽銭

(村上)

「人の種で相撲を取る」に同じ。

人の身上と着物の裏見た人はいない

(佐渡相川)

人の身上と着物の裏は見んがよい

(佐渡両津)

人の切ないのは三年でも我慢する

(長岡富曾亀)

他人の苦しみはいくらでも耐えられること。当事者にならないと痛みや苦しみは実感できないものであること。「人の痛いのは三年でも辛抱する」などともいう。

人の提灯で明かり見る

(佐渡相川)

他人を利用して利益を得ること。「人の種で相撲を取る」に同じ。

人の手花は美しい

(佐渡両津)

人のものは何でも良く見えること。

人のてんぼ、我てんぼ

(山北町)

人の嘘を信じてそれを他人に語れば自分が嘘つきになること。「人の虚言は吾虚言となる」(『譬喩尽』)。*てんぼ…嘘。

人の情けは世の情け

(上越三郷)

特定の人から受けた情けでも、それを世の中全体から受けた情けと考えて、お返し行動をせよという意か。

人のへので夜這い

(六日町)

苦労しても自分に得のないことか。*へのこ…男の性器。

人の飯は身の薬

他人の家での食事はよい人生経験になること。

人のもので辞儀する

(長岡富曾亀)

厚かましい振る舞いか。

人は衣裳

馬子にも衣裳、と同じ。

(長岡富曾亀)

人は死んでも手の跡残る

死んだ後でもその人が作った物や書いた物は残ること。「死しんデモ手ノアトハ遺ル」(『諺苑』)。なお、「死しんデモカイタ物力言フ」(『諺苑』)という諺もある。

☆

人は人中、田は田中

人間は人中に交わつて経験を積んだ者が良く、田は多くの田に囲まれた真ん中にあるのが良い意(熊代彦太郎著『俚諺辞典』)。

☆

人は病の器

人間に病気は付き物だから。一般にいう。

人真似小真似、滝谷の狐

人真似する者をからかつて囃し立てるときの言葉。

(柏崎)

人目良しのおからめし

「おから飯は菜飯などより白くて見栄えはよいが、見かけだけで、うまくない。見かけたおしのこと」(『佐渡 相川の歴史・資料集 九』注)。

(佐渡相川)

一人だちの千人転ばし

節句など休むべき日に働いて他人に迷惑をかける者のこと。自分

(山古志)

のことだけ考えて、他人の迷惑を考えない人のこと。

ひとりっこは持たんに劣る

一人っ子よりは、子どもがいないほうがまだましだという意。
*ひとりっこ…一人っ子。

(長岡富曾亀)

一人口は食わなくなるとも二人口は食われる

(長岡富曾亀)

一人では生活できなくとも結婚して夫婦二人になれば、かえつて生活できるようになること。

一人っ子関白の位

(清里)

甘やかされて何でも要求が通るからである。ちなみに、一人っ子政策がとられている現代中国では、一人っ子を「小皇帝」とか「孩子王」と呼んでいる。

一人もんに長者なし

(六日町)

独身者に金持ちはいないという意。

人を見たら泥棒と思え、火を見たら火事と思え

☆

「人は盗人、火は焼亡」(『譬喩尽』)。

ひなた狂言

(三条)

火が燃える炉端を囲んで、仕事をしたり、体を温めたりと各人それぞれ行動を取ることという。「狂言」は芝居のこと。炉端の様子が芝居の一場面のことからいうか。

火にあたるより陽にあたれ

(上越三郷)

囲炉裏や火鉢の火よりも太陽の光のほうが暖かいからである。
*陽…太陽。

丙午は亭主人食い殺す

(長岡富曾亀)

*丙午…丙午に生まれた女。 俗信。

百姓は山と生きる

(南魚沼)

南魚沼地方の諺。『宮栄二先生古稀記念集・越佐の歴史と文化』に載せる。

百姓の不作話と商人の損話

百姓の不作話と商人の損話
当てにならないこと。

百姓の去年作

☆

百姓は、去年は上作だったとは言いが、今年の作柄が良いとはめつたに言わないことから、転じて、いつも不満ばかり言う人のこと。「百姓の去年ものがたり」(『毛吹草』)。

百姓の秋大名

(長岡富曾亀)

百姓は収穫がある秋には豊かになること。

百姓は義理かき、事かき、恥をかき、やっここそそれで粉っ

かき

(六日町)

百姓の辛さ。

百で買った馬みただ

(六日町)

寝てばかりいる者。これに対して、立つてばかりいる者を「立山

から来たようだ」(二条)という。

百年目の大年

(佐渡両津)

めつたにない出来事が起きたという意味で、良いことにも悪いことにも使う。(渡邊清香氏調査)

百両の馬にも難

☆

「名馬にも難がある」と同じ。「百貫の馬にもたり」(『毛吹草』)。

百両のかたに編笠一蓋

☆

割にあわないこと。「千両のかたに笠一蓋」(村上)ともいう。「百貫の代りに編笠一蓋」(『譬喩尽』)。*かた…抵当。借金のしるしとして取る物。

冷酒と親の意見はあとから効く

「親の意見と冷や酒は後で効く」と同じ。

昼生まれの伊達こき

(長岡富曾亀)

「朝生まれの稼ぎ手」と対の諺。昼生まれの人は身なりにばかり気を遣う傾向があるということ。

昼は碁を打ち、夜は田を打つ

(佐渡相川)

怠け者に対する皮肉という。

広瀬男と栃尾女

(栃尾)

栃尾市の諺。「広瀬」は、旧北魚沼郡入広瀬村。それぞれ美男美女が出るところという。

広瀬夕立の古志日照り

(栃尾)

火を焚き付けることができないう者は一丁前でない(山北町)

(※表現上は諺から外れるが、昔の生活がうかがわれるので採用した。)

貧すれば絹着る

(清里)

「なうて絹着る(外に能がないから一つのことだけを自慢する意)」

(柳田国男『なぞとことわざ』)と同じか。

貧すれば情こまやかなり

(上越三郷)

「貧すれば鈍する」の逆。

貧僧の重ね齋

☆

「貧乏寺の重ね齋」ともいう。「貧僧の重ね齋」(『譬喩尽』)。

びっこ馬の高あがり

☆

身分不相応の地位につくと失敗する意の「桂馬の高上がり」と同じか。「桂馬ノ高上り歩ノエジキ」(『諺苑』)。

病氣と空荷は軽いほど良い

(山北町)

「荷物と病は軽いほど良い」と同じ。

貧乏稲荷でトリイがない

(長岡)

人間としての取り柄(鳥居を掛ける)がないこと。

貧乏神は先に行つて待つている

(長岡)

貧乏からなかなか逃れようがないこと。

貧乏しようでて水甕から火が出る

(佐渡相川)

よりにもよつて火の出るはずのない水甕から火事を出すのはよっぽどの不運。*貧乏しようでて：貧乏しようというわけで。

貧乏寺の重ね齋

(清里)

貧乏な寺の住職にとつては立て続けに法事があると助かる意。ちよつと良いことが続いたときのたとえ。また逆の意味で、せつかくの法事や葬式が重なつてしまつて二度の収入が一度になり貧乏の助けにならない運の悪さにもいう。「貧僧の重ね少用」(『世話尽』)。

貧乏寺の香つき杵

(六日町)

男の陰茎が大きいことという。

貧乏人の子沢山

貧乏に親類なし

(新津)

貧乏になると親類も相手にしなくなるからである。

貧乏の八重漬け

(長岡富會亀)

家計が非常に苦しいこと。

貧乏の張り肘

(佐渡相川)

貧乏人の見栄っ張り。

貧乏の子たくさん

貧乏ものから塩くい

塩辛い物をおかずにすれば少しの量で済むからか。

(佐渡相川)

貧乏者の煮る粥はゆるくなる

☆

「何事も思うことがうまくゆかぬこと」(渡辺行一著『越後南魚沼民俗誌』1971)。「諺苑」には「貧乏人ノニル粥ハシルクナル」とある。

夫婦喧嘩と春の雪

すぐに消える(すぐ収まる)。

夫婦喧嘩は宵のうちばかり

(荒川町)

夫婦喧嘩とあいの風は夜に入れれば止む

地方によっては「夫婦喧嘩と西風は夜に入れれば止む」などともいう。
*あいの風…夏の日中、北東から吹く涼しい風という。

夫婦は他人の集まり

吹かなくても寒風、見なくても姑の目

強く吹かなくとも寒の風は冷たいし、見ていなくとも姑の目は気になるものだ、の意。

吹かねど広間風、言わねど勝場口

(佐渡相川)

未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

露の葉がひっくり返ると雨になる

(佐渡相川)

蛙、蛇、蛞蝓

(山古志)

三すくみ。

フクが餅はフクが好き好き

(山古志)

昔話より。自分の物は自分の勝手だ。*フク…フクガエル。ヒ

キガエル。

福は寝て待て

フグの頭は狐も食わぬ

(柏崎)

いくら美味しいフグでも頭までは食えないこと。価値あるものも場合による意。「腐っても鯛」などの逆。

普請と葬式は一人でできん

(長岡富會亀)

かつて家普請や葬式は集落みんなで助け合って行なうものだった。

藤が伸びると来年は雪

(佐渡相川)

藤倉男に中尾女

(松之山)

旧東頸城郡松之山町の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

布施ない経は読まない

金にならないことはいらない。一般にもいう。

布施ほど経は読まぬ

人は支払う金の分ほど仕事をしないう傾向にあることをいうか。

「布施だけの経を読む」といえば、もらう金の分だけしか仕事をしない意。

二日泊まらぬ馬鹿智、三日泊まる馬鹿智

(栃尾)

嫁の家に行つて一泊しただけで帰るのは心遣いが足りないというものだが、また三泊もするのはその家の迷惑を考えない馬鹿だという意。馬鹿婿は礼儀知らずの婿を嘲つていう語。

二日の正夢、三日に語れ

(寺泊)

旧寺泊町大字野積中浜の諺。正月二日の初夢は、すぐ人に語る。と夢の内容がかなわなくなるから、翌日の三日まで待てという意。(長岡市教育委員会寺泊分室の旭さん調査)

船七、馬六

(佐渡相川)

酒の飲み方。船に乗るときは七分目に、馬に乗るときは六分目にひかえて酒を飲めという意。

舟の絵の手拭いを沖で被るな

(佐渡相川)

「舟を被る」が転覆に通ずるところから忌む。

文は遣りたし書く手は持たぬ

(山北町)

いろは歌留多から学んだ諺。

冬の火は嫁に焚かせよ

前掲のように「夏の火は嫁に焚かせんな」ともいう。

降りエ、照りゴマ

「エ」は、エゴマのこと。雨が多いとエゴマの作が良く、晴天が多いとゴマの作が良いという。「旱胡麻」(「諺苑」)。

不慮に備えて常に明朗

(上越三郷)

「備えあれば憂いなし」と同じ。

古川、水絶えず

☆

「大きい家には何でもあつて入用に応じて使えること」(『佐渡相川の歴史・資料集九』)。「古川に水絶えず」(『譬喩尽』)。

古渡路じんべの四日市深靴

(村上)

古渡路・四日市は、村上市の地名。*じんべ：足の先に履く藁細工の履物。*深靴：藁で作った長靴。それぞれ特産品として販売された。「何々男に何々女」型の表現を転用した諺。

古家の造作

☆

どこもかしこも傷んでいて直しても直しがいのないこと。『諺苑』にも載せる。

フンドシの天気古い

(山古志)

「無精なこと」(『山古志村史』注)という。

ぶいば抱かれよう

(長岡富曾亀)

調子にのって甘えること。 *ぶいば…背負つてやれば。

無精稼ぎは赤味噌なめる、生木白味噌世帯つぶし (堀之内)

赤味噌は熟成した古い味噌、白味噌はその年作つたばかりの新しい味噌。生木はまだ乾燥していない薪。費えが多いことか。「生木若味噌若世帯」などの転。

ぶすとマラの皮はもとへ返る

(佐渡相川)

「悪口毒口元へかえる」と同じ。 *ぶす…悪口。

ぶっかけ飯は食うな

☆

土方の飯場では飯に汁をかける「ぶっかけ飯」を厳しく禁止した。もし汁かけ飯にしたいのならば、逆に汁に飯を入れよ、という。

「山に登る時、汁をかけて飯を食ふな」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906)と「さう禁言」と同じ。

ぶっこめを食

(村上)

「収入があるとすぐに浪費してしまふこと(者)のたとえ」(『村上市史・民俗編』下巻)。

負った子三年

(山北町)

さがし物があまり身近で気が付かなかつたときのこと。「背負った子を尋ねる」とも。

負った子に浅瀬を教わる

☆

「負うた子に浅瀬をきく」ともいう。「負ふた子に教えられて浅瀬をわたる」(『毛吹草』)。

仏法も腹念仏

(佐渡相川)

僧侶が仏の教えを説いたりお経を読むのも生活のためだという意。

ぶっかつ

(長岡富曾亀)

甲乙のないこと。

ぶんの首に肥えが足らん

(佐渡両津)

努力が足りないこと。また、人間ができていないこと。「自分に水やりが足りない」ともいう。 *ぶんの首…ぼんのくぼ。(渡邊清香氏調査)

兵助牛のよう

(佐渡相川)

大食漢をいう。

下手な座頭の琵琶拵え

(佐渡相川)

芸が下手な者にかぎって、あれこれと道具のことばかり気にする意。「芸なし座頭の琵琶拵え」ともいう。

下手の大工でノミ一丁

仕事が下手で、酒が好きな人をいう。「あつば大工でノミ一丁」(巻町)などともいう。

下手の大工の仕上げを見やれ

(六日町)

下手の長糸

裁縫が下手な人は糸ばかり無駄に使う意。「下手の長糸、上手の小糸」とも。「下手ノ長緒―女工ノ詞」(『諺苑』)。

☆

下手の番匠は木難する

自分の腕を棚に上げて製品の善し悪しを材料のせいにする事。
*番匠…大工。

(佐渡両津)

下手は上手の飾り物

下手な人が居てはじめて上手な人が引き立つのであり、芸の下手な人もそれなりに存在価値があることをいう。

(荒川町)

へつついより女房

*へつつい…竈かまどのこと。

(新津)

屁と火事はもとから

「屁と火事は元から騒ぎ出す」に同じ。臭い臭いと騒ぎ出すのは当人からだということ。

屁と火事は元から騒ぎ出す

屁にかずけ糞にかずけ

あれこれ理屈をこねて責任を逃れようとする事。そのせいにする事、責任転嫁。

(六日町)
*かずけ…

へこの天気

未詳。役に立たないものを「蠅の子(へえのこ)」という(川合和江著『寺泊のことは』1980)。

(六日町)

へこの棘とげをほるよう

未詳。「へこの」には、男の性器または「蠅の子(へえのこ)」の意がある。

(六日町)

蛇が自分の前を横ぎるとよい事あり

(上越三郷)

蛇は七廻りしても我が身悪いと言わぬ

愚かな者は自分の欠点に気付かないこと。

(佐渡相川)

返事重かれ、尻軽かれ

口に出すよりもまず実行せよ、の意。

(佐渡相川)

返事早かれ、尻重かれ

右の諺を逆にして、返事ばかりでなかなか動かない者に対していう皮肉。

(佐渡相川)

薪で身上が分かる

家の廻りに積んだ薪をみれば、その家の経済が分かること。

べた凧は大時化の前触れ

べつたり膏藥

「金魚のフン」と同じ。いつも追隨して行動すること。(渡邊清香氏調査)

便所の臭気が強いと雨

便利な貸し鋤秋まで借りて

「村の鍛冶屋は、稲刈りの終わつたあとで鋤を取りに来ます。その代金は十二月に払います。農家の人にとっては、春に借りた鋤を秋に返すことになりすから、非常に便利なわけです。そんなことから、便利なものは効率よく使えということになります」(三郷地区のお年寄りの話)。

ほいとうの喧嘩で勝つてもだめ

勝つても何も成らない無駄な争い。 *ほいとう…乞食。

ほいとがここめこぼしたようだ

あきらめが悪くて、いつまでも同じ不平をつぶやいていること。 *ほいと…乞食。 *ここめ…くず米。

ほいとの子も三年たてば三つになる

「三年たてば乞食の子も三つ」と同じ。

ほいどの米拾い

下ばかり向いて歩く者のたとえ。 *ほいど…乞食。

疱瘡は見目の境、麻疹は命の境

疱瘡は、あばたになるからである。また、麻疹は死ぬか生きるかの病であった。 *見目…美貌。

ホウロク田地

素焼きの焙烙土鍋のように水が浸み出して干上がりやすい田のこと。 *ホウロク…焙烙。

朴ノ木男と戸沢女

旧東頸城郡安塚町の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

星の闇夜にカラ光り

秋の稲妻は怖い意。

細びき雨が二本続けば土手切れる

旧豊栄市横土居の土手は良く切れたという(『豊栄市史』)。

蛍の尻に提灯

余計なこと。

法華の糞かたまり

(佐渡両津)

(佐渡相川)

(佐渡相川)

(安塚)

(瀬波)

(豊栄)

(六日町)

仏教の一派である法華宗は団結が固いことから、団結が固いものを批難ぎみにいう。一般に、「固まり法華に徒党門徒」という。

骨折って叱られるのは傘屋の番頭だけ

(佐渡相川)

相手のために尽力して叱られることはない意。なお、昔の傘は竹の骨でできていた。

頬は曲がつても物は正直

(佐渡両津)

外見は不細工でも心は曲がつていないこと。また、そうあるべきことをいう。

惚れた腫れたは当座の仲

(長岡富會亀)

惚れて通えば千里も一里

昔の夜這いの風習が連想される諺。

本貸す馬鹿に、なす馬鹿

(六日町)

*なす…返す。

坊主だませば七代たたる

(荒川町)

坊主何か言うて三日の食失う

(佐渡相川)

賢そうにも言う口がかえって災いを招くこと。

坊主の髪と化け物を見たことがない

(山北町)

棒ほど願って針ほどかなう

(佐渡両津)

ぼた餅でほっぺたをたたく

(柏崎)

美味しいこと、気分の良いことの比喩。

ぼっこれ神楽

(長岡富會亀)

いつもぱくぱく何かを食べてばかりいる人をいう。

*ぼっこれ…壊れた。 *神楽…獅子頭。

盆が過ぎての蓮の花

(長岡)

時期を失うと価値がないもの。

盆参一日夕顔汁

(長岡)

「盆詣りは、古く親戚・近所をみんな回って歩いた行事であり、盆のご馳走にはヨーゴ汁(夕顔汁)とイゴ練りが欠かせなかった。よって、一日盆詣りにはどこの家でも夕顔汁とイゴでもてなしたものである(池田亨氏談)。」

盆と正月が一緒に来る

☆

きわめて多忙なこと。「盆卜正月カ一度ニ来タヤウ」(『諺苑』)。

盆の雨は虫になる

(佐渡相川)

盆に雨が降ると作物に虫が付くこと。

盆の十六日は地獄の釜も休む

盆の牡丹餅は犬も食わぬ

前掲の「夏のぼた餅、犬さえ喰わぬ」と同じ。

(山北町)

盆ほいとこの腹のようだ

「何でも詰め込む」意(小林存『越後方言考』より)。

*ほいと…乞食。

前で褒めるはけなすに劣る

その人の居る前で当人を褒めることは良くないこと。

(長岡富會亀)

前歯の欠けた子に構うな

「悪い子に構えば人中で恥をかく」とも。

(六日町)

蒔かずが芽を出す

「蒔かぬ種ははえぬ」の逆。思ってもいなかつた良い結果を得る

(分水)

いし。

蒔かずに生えたカボチャの苗は植えるものでない

(山北町)

蒔かぬカボチャは食うな

(山北町)

(南瓜と猫)の伝説による。割ると中に気味の悪い猫の何かが入

孫は来て良し、行って良し

(魚沼地方)

他家に縁ついた子が里帰りしたとき連れてくる孫に会うのはとても嬉しいことであるが、余り長く居るとかえってうんざりする。そんな老夫婦の気持ちをよく言い表している。

孫は目に入れても痛くない

(山北町)

孫への愛におぼれるさま。参考「馬鹿ノ孫誉」(『諺苑』)。

まさかの時は尻ごみ

(山北町)

口ほどにないこと。

升ますの物惜しんで斗との物失う

「爪で拾つて箕でこぼす」と同類。*升…一升。*斗…一斗

すなわち十升。

間違いと気違いはどこにもある

町の店たな借り、百姓の千刈り

都市の借家住まいは、生活程度からいえば一町歩農家の暮らしと同じ意か。

町場の雪隠裏と、しれ猫の糞丸後へ出る

(六日町)

*町場の雪隠…田舎の便所は玄關にあつたが、町の便所は家の裏手にあつたことからいう。*痴れ猫…ばか猫、あるいはいたずら猫の意か。

待ちる十五夜に雨が降る

(長岡富曾亀)

待ちに待ったせつかくの月見の晩に雨がふるのは、たいへん残念なこと。運の悪いこと。

松の切り株一代かぎり

(佐渡相川)

松の切り株からは芽(ひこばえ)が出てこないからである。

祭りだ盆だ

(柏崎)

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

ままがかの朝笑い

(長岡)

継母の機嫌はすぐ変わるから気をつけよとのこと。「朝のからから笑いは油断するな」などと同類。*ままがか…継母。

豆息災

豆は健康のもと。

豆と十七はあるうち手を出す

(長岡)

娘盛りの十七は男が手を出しやすいためから注意せよ、とのこと。豆も食べ始めるとやめられない。

豆の中打ち、嫁にさせろ

(上越三郷)

*豆の中打ち…乾燥させた豆の枝から大豆を取り出すため、さやを棒でたたく作業。

丸い卵も切りようで四角、ものも言いようで角がたつ

まわる遍路にためる遍路

(佐渡両津)

*遍路…聖地を巡礼するお遍路。

真ん中通れば如才ない

(六日町)

「真ん中取れば如才ない」とも。中庸の精神といったところ。

まんまは大将、仕事は少将

(巻)

たくさん食べるくせに仕事は嫌いな人のこと。*まんま…食事。

三足七鍬

(村上)

田打ちの方法。「三足前進する間に七回ほど鍬でさつと耕すこと」「(『村上市史・民俗編』下巻)という。

右孕みは女の子

(長岡富曾亀)

三島の百合を取ると時化になる

(佐渡相川)

*三島…佐渡の外海府、矢柄沖にある岩の名(浜口一夫氏談)。「百合」は、初夏の海岸に咲く岩ユリのことだろう。俗信。

水喧嘩は降るまで

(佐渡両津)

「雪の喧嘩も消えるまで」と同類。*水喧嘩…湯水時の水争い。雨が降れば対立は解消する。

水に湯を入れるものではない

(山北町)

「逆さ湯」は遺体の湯灌にするもので日常では絶対に禁じられ

た。

水は半身上

水に恵まれた家はそれだけでも立派な財産であること。

水腹もいつとき

「湯腹もいつとき」とも、「茶腹もいつとき」ともいう。「水腹もいつとき」
こたへる」(『譬喩尽』)。

☆

水見半作

類似の諺に「畦付け半分」ともいう。

(長岡富曾亀)

見たと舐めたは大違い

「百聞は一見に如かず」という諺があるが、さらに傍観者として見るだけでは不十分であること。何ごとも体験することが重要である意。

(長岡富曾亀)

三岳駆ける

「三岳」は、八海山、銀山、駒ヶ岳。それを一日で歩くほどの健脚をいう。

(山古志)

三月四月は袖でも隠す

妊娠の様子をいう。「三月四月は袖でも密す」(『譬喩尽』)。

☆

三つ子のこつちよう百まで

一般にいじり「三つ子の魂百まで」と同じ。

身でも皮でもねえ

(六日町)

赤の他人であること。

身と仏は見れば尊い

☆

「身と仏は見れば見るほど尊い」が正しい。「身」は自分自身のこと。「親と仏八見レ八見ホト尊」(『諺苑』)。

港祭りであとが無い

(佐渡両津)

未詳。*港祭り…両津港(夷港)の港祭り。

南風でもたんと吹きや寒い

(上越三郷)

物には程度があることか。

巳にかかる雨は午にもかかる

(村上)

巳・午は暦日。ただし、身と馬にも掛けてある。

蓑笠でんで持ち

蓑や笠はそれぞれ各自で用意しなければならないこと。すなわち自分のことは自分で責任を負うべきこと。一般にも言う。

*でんで…各自。

ミミズの京まいり

昔話より。「ムカデのしたく」と同じく、なかなかほかどらないこと(田中つとむ著『新編のことわざ一〇〇話』)。

見目よりも髪したら

(六日町)

持つて生まれた容貌よりも、身だしなみが大切の意。

宮下ぐつの富島炬燵、亀貝仙石緒の小曾根繩（長岡富曾亀）各地の名物。ただし、富島は炬燵であたつていただけ。仙石緒は下駄の鼻緒。

宮中女と堀之内男

（中里）
旧中魚沼郡中里村の諺。それぞれ美男美女が出るところという。

宮本武蔵で二刀流

酒も甘い物も大好きの意。

見るは法楽、買うは道楽

☆
見るだけで楽しめばいいのに、わざわざ買うのは道楽というもの。

「法楽とは神前に奏する歌舞及び楽なり、無代にて見ることを得」（熊代彦太郎著『俚諺辞典』1906）というわけである。「見ハ法楽」（『諺苑』）。

見るもん乞食

（長岡富曾亀）
見ると何でも欲しがること。

見れば目の毒

（長岡富曾亀）
見るだけならば良いようなものだが、見ることから欲望が起るから見ない方がよいこと。「見るに目欲、触るに煩惱」（『毛吹草』）。

昔とつた杵づか

☆
若いときの技術や労働は年をとつても身に付いていること。「昔操と夕杵柄」（『諺苑』）。

昔なじみと蹴躓けつまついた石は、憎いながらも後あとを見る

昔の歌は流行らん

（長岡富曾亀）
古いことを言うな、の意。佐渡の、「泣節にも流行がある」も同じ類か。

昔の南京焼で固い

「固い」の比喩表現。 *南京焼：中国渡来の磁器。

昔のなにかしより今の金貸し

（六日町）
*昔のなにかし：…血筋の良い先祖を持つ家柄であること。

ムカデのしたく

昔話より。上方詣りに行く百足むかでが、出がけに足の一本一本に草鞋を履き、宿屋に着くとそれを一つ一つ脱いだという話から、したくに手間取る様子をいつたものという（田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』）。

麦の帷子かたびら、菜のぬのこ

麦の土は薄くかぶせ、菜類の土は厚くかぶせるのが良いこと。

麦めしと他身たしんは食うときだけ

（佐渡相川）
未詳。『佐渡相川の歴史・資料集九』に載せる。

麦飯にとろろ汁

（長岡富曾亀）

「取り合わせがよくておいしいもの」(『故事俗信ことわざ大辞典』)。

むく犬の尻せつ

(三条)

「わけがわからぬということ」(『三条市史・資料編8 民俗』)。

むくろじは三年磨いても黒い

☆

*むくろじ：落葉高木の無串子。その実は固く黒い。「無串子八百年ミカイテモ黒」(『諺苑』)。

婿三代続けば身代残す

(上越三郷)

実の親子三代の場合は「爺貯める、息子楽する、孫使う」です。つからかんになるが、他所から入った婿はまじめに働くからである。

婿取り子は三文安い

(長岡富曾亀)

*婿取り子：婿を取って生まれた子。

婿取り三代身上

(長岡富曾亀)

「婿三代続けば身代残す」に同じ。あるいは逆に「三代婿が続けば貧乏になる」(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)意ともいう。

婿は座敷からもらえ、嫁はニヤからもらえ

(長岡)

「婿は出居るから嫁は戸口から」(山古志村)、「婿は上座から嫁は下座からもらえ」(巻町)などともいう。
*ニヤ：作業部屋。

婿は座敷から嫁は台所から

嫁取り婿取りの理想。

虫ざしは俵はし編んで待っている

(六日町)

「サシ虫は俵編んで待て」と同じ。

貉ひねの心経、馬の耳に風

(佐渡相川)

馬の耳に念仏、と同じ。

貉ひねのベエタで音ばかり

(佐渡相川)

貉はあたかも薪を割るような音を出す習性があることからいう。音ばかり大げさで実態が伴わないこと。「貉の割木で音ばかり」ともいう。
*ベエタ：薪。

娘三人持てば倉がつぶれる

☆

「娘三人持てば土蔵がつぶれる」(六日町)ともいう。「女の子三人形かたぐ付れば身代潰る」(『譬喩尽』)。

娘三人持てば身代つぶす

(上越三郷)

娘三人持つと身代が無くなる

山形の庄内地方でも良く使われる諺で、三番目の娘は越後へ養子に出したという(東北の話)。

娘十七、アザミの花もひと盛り

(長岡)

どんな娘でも美しいときがあること。

娘十七、八、糠ぬかの立つもおかしい

箸が転んでも笑う年頃のこと。「若ひ時は糠の崩るゝも可笑し」
〔譬喩尽〕。

☆

名月稼せぎ

怠け者の節句働き、と同じ。

(山古志)

娘と春の雪は固いようでとけやすい

男に心を許しやすいこと。 *娘：娘心。

(長岡)

名馬にも難ががある

どんなに優れた人にも欠点があること。

名物にうまいもの無し

娘一人に婿むこ七人

引く手あまたであること。

(長岡富曾亀)

目から火が出るよう

びっくりしたときのこと。「眼から火が出る」〔譬喩尽〕。

☆

娘婿の可愛いのと向むかこう脛すねの痛いのは我慢まがならない

(上越三郷)

めくらの垣かきのぞき

何もならないこと。『諺苑』にも載せる。

☆

参考「一人婿むこの可愛さとお臀いしの痒かゆとは堪忍かんにんならぬものじや」〔譬喩尽〕。

娘を見るより母を見よ

(上越三郷)

飯粒めしで鯛釣たうる

飯めしと言いつたら火事かじより急いそげ

(六日町)

胸かへが延のびれば、尻しつかへがつまる

朝の出掛けが遅くなれば、夜の帰りも遅くなるといった意味に使う。堀之内町の諺。 *胸かへ・尻かへ：馬の胸あてと尻あて。つながっているから連動する。

村松男むらまつおと次第しではま浜女

(紫雲寺)

旧北蒲原郡紫雲寺町の諺。それぞれ美男美女が出るところとい

飯めしの上の蠅は追おうよう

追い払はつても、すぐまた集あまってくる。あるいは、容易やすなこ

(佐渡両津)

飯を食って寝ると牛になる

めっこ目ばたき

容易なこと。朝飯前、と同じ。

(三条)

目に見りや憎うない、身上のためにようもない
孫は可愛いが財産分与のことなども気にかかる意。
(佐渡相川)

目の正月

見る楽しみを存分に味わうこと。「眼の正月せん」、「耳の正月せん」(『譬喩尽』)。

☆

目ほそ、鼻高、桜色

昔の美女の条件。

目細あつても口細はない

「飲食を好むものの多きをいふ」(熊代彦太郎著『俚諺辞典』)。
「目ボソアレドモ口ボソナシ」(『諺苑』)。

☆

めまし夫婦に福がある

*めまし…女が年上のこと。

(長岡富會亀)

目もと千両、えくぼ万両

千両万両の価値がある美貌のさま。一般に、「目もと千両、口もと万両」ともいう。

儲ける分別より、使わん分別

家計の維持についていう。金を儲けようとするよりも、使わないようにすることが家計には大切なこと。

(佐渡相川)

もうもう沢山いやいや沢山

(長岡)

もう沢山だと言いながらいつまでも飲み食いする人についていう。
「いやいや三杯、もうもう三杯」ともいう。「否々三杯」(『譬喩尽』)。

もぐらもちが石に当たったよう

(六日町)

障害物があるとあきらめてすぐ引き返すこと。
*もぐらもち…もぐら。

もしかあんにや

「長男の死亡等により次男以下が長男の地位に据はりたるもの」
(小林存『越後方言考』)。
*もしか…偶然の意。

持たせる根性、持つ根性

(佐渡両津)

荷物を他人に平気で持たせる人もどうかと思うが、根性良しで
気前よくそれを持つてあげる人もまた気が知れない、の意か。

持たぬご苦労、百の増し

未詳。子どもについていうか。

もち米倒しのつぎ盗人

(長岡)

実家から帰るとき、糯米や布を嫁ぎ先に持ち帰る娘を風刺した
もの。

もち米ぬすつと、布かんじん

(長岡)

右と同じ。結婚した娘が里帰りのとき実家から糯米を持っていったり、布をねだつて行く意。 *かんじん：元来は勸進。乞食の意に使う。

餅の中から屋根石

有り得ないことをいう。熊代彦太郎著『俚諺辞典』では、屋根に石を載せる風習のある北陸辺りの諺とするが、新潟県も同様。
*屋根石：コバや木の樹皮で葺いた屋根の重しにする石。

餅の中の粉

(佐渡両津)

精米技術が良くなかったころは餅の中に粉が残ることもあった。気にすれば気になるが、それほど欠陥ではない意。

餅は乞食に焼かせろ、魚は殿様に焼かせろ

餅を焼くときは焦げないようにしよつちゆうひつくり返す必要があり、魚を焼くときははじつくり片側から焼かなければ良く火が通らないからである。「サカナハ上臍二焼口餅八下衆二焼セロ」

(『諺苑』)

餅腹三日

(長岡富曾亀)

餅はご飯よりも腹持ちが良いこと。

もつけなし

(山北町)

つじつまの合わないことを言う人。隣県の庄内では、恐縮する意。

持ったが因果

「持ったが因果じゃ」(『譬喩尽』)

☆

持ったが病、根にある持病

(佐渡相川)

「持ったが病」は一般に言う諺。

元木にまさるウラ木なし

☆

最初に結婚した妻が一番良い意。「本樹ニマサル末樹ナシ」(『諺苑』)。 *元木：最初から連れ添った女房。 *ウラ木：後妻。

もとに増したる梢はない

(佐渡両津)

何でも元ものが優っていること。

もの言わずのものの言い

(佐渡両津)

沈黙しているが周りに強く影響を与える存在感のある人。

藻の裏に船をつなぐ

(寺泊)

海が凪いで無風状態のときにいう。

ものは人並み、団子も人並み

(長岡)

物事は人並みにしてさえいけばよい意。

もの見ぬ先の胸勘定

(佐渡相川)

捕らぬ狸の皮算用、と同じ。

股引もんばで中あつぱ

(六日町)

未詳。 *あつぱ：糞。

もらうなら告げでもいい、出すなら舌でも嫌だ (巻)

とてもけちな人のこと。「ダスコトハ舌ヲ出スモキラヒタ」、「ケレル八日ノ暮モキライ」(『諺苑』) *告げ…通夜や葬儀に招くときの死亡の知らせ。

貰うものは亡者でも、出すのは舌でもいいや (長岡富曾亀)

門徒物識らず、法華仏にならぬ (佐渡相川)

浄土真宗、法華宗の信者に対する悪口。

もんどしで水を汲む (長岡富曾亀)

やつても無駄なこと。 *もんどし…初通しの意で、目の粗い大きなふるい。これで水を汲むことは不可能。

もんどたびごと変わりもん (巻)

はれの日は普段と変わって餅や団子を食すること。 *もんび…祭日。

もんどには餅もん (長岡富曾亀)

祭日やお祝いなど特別の日には糯米もちこめを使った食物を食べるものだという意。(『長岡市史』民俗編)

焼いた鮎あな逃にがした (巻)

思いがけない損失のこと。焼いた鮎は、越後の七不思議を思わせる。

焼きぼた餅は嫁に食わずな (佐渡相川)

美味しいからいう。 (山北町)

焼き餅は焼きかげん 嫉妬は余り強いと良くない。ほどほどにした方がいいこと。 *焼き餅…嫉妬。

焼け跡に倉が建つ (佐渡相川)

焼け太り、ともいう。

焼け白に焦げ杵 割れ鍋に綴じ蓋、と同じ。

火傷はつるをひく (柏崎)

焼けぶとり

痩せの腹つぺらし (長岡富曾亀)

痩せている人に限って大食いであること。

やそべい地蔵がイカ場へ行く (佐渡相川)

不可能なこと。

矢田下戸八合 (柏崎)

未詳。矢田は、柏崎の地名。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

矢田の焼き餅

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

(柏崎)

やったりとつたりの節句の餅

(長岡富曾亀)
物をやりとりする事態になったときにいう。桃の節句に作る菱餅を親類近所でやりとりする風習からという(田中つとむ著『新潟のことわざ一〇〇話』)。

宿、味噌、木損、嬭手間損

寄り合いの宿をすると、味噌や薪を負担しなければならず、そのうえ家の主婦も何かと働かせられるから、少しも得なことがないこと。(もてなしのために色々と損失が生じること。)

宿、味噌、木損、嬭使われ損

右と同じ。村の集まりなどに家を会場として提供するときのこと。亭主は威張っているだけで、その妻は忙しいだけ。

屋根から石が落ちた

(佐渡両津)
*石…木端こはや杉の皮を敷いた屋根を押さえる民家の屋根石。

屋根ひきの鞆丸でつるし柿

(長岡富曾亀)
未詳。*屋根ひき…茅葺き屋根を葺く職人。天井にたまった囲炉裏の煤で体が黒く汚れることが多い。つるし柿もまた黒いもの。

弥彦山の雪が無くなると父の財布も空になる

これと逆に、「菜っ葉がとれるようになると嬭かかの財布が膨らんでくる」ともいう。春祭りなどの出費で父親の財布は空になるが、初夏になると畑で取れた野菜を市場に売る収入で母親のへそくりが増えること。蒲原平野の諺。

藪医者紙に迷う

未詳。『佐渡 相川の歴史・資料集九』に載せる。

(佐渡相川)

藪に黄金

「藪にも功こうの者」(『譬喩尽』)。

(長岡富曾亀)

破れかぶりの頬かぶり

すてばちになること、「破れかぶれ」の語呂合わせ。

(佐渡両津)

破れ頭巾で耳にかかる

耳ざわりで聞きたくもないことについていう。

(佐渡相川)

破れ間から手が出る

「喉から手が出る」と同じ。欲しくてたまらない意。

(三条)

弥平、山公事やまくじまた負けた

(佐渡両津)
「負けた」の語呂合わせ。この諺にまつわる何か背景がありそうだが、未詳。*山公事…山をめぐる訴訟。

病は気から膾なまは酢から

(佐渡相川)

山兔、皮の変わりて冬早し

(上越三郷)

野ウサギは冬になると色が変わつて白くなる。

山が近くに見えるると雨

(上越三郷)

東風と商人はうちに入れるな

(佐渡相川)

「商人と大風は家の中に入れるな」ともいう。*やませ…山を越して来る風。北東の風。「卯(東方)は山瀬、辰出し…」と風の方角を歌つた民謡も佐渡にある。

やませの後はおぼろ風

佐渡の相川で言う。

山の入り日は馬鹿が見る

(佐渡相川)

山ではまだ日が沈まなくとも、平地に降りて来るころにはもう暗くなり、帰りがおぼつかないからである。

山の神の日に山に入ると目を射抜かれる

山のずく梨糧にもなるが、人のずくなし用には立たぬ

*ずく梨…堅い実をつける山梨。*ずくなし…工夫や技量が足りない人。

山のずくなし花でも咲くが、人のずくなしぼろ下げる

「花」と「ぼろ」を対比させた表現。*山のずくなし…この場合は、たにうつぎ。

山の見落とすは付きもの

山菜採りや茸採りについて言う。山は広いから何につけ見落とさないはずがない。他人の後に行つても十分収穫があること。

病み上手の死に下手

(長岡)

病気持ちだがなかなか死なないことか。

病み上手の死に上手

(長岡富會亀)

人あまり迷惑を掛けない病人、また死者をいう。

病め医者、死ぬ坊主

☆

「病め医者死ぬ坊主」か。収入がふえるように、医者は人が病気になることを望み、坊主は人が死ぬことを望んでいること(熊代彦太郎著『俚諺辞典』1966)。

八幡芋のぐるりのよう

(佐渡両津)

子だくさんの意。*八幡芋…佐渡で作られている茎の青い里芋で、親芋のまわりにコブが多く付いている。(渡邊清香氏教示)

柔らかい綿には塵が付く

(佐渡相川)

「やさしく誠心のある者には人が寄り集まる」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)意という。

夕虹は百日の照り

夕べの風は母の風、あしたの風は父の風 ☆

夕方の風は穏やかだが、朝方の風は強い。「朝の風は翁の風、夕の風は母の風」(『譬喩尽』)。

夕焼けには鎌をとげ

「秋の夕焼、鎌をとげ」ともいう。

夕焼けは晴天、朝焼けは雨

(上越三郷)

雪おろし雷

雪少なければ干害あり

*干害…日照り。干魃。

雪と欲は積るほど道を忘れる

雪の上の糞あつは

だんだん下がること。雪の上の動物の糞は日が照れば次第に沈んで行くことからいう。

(長岡富會亀)

雪の喧嘩も消えるまで

たとえば、積もった雪の処分をめぐって隣家と争っていても、春

(上越三郷)

になればそもそも争いの種となる雪が消えてなくなるからである。「水喧嘩は降るまで」と同類だが雪国らしい諺である。

雪の根も涅槃まで

(佐渡相川)

「根雪の消えるのは二月十五日の涅槃会の頃との意」(『佐渡相川の歴史・資料集九』)という。

雪の降った次の日は裸者の洗濯

(山古志)

必ず晴れるので着替えのない者でも安心して洗濯できること。「雪降の朝は密男まおとこの洗濯日」(『譬喩尽』)、また「雪ノアクルヒハ密夫まおとこノ穿鑿」(『諺苑』)ともいう。

雪はネハンまで

(長岡富會亀)

*ネハン…三月十五日(新暦)の涅槃会。降雪はそれまで油断がならないこと。

雪道と鯨汁はあとほどよい

雪道は人が通った後のほうが歩きやすく、鯨汁は鍋底になるほど美味しくなる意。

湯の辞儀は水になる

☆

遠慮していると湯が冷めてしまうから、お風呂を勧められたらすぐ入れという意。「湯の辞義は水になる」(『譬喩尽』)。

指切っても血の出ぬやつ

(佐渡兩津)

冷血漢をいう。

弓も矢もたまつたものでない
堪えきれない意の語呂合わせ。

(佐渡両津)

夜明けの雨は笠脱いで待て

(佐渡両津)

「朝雨笠を脱げ」と同じ。

良い考えはあとから出る

(山北町)

酔い覚めの水戸戸知らず

酔い覚めの水は格別おいしい意。

良い仲の小さいさかい

☆

夫婦や恋人同士の喧嘩をいう。放つて置くべき喧嘩。「ヨイ中ノ
小イサカイ」、「思フ中ノイサカイ」(『諺苑』)。

宵にかいた禪あざし

(村上)

翌日はすっかり忘れている意。

*かいた…禪を締めること。

宵のドンチャン、朝げのフンチャン

(長岡)

酒を飲んでドンチャン騒ぎした翌日、不機嫌になることをいった。

*フンチャン…不機嫌。

宵の虹百日の日照り

(山北町)

「宵の虹、七日の日照り」、または「夕虹は百日の日照り」などと
もいふ。

宵の夜話、朝寝のもと

(佐渡両津)

夜更かしして朝寝坊することをたしなめたもの。

夜さりのもんに背くんでない

(六日町)

「夜のもんにはずれんな」(長岡)ともいう。

用心に怪我なし

(山北町)

用心は臆病にせよ

☆

臆病と思われるほど用心することはない意。『諺苑』に
も載せる。

余寒の壁通し

(佐渡両津)

立春後に来る寒さをいう。

余寒別れの大吹雪

(長岡富會亀)

欲する鷹は爪を削る

(佐渡両津)

欲で目を失う

(佐渡両津)

欲に目がくらむ意。

欲得より損がつらい

(佐渡両津)

未詳。利益の増大を図るよりも当座の損失を惜しむ気持ちから、

手に入れたものは手放したくない意か。

横座に座るのは猫、馬鹿、坊主

(山古志)

*横座：囲炉裏のわきの、主人が座るものと決まっていた席。それをわきまえている人は座らない。

吉井の米の飯に芋煮物

(柏崎)

未詳。吉井は柏崎の地名。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

よだれを出す子丈夫

(上越三郷)

夜つぱり嫌うて夜糞に間に合う

☆

「悪を排斥して更に一層の悪を迎へたことをいふ」(小林存『越後方言考』。前のものより後のものの方がかえって悪いこと。「夜溺キラツテ寝糞ヲタレル」(『諺苑』)。*夜つぱり：寝小便。

よつぱれ嫌うて夜糞にあう

(新津)

意味は右と同じ。*よつぱれ：寝小便。

四ツ郷男の興野女

(巻)

四ツ郷・興野は、巻町の地名。それぞれ美男美女の出るところという。

四つ晴れに傘を預ける馬鹿もある

*四つ：午前十時前後。その後晴れるとは限らない。

「四つ晴れには傘離すな、八つ晴れには傘捨てよ」(『譬喩尽』)。

夜爪を切ると親の死に目に会えない

☆

「申刻過ては除甲せず」(『夜爪除な。足袋履て寝な。親の死際に遇はずといへり』(『譬喩尽』))。

米山が出ていると晴れ

(上越三郷)

米山の笠雲、弥彦の胴雲

(長岡富會亀)

長岡辺りから見た場合のことで、天氣が晴れる前兆をいう。

米山の鯉型に野立ち

米山に鯉の形の雪形がたら野良仕事の始まり、の意。

世の中はいつも八月十五夜、俺が二十のかか十八、死なぬ

子の三人、減らぬ金の百両

(長岡)

理想の人生をいう。「いつも花咲く三月のころ、かかが十八の俺が二十、死なぬ子の三人、減らぬ金の百両」などともいう。「朝暮九月に常月夜米の飯に菜汁」(『譬喩尽』)。

世は千年のからくり

(柏崎)

夜びかりの朝寝坊

(山北町)

逆に「朝寝坊の夜びかり」ともいう。*夜びかり：子どもが夜遅くまではしゃいでいること。よびかりこき、ともいう。

夜道に日は暮れぬ

(荒川町)

どうせ遅くなったのだから急ぐまい、の意。何かものごとくに間に合わなくなつたような場合、今さら急いでも仕方がないという意味でも使う。

嫁と雪隠せんかんは遠いほどよい

遠方から来た嫁は簡単に里帰りしにくいからであろう。便所が遠くていいのは臭気が少ないからか。

嫁に行つた晩でどうにでもなる

(長岡富曾亀)

心配する娘に対していう諺。

嫁の辞儀はおばになる、湯の辞儀は水になる

(佐渡相川)

*辞儀：遠慮。この場合は縁談を断ること。

嫁のとりがけと朝日の出がけ

(佐渡相川)

あとでどうなるか分からないから褒めたりするな、の意。

嫁の三日ほめ、奉公人の後ほめ

人の価値は時間が経たないと分からないこと。「婦よめノ三日誉ほめ」(「諺苑」)。ただし、奉公人の場合は、やめた後で褒めるよりも雇つていたときに褒めてあげる方が励みになり、店にとつても良い。

嫁は姑に似る

(長岡富曾亀)

嫁は姑の使いがら

(村上)

嫁の能力を引き出すのは姑の指導にかかっている意。

嫁は台所の隅からとれ

(佐渡相川)

勤勉に働く嫁が理想とされたからである。

嫁はニヤから貰え、婿は座敷から貰え

嫁は目下からもらえ

(佐渡相川)

嫁を貰はば親を見て貰え

寄り合い欠かすな、もの言うな

(佐渡相川)

村の会合には必ず出席せよ。ただし、発言はしないほうが良い。そうすれば非難されることもない。「寄合よあひ事は多分に付け」(「譬喩尽」)と言つた諺もあり、事勿れ主義の勧めといったところである。

夜、口笛を吹けば蛇が来る

(山北町)

夜、爪切りはするな

夜、爪を切ると命が縮まる

夜の稲妻、雨招く

朝の蜘蛛は殺すな

金を運んでくるからという。

夜の者に離れるな

「人並みになれ」(『佐渡 相川の歴史・資料集九』注)の意とい
う。次の諺の転訛であろう。

夜のもんにはずれんな

(長岡富會亀)

夜、訪問先で出された食べ物はず必ず食べよということ。もし食べ
なければ帰り道で化け物に遇うという俗信があった。

呼んで来ない者は上客

(山北町)

招待しても来ない客は、催促などしないでかまわないでおけばい
い、という意。

来年のことを言うと鼠が笑う

(佐渡相川)

落城のあとのようだ

(村上)

大混雑、大混乱のようすをいう。実際に落城の歴史的経験をし
た城下町村上らしい諺である。

辣蕪らっぼうの皮剥むき、剥いても剥いても皮ばかり

理屈と入口はどうにもなる

(山北町)

「りくつ」と「いりぐち」の音の類似を効かせたもの。

理屈と膏藥はどこへでも付く

理屈はほつぺたにも付く

(佐渡相川)

右と同じく、どんな理屈も可能だという意。

利巧な子より馬鹿な子ほど可愛い

利口は鈍にあたる

(佐渡両津)

学歴のある人、或いは知ったかぶりの人は、世間知らずで、かえ
つて愚鈍にも等しい意という。(渡邊清香氏調査)

利口は馬鹿の使いもん

(長岡富會亀)

未詳。『富會亀民俗誌—富會亀郷土誌(上)—』に載せる。

利に利がつく

(佐渡両津)

「金には金が付く」と同じ。有利なものがさらに有利になる意。

流儀違いの鍵違い

(佐渡両津)

未詳。『加茂村誌』に載せる。

両足の下りたよう

未詳。『柏崎市史資料集・民俗編』に載せる。

(柏崎)

漁師根性目の先ばかり、明日の鯛より今日の雑魚

(佐渡相川)

「漁人性(情) 目の先限り」とも。

漁師と親の敵は会うたときに笠をぬげ

(佐渡相川)

「機会をのがすなということ」(『佐渡相川の歴史・資料集九』注)。

漁師のいつとき喰い

(佐渡相川)

漁師の先走り

(佐渡両津)

獵する猫は音を出さず

(佐渡相川)

口ばつかり達者で仕事をしない者に対する批判。

両方立てれば身が立たぬ

(柏崎)

両方いいのは頬かむり

(佐渡相川)

どつちにもいい顔をしたなら知らんぷりしているのが良いこと。

悋気の撤損すてぜん

(佐渡両津)

余計な心配をして気疲れするだけ損だという意(渡邊清香氏調査)。*悋気: やきもち。

臨終際より勘定際が大事

(佐渡両津)

金銭の支払いが大事なこと。

留守居の棚探し

(長岡富曾亀)

留守番で一人のときは、誰にも気兼ねなく、何かうまい物は無いかと棚探しできるのでいう。人が見ていないことを良いことにして勝手に振る舞うこと。

留守事の素麵振る舞いそうめん

(佐渡両津)

未詳。

礼も過ぎれば無礼になる

レもハ、ソもツ

(三条)

「あきれはてた、あいそもつきた」を略して、「あきれもハ、あいそもツ」といい、さらにそれを略して言ったものという。

老人の早寝

(長岡富曾亀)

老人は心の通う知恵袋

(上越三郷)

標語的で新しい諺。

六十一の木の股年とし

姥捨て山の木の枝に掛けられても仕方がない年になつた意で、還暦を過ぎて家の役に立てなくなつてしまつたこと（城内地区古老の話）。

六歳もん

ならずもの、与太者のことという。「熊蔵もん」と同じ。

（柏崎）

若いときの苦勞は買うてでもせい

*買うてでも…もとは「乞うてでも」（こちらからお願ひしてでも）だつたと思われる。「若い時の辛動しんどうは乞こてもせよ」（『譬喩尽』）。

☆

若い時二度ない、年がいつちや先がない

「若い時は二度は無い」（『譬喩尽』）。

☆

若衆の長着物

若者の怠け者。

（新津）

若嫁の強口こわぐちは出るもとだ

*出る…離婚。

（佐渡相川）

我が子には目がない

我が子ほめる阿呆

我が身のことは人に問え

『諺苑』にも載せる。

☆

我が物食うて人の前（目）かね

「世間体を考える」（『佐渡 相川の歴史・資料集九』注）べきこと。「我がもの食うて人の気をかね」ともいう。「自分の物食つて人の気兼ねかせよ」の意で、自分のものでも他人のもののごとく謙虚に振る舞えということ。

（佐渡相川）

ワサビは氣短か者にすらせれ

手早く摺る必要があるから。

（寺泊）

草鞋づくりでも本職にや構うな

どんなことにもその道の専門家がいること。

（六日町）

割にも子にも合わん

「割に合はぬ即ち勘定に合はぬ」（小林存『越後方言考』）意。「割にもこつぱにもあわん」ともいう。

悪い鷹には餌を飼え

「餌を与えて手なづける」（『佐渡 相川の歴史・資料集九』注）意という。「憎い鷹にや餌を飼え」（六日町）とも。

（佐渡相川）

悪口毒口元へかえる

他人に対する誹謗は結局我が身にはね返つてくること。

（佐渡相川）

われおもしろの人姦かまし

☆

にぎやかな楽しみも周囲の迷惑にならないように、との意をこめていう。『諺苑』にも載せる。

椀の縁が変わる

節日の行事食はご馳走だったので、普段と違うことをこういったもの。蒲原地方の諺。

語句別ことわざ一覽（索引）

（二つ以上の語句にまたがる諺は重複して掲げてある。）

索引項目

犬の糞	犬	一生	一升	医者	石	家	粟	蟻	雨	甘酒	兄	当たり前	小豆	足	朝寝	飽き	秋
女	親馬鹿	親子	おば	鬼	男	おじ	馬	嘘	牛	兎	魚	飲食	因果	入り日	芋	命	稲
勘定	寒	皮	烏	雷	神	竈	鎌	カボチャ	金	風邪	風	火事	笠	柿	嬬	顔	蛙
肥え	膏葉	荒天	喧嘩	怪我	鍬	倉	靴	口	糞	菜	草	牽丸	栗	牛馬	着物	杵	狐
塩	死	三度	三代	山菜	猿	作柄	財布	菜	根性	子守り	米	胡麻	子ども	こたつ	瞽女	乞食	後家
銭	雪隠	節句	脛	杉	雑炊	身上	尻	小便	上手	正月	出産	姑	霜	舌	地藏	仕事	辞儀

善光寺 葬式 蕎麦 損得 田 大工 大根 大師講 田植え 竹(筍) 伊達 種 倭 団子 男女 知恵 茶 長者 提灯 月夜

爪 手 亭主 天気 冬至 豆腐 道楽 年夜 年寄り 泥棒 菜 梨 茄子 鍋 縄 荷 二代 女房 人形 盗人

猫 鼠 寝る 馬鹿 化け物 箸 恥 畑 働き 初物 花 鼻 話 婆 浜 腹 孕む 針 春 晴れ

晩 火 日 光 膝 日照り 紐 百 百姓 評定 貧乏 福 船 風呂 禪 屁 下手 蛇 弁慶 穂

方言 坊主 法楽 ばた餅 仏 盆 孫 松 祭 豆 万 水 味噌 耳 みみず 見る 昔 昔話 麦 婿

飯 虫 餅 もっこ 物言い 宿 病 夕立 雪 夢 幼児 欲 嫁 嫁姑 嫁に食わす な 利口 漁師 礼 草鞋

秋

男心と秋の空

困窮年の秋上げ

田植え女に秋男

夏海、秋山

夏の作りは夜着を着せよ、秋の作りは布を

掛けよ

春風秋米

春の雨は沖から、秋の雨は山から

春の土用に天気が良いと秋の土用も良い

春は海、秋は山

春は沖見れ、秋は山見れ

春日照り餓死のもと、秋上げ半作

春南秋北

春やあ、秋西

百姓の秋大名

便利な貸し鍬秋まで借りて

秋なかの鎌

飽き

あぐね餅搗いた

早好きの早飽き

はや搗きの早飽き

朝寝

朝寝坊の宵つ張り

朝寝は貧乏の始まり

酒と朝寝は貧乏の近道

夜びかりの朝寝坊

宵の夜話、朝寝のもと

足

足元から鳥が立つ

後足が先に立つ

歩く足にべとが付く

後ろ足で砂を蹴る

片足棺桶

肥やしより亭主の足あと

二階から足下げる

両足の下りたよう

姑婆さそこたつやぐらの足

馬鹿の大足、こけの小足

三足七鍬

小豆

あざみの花の二つ咲きに小豆は蒔け

小豆は無精者に煮させろ

小豆の火は馬鹿にたかせろ

小豆は嫌う友の露

小豆は土用半作

雨降り豆の日照り小豆

送り団子の迎い小豆

ごまのおそ蒔き、小豆の早蒔き

天主小豆に地藏ソバ

小豆は祭の鐘聞きながら蒔け

当たり前

当たり前の十五日

当たり前ができにくい

当たり前の肥やし米

うまく行つて当たり前

こたつの前で当たり前

猫にマタタビ泣く子にかんぞう、おじにひや

飯当前

兄

兄の種、手ぬぐいにもらう

もしかあんにゃ

甘酒

甘酒こぼした

甘酒に酔うたおかめ

雨

朝虹は笠とる暇もない

朝虹は雨、夕虹は晴れ

雨晴らし夕顔汁

雨降りアワの日照りゴマ

雨降り豆の日照り小豆

雨降り日かげ作

雨降り八専、照りじつぼう

蟻は五日の雨を知る

粟島の雨と隣のぼた餅は来ないことがない

卯辰の雨は巳にかかると

海霧は雨、山霧は晴れ

親の恩と春雨は当たると知れぬ

海底濁れば雨となる

刈った茅が音をたてると雨になる

寒のうちの長雨は夢にも見るな

霧雨と親の意見は身にふりかかる

蜘蛛が縦に巣をかければ雨が降る

四十過ぎての道楽と七つ下りの雨は止らぬ

島が近く見えれば雨が降る

月暈日暈は雨

月が大笠かぶると雨が降る

天一天上雨降らず、十方暮れ風吹かず

夏の雨は馬の背を分ける

七つ上りは明日の雨

七つ下がりは通りが止らぬ

南葉山の雨は隣のぼた餅より早い

にわか雨と女の腕まくり

八海鉢巻は降ったことがない

春の雨は沖から、秋の雨は山から

東虹は晴れ、西虹は雨

路の葉がひつくり返ると雨になる

便所の臭気が強いと雨

細びき雨が三本続けば土手切れる

盆の雨は虫になる

待ちる十五夜に雨が降る

山が近くに見える雨

夕焼けは晴天、朝焼けは雨

夜明けの雨は笠脱いで待つ

夜の稲妻雨招く

寒九の雨は虫になる

寒九の雨に土用三郎

巳にかかると雨は午にもかかる

入り日の雨は七日続く

東夕立、雨持たず

蟻

蟻の一穴天下の破れ

蟻は五日の雨を知る

馬の踏んだみみずを蟻子が巻く

蟻ごのだい持ち

粟

粟粒五合

粟一粒は汗一粒

粟は他人に間引かせろ

姑婆さと粟畑は踏んづけた程よい

粟俵のふが切れたようだ

粟糠と嫁の難、たち止まね

家

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは

二代子を見よ

家柄より芋幹

家柄より鋤柄

家の身上は嬢が持つ

一家に子どもと同じ年の動物を飼うな

家の中に女房二人は要らない

大犬、狼よりは古家の漏りがおつかない

この世におつかないもんは古家の漏りと

米びつの舌出し

隣の家に倉が建つと腹が立つ

鼠の居ない家には住むな

古家の造作

外が明るくなれば、家の中は暗くなる

石

鯨場の石

石車に乗つても口車に乗るな

石飛んで碁に勝たず

石の印判

石を投げても届かない

うらみは水に流し恩は石にきざみ

石仏にものを言わせる

土台石をはねる

土台石の腐るまで

土台石も三代目

二月の石かやし

昔なじみと蹴躓いた石は、憎いながらも後

を見る

餅の中から屋根石

屋根から石が落ちた

もぐらもちが石に当たったよう

医者

医者が取らにや坊さんが取る

医者、坊、カボチャ

一に名医、二に薬

柿が赤くなると、医者どんが青くなる

葬式すんでの医者話

田中の医者どん、もとより悪い

腹八分目、医者要らず

藪医者紙に迷う

病め医者、死ぬ坊主

医者が枯れた

一升

一升どつくりは寝ても三合

一升飯炊くな

草一荷、米一升

木挽きの一升飯

一生

男は一生に一度地芝居と伊勢詣りはするものだ

げじげじも一生、なめくじも一生

これも一生、あれも一生

一年、三年、十年、一生

犬

犬が川端走る

犬と猫の喧嘩にニヤンワン

犬になるなら、オオドコの犬になれ

犬になるなら大屋の犬になれ

犬に縄張り

犬にも吠えられると腹が立つ

犬の逃げ吠え

犬の蚤で噛みあてる

尾を振る犬は打てぬ

住もうばおどこの犬

外孫かわいがる気があつたら、犬の子

かわいがれ

夏のぼた餅、犬さえ喰わぬ

夏の鯛は犬さえ喰わぬ

一つものは犬も喰わぬ

盆の牡丹餅は犬も喰わぬ

犬子が酒に酔ったよう

犬の道を覚えたよう

犬にもくれず柵にも置かず

牛に乗って犬に吠えられるよう

むく犬の尻

犬の糞

従兄弟と犬の糞は羽田の浜にある

いとこはとこは道端の犬糞

犬の糞の高上がり

犬の糞で敵とる

従兄弟同士は犬の糞より悪い

犬の糞の化け物

葬礼場の犬の糞

稲

稲は土で作れ、麦は肥えて作れ

五月の雷は稲に良い

彼岸過ぎての麦の肥え、土用過ぎての稲の肥え

命

稲の穂と命は長いほど良い

命に替える宝なし

お湯の寿命は水となる、嫁の寿命はばばあ

となる

元日にくしゃみするは長命の相

大食は短命

疱瘡は見目の境、麻疹は命の境

夜、爪を切ると命が縮まる

芋

家柄より芋幹

芋種盗んでも子種盗むな

芋の誕生日、十月十三日

さつまいものつるかえし

里芋は田植えの歌聞いて芋を出す

茄子は七さく、芋は八さく

八幡芋のぐるりのよう

吉井の米の飯に芋煮物

入り日

入り日の雨は七日続く

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは

二代子を見よ

二十五がすむと男は入り日

山の入り日は馬鹿が見る

因果

生きているものの因果

因果の提灯、盆でも下がらん

死んだものの因果

持ったが因果

飲食

秋鯖嫁に食わせるな

秋夕ナゴ嫁に食わずな

秋菜嫁に食わずな

秋茄子嫁に食わずな

甘酸で食わんねい

慌てて食う人、三年先に死んだ

言えば言いで、飲めば飲み得

居候の大食い

一切食う役、仕事はせん役

一杯、人、酒を飲み、二杯、酒、酒を飲

み、三杯、酒、人を飲む

うまいものは背に食え

越後の食い倒れ

おいたおいたの大くらい

おじと綿打ちは食うが役

落ち着き三杯

おびやこのように物を食いたがる

親の意見と冷や酒は後で効く

駆けつけ三杯

上さいごの着倒れ、下さいごの食い倒れ

食うたら喰うた目を見せよ

食わず貧菜

下戸の肴荒らし

げすの成り上がりは餅の皮をむいて食う

こうぐり膾で皿なめた

こうぐり膾で酒三升

五月のヒルノトウは嫁に食わずな

在郷の大飯食い

酒で殺されるは泥鰌ばかり

酒飲みは台所前つめる

酒も嗜んで飲め

五月鯖、嫁に食わずな

サンマ嫁に食わずな

四月のアブラメ嫁に食わせるな

四月とうびる嫁に食わずな

死なば盆前、飲まば飯前

上州の着倒れ、越後の食い倒れ

上戸毒知らず、下戸薬知らず

シロウマの一尋飲み

すけこのあしでも喰いたい

雀の酒盛りのようだ

千刈り百姓食うや食わず

雑炊のこびつき嫁に食わせんな

底無し上戸

大食は短命

蛸と一つで我が身食う

冬至にカボチャを食えば風邪をひかない

年取り魚をいっぱい食った

土用茄子は植えんもの、師走カボチャは

食わんもん

無いもんが食いたい

菜、大根、半かまど

寝溜めと食い溜めはできない

寝る目と食う口はきりが無い

飲まで建てたる倉はない

飲まん酒にや酔わん

飲み気より食気

飲みたいやんめい、食いたいやんめい

のめしこきの大まくらい

箸一本で食べると片親になる

初もの食いは七十五日生き延びる

初物食べたら東向いて笑え

初物を食うと七十五日長生きする

早食い早糞、一芸のうち

一つのは大も食わぬ

一人口は食わなくなりとも二人口は食われる

冷酒と親の意見はあとから効く

フグの頭は狐も食わぬ

麦めしと他身は食うときだけ

焼きぼた餅は嫁に食わすな

漁師のいつとき喰い

我が物食うて人の前(目)かぬ

得たとき食わねば食う時やねえ

惜しがればおしが食う

酢でも麹、蕪でも食われない

飲め、食い山王

美味しいもの食うた後は油断するな

お小菜食いの身上壊し

※別項「嫁に食わすな」参照。

魚

青物は新町で買え、魚は四谷で買え

雨イカ、照りバンジヨウ

上野市、魚買

魚、蛸三年

魚ごころあれば網心

海腹川背

オングロベイも魚にん仲

カンニヨンスさんの夜にイカ大漁

キスの腹、磨いたよう

腐つても鯛の骨

困窮年の雑魚

酒は酒屋に、魚は納屋に

雑魚の魚まじり

鱧場のくつあんこ

釣った魚に餌はやらない

年取り魚をいっばい食った

ドンゴロベも魚の人情

熟れても鯛

逃がした魚は大きい

猫追うより魚片付け

ハタハタ荒れ

ハタハタは三年の古傷を呼び起こす

半夏生は池や海の魚も浮く

半夏生はバンジヨウ一匹いても浮き上がる

バンジヨウのつかみ取り

彼岸ジイラ

餅は乞食に焼かせろ、魚は殿様に焼かせろ

漁師根性目の先ばかり、明日の鯛より今日

の雑魚

のめし 鯀の七瀬走り

虎魚の下り潮に会うたよな面

兎

貂てば兎

牛

牛の小便十八町

牛の綱をまたぐとお産が重い

牛の尻を洗うたようだ

牛も人も七回食うて七回泳げ

暗闇から牛を引つ張り出したようだ

こつても我が用に走る

何でもない牛は宵からでしゃばる

ぬつそり牛の垣またぎ

寝た牛は寝ておらぬ

農どきのアブラメは牛の尾にも食いつく

兵助牛のよう

飯を食うて寝ると牛になる

牛に乗って犬に吠えられるよう

遅牛も早牛も淀に着く時は一つ

嘘

嘘つき盗人の始まり

嘘つき世渡り上手

嘘と坊主の髪はゆつたことがない

嘘の七不思議

嘘の三八

女の怖がりと猫の怖がりは嘘

仲人の嘘八百

馬

朝虹は馬の鞍おき合わせられない

荒らける馬も使い手から

馬があつても鞍がなきや使われん

馬の背に蒔 蒨こんやく

馬の踏んだみみずを蟻子が巻く

馬の糞の川流れ

馬、蛇の夢は良い、栗の夢は悪い

おんまが通ればチヨンチヨン雀がよけて通る

狐を天馬に乗せたよう

乞食が馬持ったようだ

椎谷の市でうますぎる

椎谷の馬のくそながし

死ぎ馬に鍼はり

てつきよが馬でうまいもの嫌い

夏の雨は馬の背を分ける

走り馬に鞭むち

人の馬のころんだような

百両の馬にも難

船七、馬六

貉の心経、馬の耳に風

名馬にも難がある

馬持たずに馬かすな

嬪と馬が全身上みづかみ

嬪と馬は半身上

駒のまらの内ぼたき

死馬引きにもお庚申の塔にも

びっこ馬の高あがり

百で買った馬みたいた

三条もんは生き馬の目を抜く

馬好きには馬の話

馬の糞、やち下駄で踏んづけたようだ

おじは貸すが馬は貸さぬ

おじ

おじおばは鳳仙花の種

おじと綿打ちは食うが役

おじは貸すが馬は貸さぬ

叔父見りや荷が重い

猫にマタタビ泣く子にかんぞう、おじにひや飯

当り前

初子産むとおじおば迷う

男

青菜の世帯はこんちの男に見せられない

大男総身に智恵が廻りかね

男は一生に一度地芝居と伊勢詣りはするものだ

男心と秋の空

男の子はつき持つ

男心と川の瀬は夜の間に変わる

男だてより小鍋立て

男は氣でもち膾は酢でもつ

男立派で尻あつぱしつぱ

小男の大まら

こみつな男に青菜見せるな

二十五がすむと男は入り日

男ぼいとおとの一人ごと

杉の木と男の子は育たない

鬼

鬼のそら涙

鬼のおらぬ地獄

親に似ぬ子は鬼子

小姑一人鬼千匹

頼めば鬼も人喰わぬ

小姑は鬼八疋

おば

愛想のない叔母のところより木の下

飴で餅食うか、おばさと寝るか

伯母のところへ行くより秋山へ行きやれ

おじおばは鳳仙花の種

おば借りたら姉返せ

西ッ風のあとオバ迎へ

初子産むとおじおば迷う

嫁の辞儀はおばになる、湯の辞儀は水になる

親子

いつまでもあると思うな親と金

生んだ子より育ての子

縁は罫綱、子は碇いかり

負うた子に、抱いた子

負うた子より抱いた子

親に似ぬ子は鬼子

親に似ぬ子は川に流せ

親にまさるは竹の子ばかり

親の恩と春雨は当たるが知れぬ
親の降る雨子にかかる

親の物は子の物

親の守りで子おもしろい

親の意見と霧雨はあとから効く

親のばち、菰かぶつていても当たる

親のばちは子にあたる

親ばかり畜生

親ばかりチャンリンそば屋の風鈴

親見て子貰え

親守り子機嫌

親を見て子を知る

可愛い子に他人の飯を食わせろ

霧雨と親のバチは、当たらんようで当たる

霧雨と親の意見は身にふりかかる

子ども三人産んで親の恩を知る

子は親の肩を見て育つ

子は親の見習いする

子持たずに子くれんな

死んだ子は利口

竹は親より子が育つ

立っている者は親でも使え

憎い子ほど物与えよ

二代子に別れたよりつらい

一人っ子閨白の位

我が子には目がない

上げる子より下げる子がめごい

親馬鹿

一の馬鹿は子をほめる、二の馬鹿は嬢ほめる

子どもの喧嘩に親の出る阿呆

自慢子慢、馬鹿の家

我が子ほめる阿呆

女

朝雨と女の腕まくりに恐れんな

朝雨と女の腕まくり

朝雷と女の腕まくり

にわか雨と女の腕まくり

春の雪と女の腕まくり

東雷と女の腕まくり

朝日のチャカチャカと女の腕まくり

いやだいやだは、女ごのくせ

美しいも皮一重

女の腰巻、火難を避ける

女の立ち話、騒動のもと

女と米の飯は白いほどよい

女と塩した物はすたりが無い

女の十三稚児の舞納め

女のすたりもんは無

女は着物髪型

女は産にこりず、漁師は海にこりず

女の横座は日三日しかない

女厄年十九のかね付き、泣きかね、別れかね

女の子持腹、はせ舟が通る

女の子産んだら桐一本

女の怖がりと猫の怖がりは嘘

女と山菜は見置きするな

三十過ぎての女の子の意見

四十女と春降る雪は固そうでとけやすい

正月十一日の夜は女に髪結わせぬ

正月に女が最初に死ぬと七墓つく

雑炊の塩辛いと女の気の強いは持ちあつかい

丙 午は亭主八人食い殺す

右孕みは女の子

大崎女の乳を握ったか、八色原で野糞をこい

たか

見目よりも髪したら

女に白歯見せるな

ハサミと女子は使いがら

蛙

蛙子の尾の抜ける時

蓮の葉に上がった糞蛙

蛙、蛇、蛙蟻

鯉になれ鯛になれてつても蛙の子は蛙

蛙、口から吞まれる

顔

がえつちの面に小便

チンがハクシヨシした面

せちうどが三晩泊まれば、猫の面が三尺になる
虎魚わさじの下り潮に会うたよな面

嬢

青田あかと嬢なつか褒める阿呆

朝あさげの雨と力力のずくなしは、末ははだかに
なる

朝あさ茶は嬢を質しに置いても飲のみめ

朝あさ冷ひやえと嬢のしみつたれは後あと裸はだか

家の身上かみかみは嬢が持つ

一の馬鹿は子をほめる、二の馬鹿は嬢ほめる

うちの身上かみかみは嬢でもつ、嬢の腰巻は紐でもつ

嬢なつか半身上

嬢と井戸水は替えたほどいい

嬢の悪いは六十年の不作

嬢を叱なぐさめるのもご馳走のうち

西瓜すいかと嬢の腰巻は赤いほど良い

宿、味噌、木損、嬢手間損

宿、味噌、木損、嬢使われ損

朝雨とノテツ嬢

嬢と馬が全身上

嬢と馬は半身上

柿

うみ柿づくし柿をとぶらう

うんだ柿がつぶれたとも言わん

柿が赤くなると、医者どんが青くなる

柿の花踏んで田植える

柿の皮は嫁に、梨の皮は姑に

柿の木三本あれば金が残る

腐れ柿がずくし柿を笑う

串柿の抜き食い

渋柿も串柿にすれば甘くなる

天竺てんじくと柿の軸じくほど違ちがう

屋根ひきの鞆丸たもまるでつるし柿

猿が柿さわしたようだ

笠

朝雨に笠いらす

朝雨笠を脱げ

朝あさ虹は笠とる暇もない

朝あさのでらめき、笠を持って

粟あわの笠霧、守門の胴霧、弥彦の根霧

米山の笠雲、弥彦の胴雲

笠のしずくも宿の得

関田の風雲、妙高の笠雲

千両のかたに七もり笠一かい

月が大笠かぶると雨が降る

鋸山の笠雪は大雪

百両のかたに編笠いっかい一蓋

蓑笠かさでんで持ち

夜明けの雨は笠脱いで待て

漁師いさなと親の敵かたきは会うたときに笠をぬげ

火事

おせん泣かすな、火事出すな、前の田の草

人に取らせるな

金時の火事見舞い

はったけ山火事、剣野の二才火事

話や納屋町、火事は四谷へ

人を見たら泥棒と思え、火を見たら火事と思え

屁と火事はもとから

屁と火事は元から騒ぎ出す

焼けぶとり

火事につばき唾

たたけ山火事、掘れ猪

飯と言つたら火事より急げ

風

開いた口に風吹かず

北あいのかぜ風と雇い人は日いつばい

あいのこわ吹ふきやませのもと

あいの風が吹いたら倉の戸を開けて待て

秋のやませはヒカダを招く

秋の浦西質置き空

商人あきとらしと大風は家の中に入れるな

朝あさ風、昼ひるあいのかぜ、夜よる南みなみ

朝あさ下り、夕方ゆふえいの風

朝南、昼北風の夕嵐

入り船に良い風、出船に悪い

大風の過ぎたあと

大風に灰まいたよう

影の神のイブ木をとると風が吹く

乞食袋と西風は晩になるほど大きくなる

春風満作

だしの風は山の風

月夜に大風なし

天一天上雨降らず、十方暮れ風吹かず

唐箕とうみの先せんにいるのと同じ

鶯ういが鳴くと風が吹く

西ツ風のとオバ迎へ

西は浄土の風

二百十日の風祭り

八月風のソバあたり

八十八夜の晩の風

浜の松風音ばかり

春風秋米

春のながせはあいぬ風

春のながせは仏の風

夫婦喧嘩とあいの風は夜に入れば止む

吹かなくても寒風、見なくても姑の目

吹かねど広間風、言わねど勝場せりば口

南風でもたんと吹きや寒い

東風と商人はうちに入れるな

やませの後あとはくんだり風

夕べの風は母の風、あしたの風は父の風

網の目にも風が止まる

なげ風、山から出る

針ほどの穴から棒ほどの風

風邪

一ほめ、二讒訴ざんそ、三惚れ、四風邪

一つ思い、二つ憎まれ、三つ見そめられ、

四つ風邪ひき

寒九の水を飲むと風邪を引かない

節季の風邪は買うてもひけ

冬至にカボチャを食べば風邪をひかない

夏の風邪は出る日が知れぬ

金

愛想づかしは金から起る

阿弥陀の光も金次第

有る時までの催促なし

あるようでないものは金、ないようである

ものは借金

板屋の乞食くわんしんは餓死ぬ、くず屋の乞食は金

貯める

一万俵一文しても金がなけりや買えぬ

いつまでもあると思うな親と金

運鈍根で金持ちになる

大金より小金取れ

おおふ万金丹

お金は阿弥陀ほど光る

お金一代、人間二代、味三代

親に貸した金と味噌の塩

柿の木三本あれば金が残る

金と相談

金には金が付く

金を積むより信用を積み

聞いて千金、見て一文

金銭に親子無し

金銭は浮き物

黄金は屑の中でも光る

怖いものは馬鹿と借金

三十後家は金貰い

死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

借金は質においたほうがいい

虱しらみと借金は隠せば殖える

辛抱する木に金がる

節季の金は羽が生えて飛ぶ

銭金は他人

千両のかたに七もり笠一かい

息災が金儲け

土に着いた金は堅い

爪ほうきで貯めた金

無いが意見の総仕舞

無くしても残るものは借金

なんばん食いに金貸すな

寝てこそ金も儲けたれ

藪に黄金

世の中はいつも八月十五夜、俺が二十のかか

十八、死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

朝まらの立たねんに金貸すな

危ないところに金がある

暗い所へ金が貯まる

脛すねに毛の無いんに金貸すな

昔のなにがしより今の金貸し

春の日と親類の金持ち

カボチャ

医者、坊ぼん、カボチャ

いやならさらおけ皿やのカボチャ、種蒔い

ても千もなる

おっさんとカボチャはなりしれだ

カボチャ蜂のよう

冬至カボチャに年取らせるな

冬至にカボチャを食べば風邪をひかない

土用茄子は植えんもの、師走カボチャは食

わんもん

蒔かずに生えたカボチャの苗は植えるもの

でない

蒔かぬカボチャは食うな

鎌

秋の夕焼、鎌をとげ

反り鎌にこごみ鈍

鈍が鎌

夕焼けには鎌をとげ

秋なかの鎌

竈

竈の口は八石山に向けよ

かまどをつぶす

身上も竈も立たん

菜、大根、半かまど

神

挨拶は時の氏神

あたらんなさわんな山の神

御神酒あがらぬ神はない

神先仏後

捨て子に産土神

せつない時の神頼み

近くの神様より遠くの神様

近づく神に罰当たる

七つ前の子どもは神様

ヒッポウ神家におつてババが頭とかした

貧乏神は先に行つて待っている

山の神の日に山に入ると目を射抜かれる

雷

秋の雷

朝雷と女の腕まくり

雷の多いは上作

寒のかどめ一つ雷は事を起こす

五月の雷は稲に良い

鳴つた雷一度は落ちる

馬鹿と雷は松之山から来る

ひがしかみなり
東 雷 音ばかり

東雷と女の腕まくり

東雷と死人は帰つたためしが無い

光るほど鳴らん

一つ雷、国がやかましい

一つ雷は作のよい兆

雪おろし雷

鳥

あとの鳥が先になる

いつも鳴く鳥

今ないた鳥がもう笑う

鳥の物の忘れ

鳥の糞かき

鳥は黒いに憎まれず口に憎まれる

鳥の物を隠したよう

鳥の口にケラが余つた

高く止まつたお寺の鳥

鰯場のたるま鳥賊

どこの鳥も黒い

鳥にぶつけるべとも無い

皮

美しいも皮一重

柿の皮は嫁に、梨の皮は姑に

げすの成り上がりは餅の皮をむいて食う

梨の皮は乞食にむかせろ、まくわの皮は

長者にむかせろ

腹の皮突つ張りや目の皮ゆるむ

ぶすとマラの皮はもとへ返る

山兎、皮の変わりて冬早し

辣蕪の皮剥き、剥いても剥いても皮ばかり

初茄子の皮をむく馬鹿さで、茄子の皮をむか

ぬ馬鹿

身でも皮でもねえ

糞皮三寸、身ではない

寒

暖かいようでも寒のうち、にらまぬようでも

姑の目

寒九の水で夏の水にあたらぬ

寒九の水はくさらない

寒九の水を飲むと風邪を引かない

寒九の雨は虫になる

寒九の雨に土用三郎

寒中の雪は百日目に大荒れ

寒中の雪、大雪のもと

寒中の雪は海の潮が速くなる

寒搦き米は土用を越せる

寒のうちの長雨は夢にも見るな

寒のかどめ一つ雷は事を起こす

寒四郎

彼岸太郎、土用次郎、八専三郎、寒四郎

勘定

もの見ぬ先の胸勘定

臨終際より勘定際が大事

狐

狐を天馬に乗せたよう

佐渡に無いものは狐と盗人

人真似小真似、滝谷の狐

フグの頭は狐も食わぬ

杵

昔とつた杵づか

焼け白に焦げ杵

貧乏寺の香つき杵

着物

お講にもソウデンにもこれ一つ

女は着物髪型

おんぼろさんぼろ

おんぼろさんぼろワカメの行列

借り着より洗濯

絹着るか孤着るか

着れば着寒い

着れば着風

庚申にも茅刈りにも

上州の着倒れ、越後の食い倒れ

辰に裁つて巳に着い

人の身上と着物の裏見た人はいない

人の身上と着物の裏は見んがよい

人は衣裳

貧すれば絹着る

若衆の長着物

狐を着ても錦を巻け

牛馬

牛を売つて馬にした

馬は馬づれ牛は牛づれ

栗

馬、蛇の夢は良い、栗の夢は悪い

彼岸のわせグリ、わせアケビ

一つ栗が落ちたよう

煮ても焼いても食わんねえのは姑婆さんと

栗のいが

牽丸

四十二のきんたま落とし

握りギンタマにホドコ手

蚤の金玉

屋根ひきの牽丸でつるし柿

石切りの牽丸、御老中の判

牽丸が上がったり下がったり

握り牽丸

町場の雪隠裏と、しれ猫の牽丸後へ出る

草

なぎおもだか娘の草だ、えいこえずぐも嫁取る草だ

葉

痛い目も葉だ

一に看病二に葉

一に名医、二に葉

葉九層倍、百姓百層倍

仕事は葉、だお者の病氣

上戸毒知らず、下戸葉知らず

毒にも葉にもならぬ

二度と効かぬ専福寺の目葉

人の飯は身の葉

糞

親の雪隠せんちんで糞くそをこく

鳥の糞かき

椎谷の馬の糞ながし

會地の反り歯か花田の鼻糞、吉井の夜ん糞

早食い早糞、一芸のうち

早飯早糞出世のもと

雪の上の糞あは

夜つぱり嫌うて夜糞に間に合う

よつぱれ嫌うて夜糞にあう

犬子いんこが大糞に向かったよう

たか

大崎女の乳を握ったか、八色原で野糞をこい

手前の雪隠にばかり糞こいてて

尻にかずけ糞にかずけ

股引もんばで中あつば

糞皮三寸、身ではない

くそくそが羽根を広げたよう

七つ子のふった糞は犬も食わぬ

口

開いた口に風吹かず

仇口あだぐちたたきの真口まぐちたたかず

言いい訳は口くちごたえ

石車いしくるまに乗つても口車くちぐるまに乗るな

陰口いんぐちいと影がさす

片口かたぐち聞きいては理が解らぬ

蛙かまど、口から吞まれる

竈かまどの口は八石山やちいしに向けよ

鳥は黒いに憎まれず口に憎まれる

鳥の口にケラが余った

口身上

口と腹は大違い

口はすんぐり

口に入れるもんならあんまのピツピでも

口のききようでお里が知れる

口の付いたものは片口かたぐちもいや

口は重宝

口貧乏

口は親まかせ、尻はせんちまかせ

口を控えて腹立てず

仕事は半丁、口弁慶

しゃべらぬほど利巧りこうなことはない

濡れた紙袋で口くちが開かん

一口ものに頬を焼く

人の口ふさいでも腹はふさげず

日細ひほそあつても口細くちほそはない

悪口毒口元へかえる

尻と言われても口と言われるな

靴

古渡路ふるとろじんべの四日市深靴

倉

あいの風が吹いたら倉の戸を開けて待て

下戸の建てた倉はない

千の倉より子は宝

隣の家に倉が建つと腹が立つ

飲まで建てたる倉はない

腹立てるより倉建て

娘三人持てば倉がつぶれる

焼け跡に倉が建つ

鍬

家柄より鍬柄

鍬台はぶなの木、立つていれば芽が出る
使つてゐる鍬は光る
半夏生は地に鍬立てるな
便利な貸し鍬秋まで借りて
三足七鍬

怪我

階段から落ちた怪我は大きい
寝て怪我した者はない
用心に怪我なし

喧嘩

後の喧嘩、先にする
犬と猫の喧嘩にニヤンワン
喧嘩すると銭三文損がいく
乞食の喧嘩で手間暇かまわぬ
子どもの喧嘩に親の出る阿呆
人の喧嘩は買うても入れ
夫婦喧嘩と春の雪
夫婦喧嘩は宵のうちばかり
夫婦喧嘩とあいの風は夜に入れば止む
ほいとうの喧嘩で勝つてもだめ
水喧嘩は降るまで
雪の喧嘩も消えるまで
良い仲の小さいかい

荒天

大雪小雪ダラク荒れ
寒中の雪は百日目に大荒れ
申西荒れに戌亥風ぎ
ハタハタ荒れ
八専大荒れ
彼岸すぎても七荒れ

膏葉

べつたり膏葉
理屈と膏葉はどこへでも付く
押し膏葉に吸い膏葉

肥え

一種、二肥、三作り
稲は土で作れ、麦は肥えで作れ
お振る舞いに行く前に馬肥え束ね
肥え畑の痩せメメズ、痩せ畑の肥えメメズ
肥やしより亭主の足あと
茄子の遠肥え
彼岸過ぎての麦の肥え、三十過ぎての親の意見
彼岸過ぎての麦の肥え、土用過ぎての稲の肥え
ぶんの首に肥えが足らん
肥え背負いは半休み

後家

後家三代貧乏
新潟は八百八後家

後家の高なし
三十後家は金貰い
四十後家がメがいい
二十後家は立つても三十後家は立たぬ
三十後家は刃売り

乞食

浮気と乞食は止められない
乞食の餅焼き
乞食が米をこぼしたようだ
乞食に朱椀
乞食の喧嘩で手間暇かまわぬ
乞食の宿はしても、子守の宿はするな
乞食袋と西風は晩になるほど大きくなる
乞食が馬持ったようだ
三人づれのひとら乞食
七月照りの七乞食
梨の皮は乞食にむかせろ、まくわの皮は
長者にむかせろ
盆ぼいとの腹のようだ
見るもん乞食
餅は乞食に焼かせろ、魚は殿様に焼かせろ
上の旦那、下の乞食
ほいとがごごめこぼしたようだ
ぶっこめ乞食
男ぼいとの一人ごと
ほいどの米拾い

瞽女

青竹つかせて伊勢参り
瞽女の段物のようだ
瞽女の荷造り
瞽女んさの荷のようだ
瞽女五人は縁起が良い
瞽女を後生で泊める
瞽女の百人米
瞽女の初子
瞽女と契れば薪割りが上手になる

こたつ

こたつの前で当たり前
夏は木の下、寒中はこたつ
姑婆さこたつやぐらの足

子ども

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは
二代子を見よ
余らず過ぎず子三人
有れば邪魔だし、無くては困るこの餓鬼
一家に子どもと同じ年の動物を飼うな
浮気者に子なし
お祖母さん子は三百安い
子ども川端火の用心
子どもを持って泣いても、持たずに泣いた人

はいない

子ども風の子、大人は火の子
子どもと人形はつかうほど良い
三人、子長者
四十八の恥かき子
四十九のくどき子
四十二の二つ子
捨て子に産土神
千の倉より子は宝
総領の十五は貧乏の盛り
田畑荒らしても子は荒らすな
年寄りつ子は寒がる
年寄りつ子は三文安い
泣いて勝つは子どもの癖
泣く子は利口
泣く子は親のあつかい
泣く子も鍋のはた見て泣け
七つ前の子どもは神様
七つ八つは憎まれざかり
憎まれ子、頭堅い
寝る子は肥る
寝る子は丈夫
馬鹿な子ほど可愛い
八朔一日は継子の腹さえふくれる
鼻汁出す子は肥る
婆育て子の三文足らず
婆育ちは三文安い
一つ二つは可愛い盛り、三つ四つはいたず

ら盛り、七つ八つは憎まれ盛り

ひとらつこは持たんに劣る
貧乏人の子沢山
貧乏の子たくさん
負つた子三年
負つた子に浅瀬を教わる
ほいとの子も三年たてば三つになる
婿取り子は三文安い
利巧な子より馬鹿な子ほど可愛い
手にする子はなぐられない
茄子畑つ子

胡麻

雨降りアワの日照りゴマ
五月豆さすな、六月ごま蒔くな
ごまのおそ蒔き、小豆の早蒔き
降りエ、照りゴマ

米

秋あげ半作
秋あげ米高し
あずけた米は噛めぬ
一夜三合
独活に種米
寒搦き米は土用を越せる
草一荷、米一升
乞食が米をこぼしたようだ

警女の百人米こめ

米の黒いのは三徳、四徳

米作り飯になるまで水加減

この世におつかないもんは古家の漏りと

米びつの舌出し

作土一寸、米一石

新米まんまにとろろ汁

頼めば越後から米搗ぎに来る

冬至から一日米粒ほどずつ延びる

春風秋米

もち米ぬすつと、布かんじんつぎ

ほいどの米拾い

月立つと米の値上がる

子守り

乞食の宿はしても、子守の宿はするな

太閤様でも子守はいやだ

根性

秋の日と根性良しはくれんようでくれる

根性よし、父てとなし孕む

根性よしの義理知らず

持たせる根性、持つ根性

漁師根性目の先ばかり、明日の鯛より今日の雑魚

菜

女郎買いのぬかみそ菜さい
おお菜食いの身上壊しこころ

財布

財布の底と心の底は人に見せるな

守門岳の雪が消えるとツアツアの財布が

からっぽになる

弥彦山の雪が無くなると父ととの財布も空になる

人の財布で賽銭

作柄

秋あげ半作

小豆は土用半作

当たつてつぶれる卵作

雨降り日かげ作

丑年は不作なし、子ね年に豊作なし

大苗に豊作なし

大雪は豊作の前兆

大雪に不作なし

片照り片降り不作のもと

雷の多いは上作

考え作、実をとらん

七夕立あれば上作

十五夜の餅、喰わんうちは作ほめんな

春風満作

竹の花は凶作

土用七夕立は上作

苗代半作

春日照り餓死のもと、秋上げ半作

半夏生半作

日照りに不作なし

一つ雷は作のよい兆

水見半作

猿

金北山の種蒔き猿ざる

猿が白背負つたようだ

猿が柿さわしたようだ

山菜

秋蒨嫁に食わすな

女と山菜は見置きするな

五月のヒルノトウは嫁に食わすな

コブシの花さかりはゼンマイの盛り

ゼンマイ山には嫁をやれ、コゴミ山へは娘を

やれ

五月わらびは嫁に食わせるな

七月わらび嫁に食わすな

三代

お金一代、人間二代、味三代

後家三代貧乏

土台石も三代目

婿三代続けば身代残す

婿取り三代身上

三度

お天とう様と三度の飯はついてまわる

二度事三度

二度叱つて三度ほめよ

人の事いわば座敷三度見てものいえ

死

慌てて食う人、三年先に死んだ

板屋の乞食は餓死ぬ、くず屋の乞食は金

貯める

いっぺん死ぬば二へん死なぬ

囲炉裏にかじり付いても死んではならぬ

親が死んでも食休み、軒端の下でも下り休み

親が死んでも食休み

去りあとへ行くと死にあとへ行くな

死ぎ馬に鍼

死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

死なば盆前、飲まば飯前

死なば三月

死人の部屋には猫を入れるな

死ぬ死ぬの長生き

死ぬ死ぬというて死んだもんはない

死ぬ者目から

しば草かぶつてから人のことをいえ

正月に女が最初に死ぬと七墓つく

死んだ子は利口

死んだもんの因果

死んだ先を見たもんじゃない

死んだちや臭い

銭取りやんめい、死にやんめい

春日照り餓死のもと、秋上げ半作

東雷と死人は帰つたためしが無い

人は死んでも手の跡残る

病み上手の死に下手

病み上手の死に上手

病め医者、死ぬ坊主

夜爪を切ると親の死に目に会えない

死んだんの死に損

死んで死に損ないは無

臨終際より勘定際が大事

塩

うまいまずいは塩加減

海の物は塩で殺せ

親に貸した金と味噌の塩

女と塩した物はすたりが無い

河童に塩をあつらえる

カワウソに塩をあつらえる

雑炊の塩辛いと女の気の強いは持ちあつかい

貧乏ものから塩くい

塩と女の過ぎたのはどうにもならぬ

塩引余計食つた

辞儀

親が辞儀する、子が手を出す

人のもので辞儀する

湯の辞儀は水になる

嫁の辞儀はおばになる、湯の辞儀は水になる

仕事

遊ぶ暇あつても仕事する暇ない

一工面、二稼ぎ

一切食う役、仕事はせん役

仕事は大勢、うまいもんは小ぜい

仕事するより工面

仕事は仕舞いが大事

仕事は菜、だお者の病氣

仕事はノコギリ引く間にせよ

仕事は半丁、口弁慶

銭とらん仕事はしても口食わん仕事はするな

段取り八分

話し上手の仕事下手

まんまは大将、仕事は少将

地蔵

借りるときの地蔵顔、返すときの閻魔つら

寝てかたわになつたものは石の地蔵さん

やそべい地蔵がイカ場へ行く

地蔵様に毛の生えたような

天王小豆に地藏ソバ

舌

この世におつかかないもんは古家の漏りと米びつ
の舌出し

舌はわざわいの門
貰うものは亡者でも、出すのは舌でもいや
もらうなら告げでもいい、出すなら舌でも嫌だ

霜

霜月の糊つけ日和
八十八夜の別れ霜

姑

朝げのチャツカリ、姑のニツカリ
朝日のチャツカリ、姑のニツコリ
暖かいようでも寒のうち、にらまぬよう
でも姑の目

小姑一人鬼千匹

姑の十七、見たことない

早朝姑につこりは赤信号

煮ても焼いても食わんねえのは姑婆さん

と栗のいが

吹かなくても寒風、見なくても姑の目

小姑は鬼八足

姑婆さとこたつやぐらの足

姑婆さと栗畑は踏んづけた程よい

出産

牛の綱をまたぐとお産が重い

お産は女の大役

女の子産んだら桐一本

子ども三人産んで親の恩を知る

産後の立派はほめたものでない

四十七の産みじまい

七日病んで子を産め

初子産むとおじおば迷う

正月

秋ごと昔の正月ばなし

いつも正月

元日のお日様は大きい

元日にくしゃみするは長命の相

元日に薬鍋を出すな

正得盆損

正月十一日の夜は女に髪結わせぬ

正月に女が最初に死ぬと七墓つく

盆と正月が一緒に来る

目の正月

上手

嘘つき世渡り上手

語り下手の聞き上手

くれ上手の貰い上手

替女と契れば薪割りが上手になる

上手なうそより下手なまこと

話し上手の仕事下手

話し上手の聞き上手

下手は上手の飾り物

病み上手の死に下手

病み上手の死に上手

小便

牛の小便十八町

越後のつれ小便

沖で碇据えるまで小便するな

がえつちの面に小便

座頭の小便向こう見ず

出そうで出ないのは、いい衆の葬礼と

シヨウカチ小便

蚤の小便、蚊の涙

尻

牛の尻を洗うたようだが

大川で尻洗う

はつかで尻を洗ったよう

男立派で尻あつぱ

軽い返事に重い尻

気違いの後押ししても馬鹿の尻押しするな

口は親まかせ、尻はせんちまかせ

久米の親爺の尻まくり

雪隠で尻ぬぐわず

手でせぬ口尻口で物を言う

裸で尻まくりはできん

話は尻へ来て終わる

返事重かれ、尻軽かれ

返事早かれ、尻重かれ

まさかの時は尻ごみ

胸かへが延びれば、尻かへがつまる

尻と言われても口と言われるな

蜚の尻に提灯

むく犬の尻

身上

家の身上は嬢が持つ

うちの身上は嬢でもつ、嬢の腰巻は紐でもつ

嬢半身上

口身上

身上と盃はでつかいほどよい

身代とぼた餅は大きいが良い

身上も籠も立たん

身上が太れば体も太る

身上見るより俵見い

人の身上と着物の裏見た人はいない

人の身上と着物の裏は見んがよい

薪で身上が分かる

水は半身上

婿三代続けば身代残す

婿取り三代身上

娘三人持てば身代つぶす

娘三人持つと身代が無くなる

目に見りや憎うない、身上のためにようもない

からつ火焚けば隣の身上があがる

婿と馬は半身上

お小菜食いの身上壊し

雑炊

一合雑炊、二合粥、三合飯、四合団子、五合餅

雑炊の塩辛いと女の気の強いは持ちあつかい

雑炊のこびつき嫁に食わせんな

団子雑炊は八人で火たけ

隣のものは雑炊でもうまい

雑炊の焦げる臭いのする所へ嫁くれるな

雑炊の焦げつきは嫁に、お粥の焦げつきは

娘にくれろ

一合雑炊に二合粥、三合かて飯に四合団子、

五合おこわに六合餅

杉

杉の木と男の子は育たない

脛

脛に疵あれば竹藪は通れぬ

大黒の脛へ味噌

娘婿の可愛いのと向こう脛の痛いのは我慢が

ならない

脛に毛の無いに金貸すな

脛一本、まら一本

節句

いいめしまめたが、節句のマンマ

女の節句が来るので雪が降る

三月節句は毒餅、九月節句は福餅

せかぬ者の節句ばたらき

せやみこきの節句ばたらき

怠け者の節句働き

ノツタリもんの節句働き

のめしこきの節句ばたらき

やったりとつたりの節句の餅

節句の菖蒲の枯れるよう、六日の菖蒲の流

れるよう

節句働きは業代になる

雪隠

一富士、二鷹、三茄子、四葬礼、五雪隠

お寺と雪隠へ空手で行くな

親の雪隠で糞をこく

雪隠大工

雪隠で尻ぬぐわず

嫁と雪隠は遠いほどよい

手前の雪隠にばかり糞こいてて

町場の雪隠裏と、しれ猫の糞丸後へ出る

銭

阿弥陀も銭ほど光る

飴の銭より笹の銭が高い

一文銭は鳴らぬ

餌の銭かぶり

親子の仲にも銭は他人

喧嘩すると銭三文損がいく

女郎買いの草履銭こぎり

銭がホツポ突つつく

銭取りやんめい、死にやんめい

銭と名がつきやヒゼンでもない

銭とらん仕事はしても口食わん仕事はするな

銭は有つても苦勞、無うても苦勞

ただほど安いもんはない

寢床の下の新開銭まで出した

儲ける分別より、使わん分別

人の賽銭で鰐口たたく

人の財布で賽銭

善光寺

連れが良ければ善光寺まいり

有り難いのは善光寺様、うまいものは猪汁

葬式

一富士、二鷹、三茄子、四葬礼、五雪隠

丑の日に葬式を出すな

葬式すんでの医者話

そうれん泣きのよう

そうれん草鞋のよう

出そうで出ないのは、いい衆の葬礼と

シヨウカチ小使

寅の日に葬式するものではない

春葬礼は戻つても逢え

普請と葬式は一人でできん

葬礼場のすかんぼ

葬礼場の犬の糞

蕎麦

ソバは日照りに蒔け

ソバははりかけ畑に蒔け

大根盆前、ソバ盆後

八月風のソバあたり

天王小豆に地藏ソバ

損得

言えば言い得、飲めば飲み得

笠のしずくも宿の得

借りて借り得、貸して貸し損

喧嘩すると銭三文損がいく

正得盆損

損して得とれ

損は身代わり

得仲間の損外れ

名とるより得取れ

百姓の不作話と商人の損話

宿、味噌、木損、嬬手間損

宿、味噌、木損、嬬使われ損

死んだんの死に損

死んで死に損ないは無

欲得より損がつらい

恪気の撤損

田

青田と嬬褒める阿呆

青田ほめる馬鹿

青田は馬鹿がほめる

秋の田の水嫁に飲ませるな

畦走つたも田走つたも同じこと

畦もくれよう、田もくれよう

おせん泣かすな、火事出すな、前の田の草

人に取らせるな

碁打つより田打て

三反田の人あと

千刈田作るより一人口はなせ

田下も畦下も同じ

田天王に田んぼに入ると目が潰れる

田畑荒らしても子は荒らすな

半夏生には田に入らず

人は人中、田は田中

昼は碁を打ち、夜は田を打つ

ホウロク田地

田を歩んでも、岡を歩んでも

大工

穴掘り大工、ノミ一丁
雪隠大工

大工ごころと盗みごころの無い人はいない

下手の大工でノミ一丁

下手の大工の仕上げを見やれ

大根

大きい大根辛くない

三年味噌に四年大根

大根盆前、ソバ盆後

菜、大根、半かまど

大根蒔きは土用

大師講

大師講の跡隠し雪

大師講様過ぎれば鍋の中のいおも逃げる

田植え

柿の花踏んで田植えする

五月五日に田植ええんな

里芋は田植えの歌聞いて芽を出す

田植ええ女に秋男

竹(筍)

青竹つかせて伊勢参り

親にまさるは竹の子ばかり

木の箸と竹の箸を一緒に使うな

木もと、竹うら

脛に疵あれば竹藪は通れぬ

竹に花が咲くと枯れる

竹の花は凶作

竹は親より子が育つ

八專竹は切るな

土用の筍、出たばかり

伊達

遠慮飢し伊達寒し

男だてより小鍋立て

昼生まれの伊達こき

種

一種、二肥、三作り

芋種盗んでも子種盗むな

いやならさらおけ皿やの力ボチャ、種蒔い

ても千もなる

独活に種米

おじおばは鳳仙花の種

金北山の種蒔き猿

四月三日に種蒔くな

俵

サシ虫は俵編んで待て

土用くんだり、俵結うて待て

ひと事と小俵はいいやすい

人と小俵はゆいやすい

虫ざしは俵、編んで待つていろ

粟俵のふが切れたようだ

俵に十俵さべる

団子

一合雑炊、二合粥、三合飯、四合団子、五合餅

送り団子の迎い小豆

団子雑炊は八人で火たけ

団子なすきの餅ねむり

野呂間何をいう、団子は米の粉

ものは人並み、団子も人並み

一合雑炊に二合粥、三合かて飯に四合団子、

五合おこわに六合餅

男女

男の眼つたれ女の眼つり

男の目には糸をひけ、女の目には鈴をはれ

男やごめに蛆がわき、女やごめに花が咲く

遠くて近いは男女の道、近くて遠いは在郷の道

田植ええ女に秋男

上路男と市振女

新山男と森上女

浦瀬女に桂男

小俣男の塔ノ下女

折戸男の興野女

三条男の加茂女

下田男と栃尾女

綱木女の赤谷男

栃堀男と荷頃女

西海女と早川男

広瀬男と栃尾女

藤倉男に中尾女

朴ノ木男と戸沢女

宮中女と堀之内男

村松男と次第浜女

四ツ郷男の興野女

五十沢女に城内男

越後女に上州男

惚れた腫れたは当座の仲

惚れて通えば千里も一里

知恵

大男総身に智恵が廻りかね

自慢は知恵の行き止まり

老人は心の通う知恵袋

茶

相川のチャは飲まれんチャ

朝茶は七里戻つても飲め

朝茶は二服

朝茶四服

朝茶は嬢を質に置いても飲め

朝茶の茶柱は縁起がよい

一香、二花、三茶、四飯

一杯茶は仲たがい

一杯茶は出すな

空茶は米搗きよりこわい

茶の花下向く年は大雪

七つ下がりのヘンナシ茶

空茶は出すな

長者

一人もんに長者なし

三人、子長者

梨の皮は乞食にむかせろ、まくわの皮は

長者にむかせろ

提灯

因果の提灯、盆でも下がらん

傘と提灯、借りたらずぐ返せ

暮れぬ前の提灯

提灯持ちの先は馬鹿になる

提灯持った人は前を歩け

提灯持ち後に立たず

禿の横山稲妻光り、ここで光れば江戸まで

光る、江戸の若い衆は提灯いらぬ

人の提灯で明かり見る
螢の尻に提灯

月夜

いつも月夜と米の飯

親と月夜はいつもよい

月夜十五日、闇夜十五日

月夜に大風なし

月夜廻りの蟹は身が少ない

世の中はいつも八月十五夜、俺が二十のかか

十八、死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

爪

爪ほうきで貯めた金

爪で拾つて箕でこぼす

夜爪を切ると親の死に目に会えない

夜、爪を切ると命が縮まる

夜、爪切りはするな

欲する鷹は爪を削る

手

ある手からこぼれる

イカの手は喰うてもその手は喰わぬ

梅漬けは手を選ぶ

大勢に手なし

お客三杯手八杯

おこわはお手の甲

親が辞儀する、子が手を出す
痒い所に手が届かない

四十の手つ暗がり
そそう手早

近い火で手あぶる

ツバメも手に取りや臭い

手でせぬ口尻口で物を言う

手の中に入れたよう

手ぶり八貫

猫の手も杓子の手も借りたい

人は死んでも手の跡残る

文は遣りたし書く手は持たぬ

豆と十七はあるうち手を出す

手放しのあかんめい

手つぶり八貫、ほいと一貫

手にする子はなぐられない

海は手でふたできぬ

破れ間から手が出る

亭主

お客三杯、亭主八杯

夫は妻と母の橋渡し

肥やしより亭主の足あと

亭主の好きなぼた餅湯漬け

亭主は丈夫で留守がいい

女房やくほど亭主もてませず

丙 午は亭主八人食い殺す

天気

秋の日と娘はくれぬようでくれる

秋の日と根性良しはくれんようでくれる

秋の朝照り、隣へ行くな

秋の浦西質置き空

朝雨せんたく

朝げのテツカリ、昼メッコ

朝てつかりの昼めつこ

朝虹、川越すな

朝のてつかり油断するな

朝のからから笑いは油断するな

朝焼けは時化る

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは

二代子を見よ

池の鯉が水の上にはねると天気が悪くなる

入り日よければ明日天気

川尻があくと天気がよくなる

川内の祭りは雨祭り、鯨波の祭は天気祭り

鯨波の祭りは雨祭り、川内の祭は天気祭り

汽車の汽笛が良く聞こえると天気が変わる

霜月の糊つけ日和

十月の小春

十月の五、六月

十月のテツカリ、ババコロシ

月の上り暈、日の下り暈

燕が低く飛ぶと天気が悪くなる

ハタハタ荒れ

春の土用に天気が良いと秋の土用も良い

彼岸過ぎてても七荒れ

彼岸過ぎてても七はだえ

フンドシの天気占い

べた凧は大時化の前触れ

三島の百合を取ると時化になる

夕虹は百日の照り

へこの天気

冬至

冬至十日前

冬至トウヤは冬なか

冬至カボチャに年取らせるな

冬至から一日米粒ほどずつ延びる

冬至にカボチャを食べれば風邪をひかない

冬至の日から筵の目一つずつ日が伸びる

ハンゲ夏中、冬至冬中

冬至過ぎれば藁の節一ふしずつ日が長くなる

豆腐

赤飯に豆腐汁

白飯に豆腐汁

豆腐に銚

豆腐食つてしらばくれ

道楽

四十過ぎての道楽と七つ下りの雨は止らぬ
見るは法楽、買うは道楽

年夜

年夜の晩げの火のようだ

年寄り

年寄りの達者と春の雪

年寄りの昔語

年寄りの昔語り

年寄りっ子は寒がる

年寄り子ども

年寄りっ子は三文安い

年寄りの腕まくり

年寄りと釘の頭は引つ込むほど良い

老人の早寝

老人は心の通う知恵袋

年寄りと紙袋は詰めねば立たぬ

泥棒

人を見たら泥棒と思え、火を見たら火事と思え

泥棒よけになるような夫婦ごと

泥棒に宿貸しても、守り子に宿貸しするな

菜

青菜の世帯はこんちの男に見せられない

秋菜嫁に食わずな

桶が腐れば菜が腐る

こみつな男に青菜見せるな

菜汁と米の飯で不足を言うな

菜、大根、半かまど

麦の帷子、菜のぬこ

梨

柿の皮は嫁に、梨の皮は姑に

梨の馬鹿めが十八年

梨の皮は乞食にむかせろ、まくわの皮は

長者にむかせろ

山のずく梨糧にもなるが、人のずくなし

用には立たぬ

あとは梨の木

茄子

秋茄子は雁の味

秋茄子嫁に食わずな

一富士、二鷹、三茄子、四葬礼、五雪隠

色が黒くて茄子マンジヨ

親の意見と茄子の花は千に一つの無駄もない

七月に茄子を植えると仏茄子

庄屋の跡は茄子畑

土用茄子は植えんもの、師走カボチャは食わ

んもん

茄子の遠肥え

茄子の木に瓜はならぬ

茄子の花と親の意見は千に一つも無駄がない
茄子は七さく、芋は八さく

初茄子の皮をむく馬鹿さで、茄子の皮をむか

ぬ馬鹿

茄子畑っ子

鍋

男だてより小鍋立て

空鍋掛けるな、水の中に湯を入れるな

元日に薬鍋を出すな

善根七村鍋かけず

泣く子も鍋のはた見て泣け

一つ鍋の鯨汁

燗煮た鍋

水神様過ぎれば鍋の中のいおも逃げる

大師講様過ぎれば鍋の中のいおも逃げる

縄

あら縄は帯にするな

犬に縄張り

親の首に縄かける

宮下ぐつの富島炬燵、亀貝仙石緒の小曾根縄

朝ふじ、夜縄

荷

叔父見りや荷が重い

警女の荷造り

替女んさの荷のようだ

荷物と病は軽いほど良い

病氣と空荷は軽いほど良い

言づけは荷にならぬ

二代

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは

二代子を見よ

お金一代、人間二代、味三代

二代子に別れたよりつらい

女房

家の中に女房二人は要らない

主婦は家庭の太陽

七つ劣りか三つ増しか

女房と味噌は古いほど良い

女房やくほど亭主もてませず

女房を質に入れても味噌つくれ

一つ劣りは金のわらんじで探せ

一つめ増しと七つ違いは金の草鞋で探せ

へつついより女房

女房は膝元の仇

人形

子どもと人形はつかうほど良い

働く人形、首切らる

盗人

朝蜘蛛は福の神、夕蜘蛛は盗賊

色氣と盗人氣のない者はない

嘘こき盗人の始まり

かいもちかつぎ、つぎ盗人

庚申の日に孕んだ子は盗人になる

佐渡に無いものは狐と盗人

大工ごころと盗みごころの無い人はいない

盗人の戸締まり

盗人に小づけ

盗人に鍵を貸す

盗人のこわぐち

盗人の昼寝

もち米倒しのつぎ盗人

盗人の宿はあつても子持ちの宿はない

猫

イタチみめ良し、猫のみめは杓子

犬と猫の喧嘩にニヤンワン

内弁慶のそと猫

女の怖がりと猫の怖がりは嘘

死人の部屋には猫を入れるな

高町からもらった猫のようだ

たまたま起きて猫踏みつぶす

飛び込み猫は飼うな

夏鯖、猫も食わぬ

猫追うより魚片付け

猫にマタタビ泣く子に乳

猫にマタタビ泣く子にかんぞう、おじにひや

飯当り前

猫に鯉節

猫の紙袋で後下がり

猫の面倒見えぬ者は人の面倒も見えぬ

猫の鼻にニシン

猫の手も杓子の手も借りたい

猫、馬鹿、坊主

猫もらうなら親猫見てもらえ

鼠捕る猫は後ねらう

走り込み猫を飼うな

横座に座るのは猫、馬鹿、坊主

猟する猫は音を出さず

せちうどが三晩泊まれば、猫の面が三尺に

なる

町場の雪隠裏と、しれ猫の宰九後へ出る

猫がいがむ

猫の座がわり

借りてきた猫

つし猫のようだ

鼠

頭の黒い鼠

鼠捕る猫は後ねらう

鼠の居ない家には住むな

来年のことを言うと鼠が笑う
鼠つ子笹つ葉に包んだようだ
鼠穴に水注ぐようだ

寝る

飴で餅食うか、おばさと寝るか
一升どつくりは寝ても三合
げすの楽しみは寝楽しみ
節分の夜早く寝ると年を取る
たたかれた者が目が寝れても、たいた者
の目は寝れん

盗人の昼寝

寝た牛は寝ておらぬ
寝た目は一度は覚める
寝溜めと食い溜めはできない
寝てかたわになつたものは石の地藏さん
寝て怪我した者はない
寝てこそ金も儲けたれ
寝床の下の新開錢まで出した
寝不足あつても寝増しはない
寝るが法楽ほうらく
寝る子は肥る
寝る子は丈夫
寝るほど楽はないのに起きて働く馬鹿もある
寝る目と食う口はきりがない
福は寝て待て
飯を食つて寝ると牛になる

老人の早寝

馬鹿

青田と嬖かか褒める阿呆
青田ほめる馬鹿
青田は馬鹿がほめる
明の先には馬鹿が立つ
一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿
浮世の馬鹿は起きて働く
おだてともつこには馬鹿が乗る
貸す阿呆に、なす阿呆
気違いの後押ししても馬鹿の尻押しするな
げすの一寸、のろまの三寸、馬鹿の開け放し
怖いものは馬鹿と借金
桜切る阿呆に梅切らぬ馬鹿
桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿
提灯持ちの先は馬鹿がなる
椿伐る馬鹿、植える馬鹿
梨の馬鹿めが十八年
夏の馬鹿は奥へ行く
寝るほど楽はないのに起きて働く馬鹿もある
馬鹿と雷は松之山から来る
馬鹿と夕立は妻有の方から来る
馬鹿な子ほど可愛い
馬鹿と缺なまは使いよう
馬鹿にかまう大馬鹿
馬鹿に理屈言わせい

馬鹿にかまえばとも馬鹿になる

馬鹿の馬鹿ぶとり

馬鹿の馬鹿喰い

馬鹿の三杯汁

馬鹿の長糸

馬鹿のまねする利口もん、利口のまねする

馬鹿もん

馬鹿の馬鹿気

馬鹿の馬鹿笑い

馬鹿の話と荒壁塗り

馬鹿の考え休むに似たり

馬鹿の三杯、テエー口の五杯

馬鹿、馬喰、博打ばくちうち

馬鹿も休み休み言い

二日泊まらぬ馬鹿聲むじ、三日泊まる馬鹿聲

山の入り日は馬鹿が見る

猫、馬鹿、坊主

横座に座るのは猫、馬鹿、坊主

四つ晴れに傘を預ける馬鹿もある

利口は馬鹿の使いもん

利巧な子より馬鹿な子ほど可愛い

馬鹿と闇の夜が一番怖い

初茄子の皮をむく馬鹿さで、茄子の皮を

むかぬ馬鹿

本貸す馬鹿に、なす馬鹿

馬鹿の手足、こけの小足
佐渡は一度行かぬ馬鹿、二度行く馬鹿

化け物

今度と化け物には会つたことがない
こんにやくの化け物
坊主の髪と化け物は見たことがない
犬の糞の化け物

箸

木の箸と竹の箸を一緒に使うな
ころんだ箸も起こさぬ
箸一本で食べると片親になる
箸の上げ下げに世話をやく
堅いもの握るのはへのこと箸ばかり

恥

赤恥かく
四十八の恥かき子
知つたかぶりの恥かき
ねまつてかく恥、立つてかく
恥かき道具
百姓は義理かき、事かき、恥をかき、やつ
とこそそれで粉つかき

畑

肥え畑の痩せメメズ、痩せ畑の肥えメメズ
庄屋の跡は茄子畑
ソバははりかけ畑に蒔け
田畑荒らしても子は荒らすな

畑の水練

姑婆なすばと粟畑は踏んつけた程よい
茄子畑なす畑つ子

働き

浮世の馬鹿は起きて働く
起きて働く果報者
せかぬ者の節句はたらきはたらき
怠け者の節句はたらき働はたらき
二人前は働けない
寝るほど楽はないのに起きて働く馬鹿もある
ノツタリもんの節句働はたらき
節句働はたらきは菜代になる

初物

初物はつもの
終わり初物で七十五日生きのびる
初物食べたら東向いて笑え
初物を食うと七十五日長生きする

花

赤い花にもとげがある
あざみの花の二つ咲きに小豆は蒔け
一番、二花、三茶、四飯
売り物には花咲かせ
おじおばは鳳仙花の種
男やごめに蛆がわき、女やごめに花が咲く

親の意見と茄子の花は千に一つの無駄もない

柿の花踏んで田植えする

コブシの花さかりはゼンマイの盛り

三月の花鱈はなだら

曾地の惣太か花田の花蔵、悪田の仁まだか

春日のあんばい

竹に花が咲くと枯れる

竹の花は凶作

茶の花下向く年は大雪

茄子の花と親の意見は千に一つも無駄がない

花の下より鼻の下

人の手花は美しい

盆が過ぎての蓮の花

娘十七、アザミの花もひと盛り

山のずくなし花でも咲くが、人のずくなし

ぼろ下げる

つつじの花盛りはわらびの出盛り

鼻

木で鼻かんだようだ
逆さに振つても鼻血も出ない
曾地の反り歯か花田の鼻糞、吉井の夜ん糞
猫の鼻にニシン
鼻かんで年取るだけ
鼻汁出す子は肥る
花の下より鼻の下
目ほそ、鼻高、桜色

たまごに目鼻

話

鑄物師話して踏鞴たたらにかけられた

縁談話はおかのえ様に限る

女の立ち話、騒動のもと

相撲取りは負けた話はせぬ

葬式すんでの医者話

ととつば、うらつばの話

馬鹿の話と荒壁塗り

話し上手の仕事下手

話し上手の聞き上手

話は庚申の晩

話は庚申さんの晩に

話半分腹八分

話半分

話のお代わりはない

話は尻へ来て終わる

話や納屋町、火事は四谷へ

百姓の不作話と商人あきんどの損話

話半分、見て三つ一

馬好きには馬の話

婆はば

煮ても焼いても食わんねえのは姑婆さん

と栗のいが

婆育て子の三文足らず

婆育ちは三文安い

姑婆さところたつやぐらの足

姑婆さと栗畑は踏んづけた程よい

ヒツポウ神家におつてババが頭とかした

十月のテツカリ、ババコロシ

十九の古婆ふるはば、二十五の小野郎

浜

従兄弟と犬の糞は羽田の浜にある

困窮は浜から上がる

浜の松風音ばかり

浜が遠い

腹

犬にも吠えられると腹が立つ

海腹川背

女の子持腹、はせ舟が通る

聞けば聞き腹がたつ

キスの腹、磨いたよう

口と腹は大違い

口を控えて腹立てず

蛙の腹、磨いたようだ

里腹七日持つ

すきつ腹にますいものなし

天道人を殺さず、弁当腹を空かさず

隣の家に倉が建つと腹が立つ

にくにくの腹からいといとができる

八朔はっさく一日は継子の腹さえふくれる

話半分腹八分

腹立てるより倉建て

腹の皮突つ張りや目の皮ゆるむ

腹八分目、医者要らず

腹も身のうち

人の口ふさいでも腹はふさげず

仏法も腹念仏

盆ぼいと腹のようだ

水腹もいつとき

餅腹三日

瘦せの腹つべらし

親腹七日

けら腹立てば鳥喜ぶ

孕む

庚申の日に孕んだ子は盗人になる

根性よし、父てとなし孕む

左孕みは男の子

右孕みは女の子

三月四月は袖でも隠す

十九厄年やしねえでも孕む

針

すずめすずめ子に針

出針は縁起が悪い

棒ほど願つて針ほどかなう
針ほどの穴から棒ほどの風

春

四十女と春降る雪は固そうでとけやすい
春風満作
年寄りの達者と春の雪
春風秋米
春葬礼は戻つても逢え
春の日とまま母は、くれそうでくれない
春の日は夕飯食つて三里蒔け
春の雨は沖から、秋の雨は山から
春の土用に天氣が良いと秋の土用も良い
春の日と欲しんぼうはくれるようでくれん
春の日は墨が降り、夏の日は白粉が降る
春のながせはあいぬ風
春のながせは仏の風
春の雪と女の腕まくり
春は海、秋は山
春は沖見れ、秋は山見れ
春南秋北
春やあ、秋西
夫婦喧嘩と春の雪
娘と春の雪は固いようでとけやすい
春の日と親類の金持ち

晴れ

朝虹は雨、夕虹は晴れ
雨晴らし夕顔汁
海霧は雨、山霧は晴れ
越後の昼晴れ

八海頭巾は晴れたことがない
東虹は晴れ、西虹は雨
夕焼けは晴天、朝焼けは雨
四つ晴れに傘を預ける馬鹿もある
米山が出ていると晴れ
七つ晴れは明日のもつけ

晩

朝げあることは晩げもある
乞食袋と西風は晩になるほど大きくなる
八十八夜の晩の風
話は庚申の晩
話は庚申さんの晩に
嫁に行つた晩でどうにでもなる
年夜の晩げの火のようだ

火

小豆の火は馬鹿にたかせる
油紙に火のついたよう
親孝行と火の用心は灰にならぬ前
女の腰巻、火難を避ける
子ども川端火の用心
子ども風の子、大人は火の子

高いものは火の見やぐらと源助そば
団子雑炊は八人で火たけ
近い火で手あぶる

夏の火は嫁に焚かせんな
糠火で八反、葎實で九反
はじめトロトロ、なかパツパ、グツグツめ
に火をひき、親が死んでもふたとるな
火が尉じょうになる
火にあたるより陽にあたれ
火を焚き付けることができない者は一丁前
でない

貧乏しようでて水甕から火が出る
冬の火は嫁に焚かせよ
目から火が出るよう
火傷はつるをひく
からつ火焚けば隣の身上があがる
年夜の晩げの火のようだ

日

秋の日と娘はくれぬようでくれる
秋の日と根性良しはくれんようでくれる
朝日のチャカチャカと女の腕まくり
朝日のチャカチャカと貧乏者の嫁取り長持
ちない
朝日のチャツカリ、姑のニッコリ
雨降り日かげ作
元日のお日様は大きい

この村ばかりにや日は照らぬ

霜月の糊つけ日和

月暈日暈は雨

月の上り暈、日の下り暈

冬至から一日米粒ほどずつ延びる

冬至の日から筵の目一つずつ日が伸びる

二十五がすむと男は入り日

春の日とまま母は、くれそうでくれない

春の日と欲しんぼうはくれるようでくれん

春の日は墨が降り、夏の日は白粉が降る

山の入り日は馬鹿が見る

夕虹は百日の照り

夜道に日は暮れぬ

嫁のとりがけと朝日の出がけ

この村ばかりにや日は照らぬ

日暮れの山入り

冬至過ぎれば藁の節一ふしずつ日が長くなる

春の日と親類の金持ち

入り日の雨は七日続く

光

阿弥陀も錢ほど光る

阿弥陀の光も金次第

お金は阿弥陀ほど光る

黄金は屑の中でも光る

使っている鍬は光る

禿の横山稲妻光り、ここで光れば江戸まで

光る、江戸の若い衆は提灯いらぬ

光るほど鳴らん

星の闇夜にカラ光り

膝

女房は膝元の仇

膝かぶの茶屋に腰掛ける

日照り

朝霧は百日の日照り

雨降りアワの日照りゴマ

雨降り豆の日照り小豆

雨降り八専、照りじつぼう

五月日照りは困窮のもと

ソバは日照りに蒔け

てるろが鳴くと日照りが続く

八海夕立の古志日照り

春日日照り餓死のもと、秋上げ半作

東虹は百日の日照り

日照りに不作なし

日照りに困窮なし

日照り綿

日照り麻

日照りかぼちゃ

日照りかぼちゃ、降り夕顔

広瀬夕立の古志日照り

宵の虹百日の日照り

紐

うちの身上は嬢でもつ、嬢の腰巻は紐でもつ

好きがたりとタスの紐

百

朝霧は百日の日照り

寒中の雪は百日目に大荒れ

薬九層倍、百姓百層倍

替女の百人米

死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

千三つ百ぬらり

東虹は百日の日照り

百年目の大年

百両の馬にも難

百両のかたに編笠一蓋

持たぬご苦労、百の増し

夕虹は百日の照り

宵の虹百日の日照り

世の中はいつも八月十五夜、俺が二十のかか

十八、死なぬ子の三人、減らぬ金の百両

百で買った馬みただ

なやの百くら飯

三つ子のこつちよう百まで

百姓

薬九層倍、百姓百層倍

千刈り百姓食うや食わず

千刈り百姓四五間

百姓は山と生きる

百姓の不作話と商人の損話

百姓の去年作

百姓の秋大名

町の店借り、百姓の千刈り

百姓は義理かき、事かき、恥をかき、やつ

とこそそれで粉つかき

評定

鍛冶町衆の長評定

貧乏

朝寝は貧乏の始まり

朝日のチャカチャカと貧乏者の嫁取り長持

ちない

親おごれば子貧乏

器用貧乏、村の宝

口貧乏

後家三代貧乏

酒と朝寝は貧乏の近道

総領の十五は貧乏の盛り

無いとき貧乏、有るとき大名

西貧乏、東大尽

八細工の七貧乏

貧すれば絹着る

貧すれば情こまやかなり

貧乏神は先に行つて待つてゐる

貧乏稲荷でトリイがない

貧乏人の子沢山

貧乏寺の重ね齋

貧乏の八重漬

貧乏しようでて水甕から火が出る

貧乏もんのから塩くい

貧乏の張り肘

貧乏に親類なし

貧乏の子だくさん

貧乏者の煮る粥はゆるくなる

貧乏寺の香つき杵

福

朝蜘蛛は福の神、夕蜘蛛は盗賊

三月節句は毒餅、九月節句は福餅

残り物に福がある

福は寝て待て

めまし夫婦に福がある

船

入り船に良い風、出船に悪い

海のことば船子に問え、山のことば樵夫に問え

縁起船乗り酒屋者

縁起船乗り博奕こき

大船浮かぶと小舟も浮かぶ

七日びに人より先に船おろすな

船七、馬六

舟の絵の手拭いを沖で被るな

藻の裏に船をつなぐ

風呂

お風呂は首つきりのご馳走

せいふろの上がりたては親でも惚れる

せいふろで屁こいた

八十八夜は風呂で持つ

据え風呂で牛蒡洗うよう

褌

当て事ともつこふんどしは先からはずれる

当て事と褌、先からはずれる

兄の褌、手ぬぐいにもらう

越中褌、向こうからはずれる

義理とふんどしは欠かせない

宵にかいた褌

屁

言い出した奴がふつた奴

四角に臭うコタツ屁

せいふろで屁こいた

屁と火事はもとから

屁と火事は元から騒ぎ出す

屁にかづけ糞にかづけ

おつかし臭い達磨の尻

下手

語り下手べたの聞き上手

上手なうそより下手なまこと

話し上手の仕事下手

下手な座頭の琵琶拵え

下手の番匠は木難する

下手の大工でノミ一丁

下手の長糸

下手は上手の飾り物

病み上手の死に下手

下手の大工の仕上げを見やれ

蛇

馬うま、蛇の夢は良い、栗の夢は悪い

蛙かき、蛇なめくじ、蛞蝓

長虫と長袖に構うな

蛇が自分の前を横ぎるとよい事あり

蛇は七廻りしても我が身悪いと言わぬ

夜、口笛を吹けば蛇が来る

蛇がかんばちでも構わない

蛇に蠅

弁慶

囲炉裏はたの弁慶

内弁慶の外すくだまり

内弁慶のそとみそ

内弁慶のそと猫

仕事は半丁、口弁慶

穂

稲の穂と命は長いほど良い

出穂水かけよ

二百十日の走り穂

方言

相川のチャは飲まれんチャ

生まれ在所は訛りで知れる

竹之高地のモ、種芋原のハチャ、虫亀のネラ、

蓬平のアキヤ

越後のガンな食わんねえガンだ

坊主

ありから食はまた坊主もない

嘘と坊主の髪はゆつたことがない

坊主の髪と化け物は見たことがない

長袖が三人いると村潰れ

貧僧の重ねどき齋

布施ない経は読まない

布施ほど経は読まぬ

坊主何か言うて三日の食失う

坊主だませば七代たたる

病め医者、死ぬ坊主

猫、馬鹿、坊主

横座に座るのは猫、馬鹿、坊主

法衆

寝るが法衆

見るが法衆、買うは道衆

ぼた餅

粟島の雨と隣のぼた餅は来ないことがない

運は天にあり、ぼた餅は棚にあり

身代とぼた餅は大きいが良い

亭主の好きなぼた餅湯漬け

夏のぼた餅、犬さえ喰わぬ

南なん葉山の雨は隣のぼた餅より早い

ぼた餅でほつぺたをたたく

盆の牡丹餅は犬も食わぬ

焼きぼた餅は嫁に食わずな

仏

あと見ず観音

石仏にものを言わせる

祝い事は延ばせ、仏事は取り越せ

椎谷の観音さんのようで沢山の人

七月に茄子を植えると仏茄子

神先仏後

春のながせは仏の風

仏法も腹念仏

門徒物識らず、法華仏にならぬ
身と仏は見れば尊い

盆

因果の提灯、盆でも下がらん
死なば盆前、飲まば飯前
正得盆損
大根盆前、ソバ盆後
七日盆には七遍食うて七遍泳げ
年始は盆まで
盆が過ぎての蓮の花
盆參一日夕顔汁
盆と正月が一緒に来る
盆の雨は虫になる
盆の十六日は地獄の釜も休む
盆の牡丹餅は犬も食わぬ
盆ぼいとこの腹のようだ
祭りだ盆だ

孫

爺貯める、息子棄する、孫使う
外孫かわいがる気があつたら、犬の子かわいがれ
憎い嫁から可愛い孫
にくにくの腹からいといとができる
孫は目に入れても痛くない
孫は来てよし、行つてよし

松

志は松の葉に包め
松の切り株一代かぎり

祭

川内の祭りは雨祭り、鯨波の祭は天気祭り
鯨波の祭りは雨祭り、川内の祭は天気祭り
二百十日の風祭り
人參は祭り過ぎて蒔け、牛蒡は雪融け水で蒔け
祭りだ盆だ
港祭りであとが無い
小豆は祭りの鐘聞きながら蒔け

豆

煎り豆と娘十七はある中は手を出す
豆と十七はあるうち手を出す
打ち豆汁と雪道は後ほど良い
郭公豆まけ
五月豆さすな、六月ごま時くな
鳩が憎うて豆まかん
日陰の豆も時が来ればははぜる
豆息災
豆の中打ち、嫁にさせろ
煮た豆でない

万

一万俵一文しても金がなけりや買えぬ
おおふ万金丹
千三つ万から

目もと千両、えくぼ万両

水

秋の田の水嫁に飲ませるな
池の鯉が水の上にはねると天氣が悪くなる
うらみは水に流し恩は石にきざみ
大水に飲み水なし
お湯の寿命は水となる、嫁の寿命はばばあとなる

鳩と井戸水は替えたほどいい
空鍋掛けるな、水の中に湯を入れるな
寒九の水で夏の水にあたらぬ
寒九の水はくさらない
寒九の水を飲むと風邪を引かない
米作り飯になるまで水加減
策で水汲む

三寸流れれば清の水
三寸流れは大川だ
出穂水かけよ
流れ川、三寸
流れ水、三寸
夏寒きは洪水
鶏ははだし、雁鴨は水だ
人參は祭り過ぎて蒔け、牛蒡は雪融け水で蒔け

畑の水練

貧乏しようにでて水甕から火が出る

古川、水絶えず

水喧嘩は降るまで

水に湯を入れるものではない

水は半身上

水腹もいつとき

水見半作

もんどして水を汲む

湯の辞儀は水になる

酔い覚めの水下戸知らず

嫁の辞儀はおばになる、湯の辞儀は水になる

三人水は残すな

鼠穴に水注ぐようだ

味噌

親に貸した金と味噌の塩

腐り味噌にも取り得がある

三年味噌に四年大根

関興寺の味噌なめたか

大黒の脛へ味噌

女房と味噌は古いほど良い

女房を質に入れても味噌つくれ

八年梅干し、三年味噌

無精稼ぎは赤味噌なめる、生木白味噌世帯

つぶし

宿、味噌、木損、嬬手間損

宿、味噌、木損、嬬使われ損

雲洞庵の土踏んだか、関興庵の味噌なめたか

耳

きんかの空耳

つんぼ

狸の心経、馬の耳に風

破れ頭巾で耳にかかる

しゃもじは耳かきにならぬ

みみず

馬の踏んだミミズを蟻子が巻く

せせなぎ穿るとミミズが出る

ミミズの京まいり

見る

青菜の世帯はこんちの男に見せられない

秋の山嫁に見せるな

明日の天気は入り日を見よ、家の跡取りは

二代子を見よ

あと見ず観音

跡見ずそはか

一度見ぬ馬鹿、二度見る馬鹿

色を見てあくをさせ

上見るより下見て暮らせ

上見れば際限がない

叔父見りや荷が重い

親見て子貰え

親を見て子を知る

女と山菜は見置きするな

女に白歯見せるな

かくまとどんの首は見たことがない

寒のうちの長雨は夢にも見るな

聞いて千金、見て一文

食うたら喰うた目を見せよ

子は親の肩を見て育つ

子は親の見習いする

こみつな男に青菜見せるな

財布の底と心の底は人に見せるな

座頭の小便向こう見ず

島が近く見えれば雨が降る

姑の十七、見たことない

身上見るより俵見い

死んだ先を見たもんじゃない

鳶も物を見ねば廻らん

泥鰌穴見つけた気になって

どんのくびと柄漕は見たことがない

泣く子も鍋のはた見て泣け

投げどこへ投げたら落ちどこ見んな

猫もらうなら親猫見てもらえ

話半分、見て三つ一

春は沖見れ、秋は山見れ

人の事いわば座敷三度見てものいえ

人の身上と着物の裏見た人はいない

人の提灯で明かり見る

人を見たら泥棒と思え、火を見たら火事と思え

吹かなくても寒風、見なくても姑の目

下手の大功の仕上げを見やれ

坊主の髪と化け物は見たことがない

水見半作

見たと舐めたは大違い

身と仏は見れば尊い

見るは法楽、買うは道楽

見るもん乞食

見れば目の毒

昔なじみと蹴躓いた石は、憎いながらも後

を見る

娘を見るより母を見よ

目に見ちゃ憎うない、身上のためにようもない

もの見ぬ先の胸勘定

山が近くに見えるると雨

山の入り日は馬鹿が見る

山の見落しは付きもの

嫁を貰はば親を見て貰え

昔

昔の歌は流行らん

昔の南京焼で固い

昔とった杵づか

昔なじみと蹴躓いた石は、憎いながらも後

を見る

昔のなにがしより今の金貸し

昔話

秋ごと昔の正月ばなし

節季ナインズの春ムカシ

年寄りの昔話

年寄りの昔語り

麦

稲は土で作れ、麦は肥えて作れ

小麦倒しにみみが出る

しゅうとめと麦は踏んだほどよい

彼岸過ぎての麦の肥え、三十過ぎての親の意見

彼岸過ぎての麦の肥え、土用過ぎての稲の肥え

麦飯にとろろ汁

麦の帷子、菜のぬのこ

麦めしと他身は食うときだけ

婿

朝のてつかり婿泣かせ

粉糠三升あれば婿に行くな

苗代時の婿泣かせ

苗代時には一人婿が逃げる

苗代押しは一人婿が逃げる

婿三代続けば身代残す

婿取り子は三文安い

婿取り三代身上

婿は座敷からもらえ、嫁は二ヤからもらえ

婿は座敷から嫁は台所から

娘一人に婿七人

娘婿の可愛いのと向こう脛の痛いのは我慢

がならない

嫁は二ヤから貰え、婿は座敷から貰え

虫

サシ虫は俵編んで待て

黙り虫壁を破る

盆の雨は虫になる

虫ざしは俵 吠編んで待つていろ

寒九の雨は虫になる

飯

赤飯に豆腐汁

有る時の米の飯

いいめしまめだが、節句のマンマ

イカ場夕飯

一香、二花、三茶、四飯

一升飯炊くな

いつも月夜と米の飯

お天とう様と三度の飯はついてまわる

女と米の飯は白いほどよい

可愛い子に他人の飯を食わせろ

米作り飯になるまで水加減

木挽きの一升飯

在郷の大飯食い
白飯に豆腐汁

他人の飯にや骨がある

天道様と米の飯は付いて廻る

菜汁と米の飯で不足を言うな

二十五の朝飯前までふとる

猫にマタタビ泣く子にかんぞう、おじに

ひや飯当り前

早飯早糞出世のもと
早飯も芸の内

春の日は夕飯食つて三里時け

人の飯は身の葉

人目良しのおから飯

ぶっかけ飯は食うな

まんまは大將、仕事は少將

麦飯にとろろ汁

飯粒で鯛釣る

飯を食つて寝ると牛になる

飯の上の蠅追うよう

吉井の米の飯に芋煮物

飯と言つたら火事より急げ

一合雑炊に二合粥、三合かて飯に四合団子、

五合おこわに六合餅

なやの百くら飯

餅

あぐね餅搗いた

飴で餅食うか、おばさと寝るか

あんころ餅の綱渡り

あんころ餅に砂糖つけた

意見と餅はつくほど練れがよい

一合雑炊、二合粥、三合飯、四合団子、五合餅

亥の子の餅は石で搗け

亥の子餅と有卦の餅は外へ出すな

かた餅にきなこ

九日餅は搗くな

げすの成り上がりは餅の皮をむいて食う

乞食の餅焼き

三月節句は毒餅、九月節句は福餅

十五夜の餅、喰わんうちは作ほめん

団子なすきの餅ねむり

二十九日は苦の餅、大年餅は搗かん

八十八のよね餅

フクが餅はフクが好き好き

もち米倒しのつき盗人

餅の中から屋根石

餅の中の粉

餅は乞食に焼かせろ、魚は殿様に焼かせろ

餅腹三日

もん日には餅もん

焼き餅は焼きかげん

矢田の焼き餅

もっこ

あんころ餅より心持ち

おだてともっこには馬鹿が乗る

かたもっこ

かたもっこ担ぐ

でっこいどこのモッコ持ち

物言い

言いたい事はあした言え

人言われが人を言い

ひとこと言えばふたこと返す

丸い卵も切りようで四角、ものも言いよう

で角がたつ

もの言わずのもの言い

寄り合い欠かすな、もの言うな

理屈はほつべたにも付く

理屈と入口はどうにもなる

宿

笠のしずくも宿の得

乞食の宿はしても、子守の宿はするな

主の宿しても子持ちの宿しんな

宿、味噌、木損、嬬手間損

宿、味噌、木損、嬬使われ損

盗人の宿はあつても子持ちの宿はない

泥棒に宿貸しても、守り子に宿貸しするな

病

一に看病二に薬
一病長寿

仕事は薬、だお者の病氣
荷物と病は軽いほど良い
ノツタリ病人、結構病人
人は病の器

病氣と空荷は軽いほど良い
持つたが病、根にある持病
病は氣から膾なまは酔なまから
病み上手の死に下手
病み上手の死に上手
病め医者、死ぬ坊主

夕立

七夕立あれば上作
土用七夕立は上作
馬鹿と夕立は妻有の方から来る
八海夕立の古志日照り
広瀬夕立の古志日照り
東夕立、雨持たず

雪

打ち豆汁と雪道は後あとほど良い
大雪は豊作の前兆
大雪小雪ダラク荒れ

大雪に不作なし

女の節句が来るので雪が降る

春日のしゃぎりしゃぎりで雪つかい

寒中の雪は百日目に大荒れ

寒中の雪、大雪のもと

寒中の雪は海の潮が速くなる

四十女と春降る雪は固そうとけやすい

師走の八日吹雪

大師講の跡隠し雪

茶の花下向く年は大雪

年寄りの達者と春の雪

南天の実多ければ雪多し

鋸山の笠雪は大雪

鋸山の蓑雪は小雪

春の雪と女の腕うでまくり

彼岸の海苔雪

夫婦喧嘩と春の雪

藤が伸びると来年は雪

娘と春の雪は固いようとけやすい

弥彦山の雪が無くなると父ととの財布も空になる

雪おろし雷

雪少なければ干害あり

雪と欲は積るほど道みちを忘れる

雪の上の糞あつば

雪の根も涅槃ねはんまで

雪の降つた次の日は裸者の洗濯

雪の喧嘩も消えるまで

雪はネハンまで

雪道と鯨汁はあとほどよい

余寒別れの吹雪

夢

馬、蛇の夢は良い、栗の夢は悪い
奥歯の抜けた夢は不吉

寒のうちの長雨は夢にも見るな

二日の正夢、三日に語れ

幼児

赤子は七面鳥

赤子の指から乳が出る

赤子泣き泣き育つ

赤ん坊の後さがり

泣く子に乳

七月子は投げてななつきも育つ

七月子は育つが八月子は育たぬななつき

よだれを出す子丈夫

欲

雪と欲は積るほど道みちを忘れる

欲する鷹は爪を削る

欲で目を失う

嫁

秋の田の水嫁に飲ませるな

秋の山嫁に見せるな

秋山へ嫁やるな

朝日のチャツカリ、嫁のニツカリ

朝照り、嫁泣かせ

朝日のチャカチャカと貧乏者の嫁取り長持

ちない

新しいセナコテは嫁に着せ

お湯の寿命は水となる、嫁の寿命はばあ

となる

柴切ったあとは嫁に拾わせるな

ゼンマイ山には嫁をやれ、コゴミ山へは娘

をやれ

近くに嫁ぐ人は七つの徳をもっている

鳥も止まり時、嫁も行き時

夏の火は嫁に焚かせんな

憎い嫁から可愛い孫

バラは嫁に取らせ

冬の火は嫁に焚かせよ

豆の中打ち、嫁にさせろ

婿は座敷からもらえ、嫁はニヤからもらえ

婿は座敷から嫁は台所から

嫁と雪隠せんかんは遠いほどよい

嫁に行った晩でどうにでもなる

嫁の三日ほめ、奉公人の後ほめ

嫁の辞儀はおばになる、湯の辞儀は水になる

嫁はニヤから貰え、婿は座敷から貰え

嫁は目下からもらえ

嫁は台所の隅からとれ

嫁を貰はば親を見て貰え

若嫁の強口こわごうは出るもとだ

雑炊の焦げる臭いのする所へ嫁くれるな

雑炊の焦げつきは嫁に、お粥の焦げつきは

娘にくれる

粟糠と嫁の難、たち止まね

なぎおもたか娘の草だ、えごえずぐも嫁取

る草だ

スケトウの嫁入り

嫁姑

柿の皮は嫁に、梨の皮は姑に

姑より利口な嫁は姑苦労する

嫁は姑に似る

嫁は姑の使いがら

嫁に食わずな

秋かます嫁に食わずな

秋鯖嫁に食わせるな

秋タナゴ嫁に食わずな

秋菜嫁に食わずな

秋茄子嫁に食わずな

秋蒞嫁に食わずな

四月のアブラメ嫁に食わせるな

四月とうびる嫁に食わずな

五月わらびは嫁に食わせるな

五月のヒルノトウは嫁に食わずな

五月鯖、嫁に食わずな

サンマ嫁に食わずな

雑炊ぞうせのこびつき嫁に食わせんな

七月わらび嫁に食わずな

焼きぼた餅は嫁に食わずな

利口

姑より利口な嫁は姑苦労する

死んだ子は利口

泣く子は利口

しゃべらぬほど利巧なことはない

馬鹿のまねする利口もん、利口のまねする

馬鹿もん

利口は馬鹿の使いもん

利口は鈍にあたる

利巧な子より馬鹿な子ほど可愛い

漁師

イカ場夕飯

女は産にこりず、漁師は海にこりず

大漁不漁は三年周期

漁師のいつとき喰い

漁師根性目の先ばかり、明日の鯛より今日

の雑魚

漁師と親の敵かたきは会ったときに笠をぬげ

漁師の先走り

礼

置き酌失礼持たぬが不調法
近い仲にも礼儀
礼も過ぎれば無礼になる

草鞋

車に乗る人、乗せる人、そのまた草鞋を作る人
そうれん草鞋わらじのよう
栃堀下駄げたの塩谷草鞋わらじ
一つめ増しは金かねの草鞋で探せ
一つめ増しと七つ違いは金の草鞋で探せ
仲人は草鞋八足
草鞋づくりでも本職にや構うな

解説

地域の
ことわざ
について

板垣
俊一

一 庶民生活史の証言

昔話、伝説、俚諺、謎、言葉遊び、方言、そして民謡などは、庶民の生活における文字に頼らない口承の言語文化であった。とりわけ俚諺すなわち諺は、世代から世代へと生活の知恵を伝達する大切な手段だった。

たたかれた者が目が寝れても、たたいた者の目は寝れん

夫は妻と母の橋渡し

仕事は薬、だお者の病氣

*「だお者」は、怠け者。

田畑荒らしても子は荒らすな

杖を頼つても人を頼るな

猫追うより魚片付け

鳩が憎うて豆まかん

百姓は山と生きる

例としてあげたこれらの諺に対しては、高等教育を受けた現代人でも、「なるほど。いかにも言い得たり」と感服するのではないだろうか。その背後には、多くの先人たちの人生経験が積み重なっている。そうした先人たちの経験に裏付けられた真実が、きわめて端的かつ印象深い言葉で表現されているのが諺の魅力である。しかも、面と向かってされる直接の教訓よりも、誰が言うともなく伝承されてきた昔からの真理として、人々が抵抗無く受け入れることができるところにまたその社会的有用性があつた。

また、きわめて具体的な事柄を対象としているのも、庶民の生活の中に育まれてきた諺の特徴である。風や雨といった気象に関する諺が多いこと、田や水といった農業に関する諺が多いこと、日本人にとって特別の食べ物である餅や米飯など食生活に関する諺が多いこと、親子や婚姻そしてまた嫁・婿・姑といった家族に関する諺が多いこと、金や身しんぎょう上など暮らし向きに関する諺が多いことなど、とりわけ地方の諺には生活と密接な関係を持った例が多くある。しかもそれらの中には、生

活が豊かになった今日、すでに忘れ去られようとしている昔の質素な生活を思わせるものが少なからずある。例えば、村上市には「おお菜食さいじきの身上壞くわいし」という諺がある。野菜を多く食べる者は家計を破綻させるという意味である。米は自前みづかみでなんとかなるが、おかずは購入しなければならぬから費用がかかる。だから沢山食さわさんじきつてはならない、という戒めだという（『村上市史・民俗編』下巻 1990）。また、「一合雑炊に二合粥、三合かて飯に四合団子、五合おこわに六合餅」などという諺も各地にある。これは、それぞれの調理法における米の必要量の比率を言ったものだが、全体の意味としては米を節約するための目安なのだという（亀田郷土地改良区発行『亀田郷の昔語り』1998）。米が余っている今日ではもはや通用しないことだが、しかし昔そのような時代があったことを心に浸みて思わせる諺ではないだろうか。庶民の生活の歴史的現場から出た言葉といえるだろう。諺は、じつに庶民の生活史の貴重な証言でもあったのである。

二 相対的真理

折口信夫は古代における「ことわざ」の原義について、「わざ」とは神に関わる言葉であり、神事を行なうときの唱え言の一部分を起源とする「言ひ慣はし」だったとし、それには、これこれこういう事をしなければならぬ、或いはしてはならないという二種のほかに、どういうわけだか分からないが伝えなければならぬと感じる詞があつて、都合三種類のものがあつたと説いた（『伝承文芸論』1935、中央公論社版全集第一七巻、P.166）。その原義において、古代の諺が唱えられることで威力を発揮する神事の詞であつたとすれば、「どういふわけだか分からないが、伝えなければならぬ」と感じる詞の存在も納得されるが、今日の諺にはそういった性格はない。前二者の、何々を為さなければならぬ、或いはしてはならないという諺は今日でもあるが、それにとどまらずむしろ単に言語遊戯的なものから、常識や知識、はては世態人情を鋭くうがった警句的表現の諺が多い。そしてそこにあらわれる全体的な特徴は、いずれも何らかの気の利いた表現を持つことである。それゆえ、「ことわざ」の今日的な意味としては、藤井乙男著『諺の研究』（1929）に言うように、「為業しわざに対する言葉ことわざにして、イヒグサといふ程の義と見ゆ」（P.11）とするのが妥当なところであろう。「言ひ慣はし」というよりも「言ひぐさ」、すなわち言葉の表現がまず第一義的なのである。「わざ」は、そのまま通俗的に「技」すなわち言葉の工夫と解したほうが後世の諺の場

合は当たつていふと思う。

諺の多くは実際の生活の中から生まれた知恵や知識を、語調を調べて短く表現した成句である。日常生活に於けるある一面の真理をレトリックを使つて修辭的に言い表したものだと言つてもよい。「一面の真理」といつたのは、例えば「千の倉より子は宝」に対して「子は三界の首枷」とか、「芸は身を助ける」に対して「芸は身の仇」といつた例があるように全く逆の諺もあるからだ、いずれにしても特定の場面においては真理となるからである。「大は小を兼ねる」とは一般的に言う諺であるが、また逆に「しゃもじは耳かきにならぬ」とか「タンスは枕のかわりにならぬ」といふ諺もある。「急がば廻れ」は、目さきの判断だけで行なう短絡的行動が失敗を招き、かえつて事の急に間に合わなくなることに對する戒めとして貴重な諺であり、真理をついでいる側面がある。しかし、だからと言つてわざわざ大回りして現場に駆けつける救急車もないだろう。また、「善は急げ」ともいうが、これにもまたまったく逆に「急いで事はし損ずる」といふ諺がある。総じて諺は、觀念的に真理をとらえたものではなく、人々の実際の経験の中から生まれたものであるから、経験の多様さに従つて相対的真理となつていふのである。それはたしかに「事の一面を觀て、之を誇大に評説するの傾向」(藤井乙男著『諺の研究』P.208)無しとしないが、ある文脈、ある具体的な場面で効果を發揮するものなのである。だから諺自身が「人を見て法を説く」とか「機によりて法を説く」(『毛吹草』)といつていふように、時と場合に應じて當てはまる真理にほかならない。一人の人間の気持ちも状況によつて変わるものであることは「孫は来てよし、行つてよし」といつた例に見ることが出来る。諺そのものについても「譬諭と牛の轍しごひとは弛れさふでも弛れぬ」(『譬諭尽』)という諺まであるくらいである。前掲の、古代の諺に関する折口信夫の説では、諺の言葉そのものに重い価値があつたのだというが、それに比べて後世の諺はそれが引用される限られた場面との絶妙な關係において意味を持つ相対的な真理なのだといふことができるだろう。

本書で扱う諺は新潟県内で採集されたものを中心としていふ。一面においてこれらの諺は、文字とはあまり縁の無かつた先人が、その経験にもとづいて悟つた日常の真理を、共有の財産として次世代に伝えて行こうとしたことによつて生まれた口承の金言であるとも言える。耳ざわりが良く、また簡潔な文句によつて記憶を容易にしているため、民衆の中に広がりやすく、みんなの知恵となるようにできている。学校で体系的に知識を深める機会に恵まれなかつた庶民にとっては、耳から

自然と学ぶ先人の知恵であった。

三 表現方法から見た諺の識別

周知のように「詩を作るより田を作れ」という諺がある。いかにも生活に追われていた庶民の思いが感じられる諺であり、飯の種にならない文学や人文系の学問よりも実学を重んじる新潟県にぴったりの諺だが、この諺自体が文学だと気づいている人はそう多くないと思う。表現に修辭的な工夫がこらされている言葉⁽¹⁾を詩という。この諺はまず七音と五音を組み合わせた短歌・俳句などに通じる七五調となっていること、また「詩をつくる」と「田をつくる」とを重ねて対句(重句)表現にしていることなど、これを民衆の文学と言わずに何というだろうか。諺は民衆の口承による文学であったのである。

採集されたものの中には、諺に数えるべきかどうか紛らわしい表現もあるが、このような点を基準にすれば、諺とそうでないものとを分けることができるだろう。例えば、次のような表現がある。

(1) 天候や健康などに関する民俗知識や俗信

カマキリの巢が高いと大雪になる

山が近くに見えると雨

カモメが里近く来て鳴けば荒れる

ツバメ早く来ると豊作

ザルを被ると背が伸びない

子どもが火いたずらすると寝小便たれる

タニシを食べると水あたりしない

茗荷を食べると物忘れがひどくなる

などで、特に天候に関する民俗知識が多く、表現の面から見ればいずれも散文的で語呂が悪い。この類のものには、「ホソビキ雨が三本続けば土手切れる」⁽¹⁾や「新潟のドンがよく聞こえると雨になる」⁽²⁾(いずれも『豊栄市史』より)など、地域の生活

実感に裏付けられたものもあって、庶民生活史からみれば捨てがたいが、表現に工夫のないものは厳密に言えば諺とは見なし難い。例えば、何々山に雲が掛かったら雨になる、というただの民俗知識であっても、「善峯^{よしみね}へ雲がかくると、盛の娘持た父母とは油断がならぬ」(『譬喩尽』)などと表現されていれば、そこには比較や比喩の工夫がなされているから諺と認めうるだろう。

(2) 禁忌

友引に葬式を出すな

茶碗に盛った飯に箸を二本立ててはならぬ

物差しを使わず手やごさの目で布を測つてはいけない

一枚の着物を同時に数人で縫つてはいけない

水に湯を差してうめてはいけない

など、葬礼に関係した禁忌を表わす句も昔からの言い慣わしではあるが、文学的表現の工夫がなされていない点で諺からは除くべきだろう。

(3) 比喩表現

そうれん泣きのよう

落城のあとのようだ

乞食が米をこぼしたようだ

砂糖屋の前を走ったよう

犬子^{いんご}が酒に酔ったよう

など、単なる比喩表現も諺に数えるべきかどうか判断に迷うところだが、比喩が文学的表現の特徴の一つであることを考えれば、諺に入れるのが良い。

注

(1)「ホソビキ雨が三本続けば土手切れる」には、諺の一つの特徴である誇張表現があるので、本書では一応採録した。また、「四つ晴れに傘を預ける馬鹿もある」などは俳句形式の五七五音からなっているのでこれも諺表現とした。

(2)この類の天気予測は「汽車の汽笛が良く聞こえたと雨」など、近代になって鉄道が開通するとともに多くの地方で言われた。

四 地方の諺

地方の諺には、場合によってはその地でなければ通じない内容のものがある。例をあげれば次のような諺である。

- ① 浦瀬女に桂男（長岡）
- ② 鍛冶町衆の長評定（村上）
- ③ 上ざいこの着倒れ、下ざいこの食い倒れ（寺泊）
- ④ 八海頭巾は晴れたこととはない（山古志村）
- ⑤ 米山の笠雲、弥彦の胴雲（長岡）
- ⑥ 水神様過ぎれば鍋の中のおもも逃げる（村上）
- ⑦ 栃堀下駄けたの塩谷草鞋わらじ（栃尾）
- ⑧ 西谷袖なしの塩谷前掛け（栃尾）
- ⑨ 宮下ぐつの富島炬燵、亀貝仙石緒の小曾根縄（長岡）
- ⑩ 古渡路じんべの四日市深靴（村上）

このうち「浦瀬女に桂男」は各地に良くある「東男に京女」型を借りた地方版の類型表現である。②は村上の例であるが、『村上市史・民俗編』（下巻）によれば、これは歴史的な事実に基づいて出来た諺だという。和釘を作って生計を立てていた村上の鍛冶職人たちが、明治二十年代に洋釘が入ってきたとき、その対策を協議したがなかなかまとまらなかったという話から出た諺だという。これも、よく知られた「小田原評定」の地方版である。このように、全国的に知られた諺の地方的言い換

えが地方の諺の一つの特徴となっている。しかしその地に暮らす人々でなければ生活実感として受け取ることができないものも多い。③なども全国版の類型表現を借りてはいるが、土地の人でなければまったく分からない諺である。ちなみに⑦⑩は土地の風俗の特徴や特産品を表わす諺である。

全体的に見れば、地方性を濃く持った諺はそれほど多くはない。地方に流通している諺もその多くは全国的に使われている諺である。剣持隼一郎によれば、新潟県の諺の七割ほどは全国で用いられている一般的な諺を借りたもので、残り三割程度がその地方化されたもの、あるいは地方発生のものであろうという(「ことわざお国めぐり」3 新潟の巻『言語生活』1978 No.318)。数えたわけではないが、ほぼ妥当なところであろう。

新潟県で難解な諺が多い地域は佐渡である。それだけまた佐渡からは地域的な諺が多く採集されているということでもある。芸能の島らしい諺も生きていた。「打つも舞うも一人です」とは能楽を好む佐渡の人々にぴったりの諺である。また「言わば語らば浄瑠璃平家」も文弥節や説経節といった芸能が盛んな土地だったからこそ通用する諺である。とくに、四方を海に囲まれた佐渡では、漁撈に関する諺や漁撈を比喻とした諺が多く見られる。次に相川の諺をあげてみよう。

雨イカ、照りバンシヨウ

四月のアブラメ嫁に喰わせるな

こうぐりなます脛すねで酒三升

漁師のいつとき喰い

やそべい地藏がイカ場へ行く

イカ場夕飯

正月十一日の夜は女に髪結わせぬ

舟の絵の手拭いを沖で被るな

漁師根性目の先ばかり、明日の鯛より今日の雑魚

大船浮かぶと小舟も浮かぶ

魚ごころあれば網心

人取り蛸が人に捕られる

沖にも出ず、磯にもつかず

鯨場の石

越後側では漁撈に関する諺はそれほど多くない。多いのは農村生活に関する諺である。

地方的な特徴をもう一点あげるならば、諺の中には尾籠・卑猥な例があることである。例えば、そうした諺を比較的に集めているものに六日町の貝瀬幸咲編『城内郷土誌』(1959)がある。

犬子が大糞に向かったよう

大崎女の乳を握ったか、八色原で野糞をこいたか

手前の雪隠にばかり糞こいてて

など、糞尿をとり入れた尾籠なものや、次のように卑猥な内容を含むものもある。

牽丸が上がったり下がったり

小男の大まら

貧乏寺の香つき杵きね

駒のまらの内ぼたき

など、村落の人々の諺には、このようなかなり野卑なものも見られる。

五 諺の分類

諺の内容は、人生や生活全般にわたっているから、これを分類整理することは容易でない。例えば、水沢謙一編『富曾亀民俗誌——富曾亀郷土誌(上)——』では次のように分類整理している。

- 1 農業
- 2 天候
- 3 年中行事
- 4 産育
- 5 婚姻
- 6 家庭
- 7 葬送
- 8 住居
- 9 食習
- 10 服飾

11 神 12 話 13 馬鹿 14 金 15 人生一般

また、相川町史編纂委員会編『佐渡 相川の歴史・資料集九』では次のように分類している。

- 1 時候・気象・日時
- 2 地理
- 3 信仰・神宮・僧侶
- 4 親子・家族・嫁姑・親類
- 5 男女
- 6 衣食住・くらし
- 7 身体・疾病・死生
- 8 職業・技芸
- 9 社交・倫理
- 10 言行・習慣・年中行事・勤労
- 11 動植物
- 12 比喩・形容

これらは一般に思い付く分類の方法ではあるが、実際に当てはめてみるといずれも不満が残る。筆者も次のような内容上の分類案を立ててみたが、項目が増えるばかりで分類の意味はあまりないと言うべきだろう。

言語 言語

世事 神仏信仰

俗信

節日・行事 禁忌 禍福 道理 世事一般

世態 地域性 世態一般

自然 気象

仕事 農事 漁撈 勤労 職業 技芸 商売

生活 金銭 家計・経済 衣食住

身体 健康 身体

人生 生死 男女 婚姻・夫婦 産育

家族 嫁姑 親子 家族・親類

社交 人間関係 交際 礼儀作法

性向 賢愚 傾向 性格 性癖

その他 水火 比喩・形容

つまり、これだけさまざまな内容の諺があるということでもある。そこで、もっと抽象的に次のような分類案を考えてみた。諺の内容ではなく、それが持つ性格による分類であり、これによって諺の特徴が少しは明確になるだろう。

教訓 … 馬鹿、社交・倫理などを含む

例 一度見ぬ馬鹿二度見る馬鹿 辛抱する木に金がる

訓戒 … 禁止・勸奨によるもの

例 一杯茶は出すな 芋種盗んでも子種盗むな

知恵 … 気象・農事、民俗知識など

例 朝雨に笠いらす 稲は土で作れ麦は肥えて作れ

禁忌 … 葬礼習俗との関係によるタブーが多い

例 あら縄は帯にするな 夜爪を切ると親の死に目に会えない

道理

例 合わせものは離れもの 一文銭は鳴らぬ

世態傾向

例 器用の者ほどのめしこき 年寄りの昔語り

比喩・形容

例 笹ささで水汲む 鼠穴に水注ぐようだ

穿ち … 言い得て妙といった表現

例 床屋のぼうぼう頭 盗人の戸締まり

六 諺の衰退

ところで、生活の変化から今では昔の農・漁村の風俗・習慣がほとんど消滅した。それゆえ地方特有の諺であればあるは

どその意味が分からなくなったものが多い。単なる国語的知識ではなく、生活の中の生きた言葉だから、使われなくなってしまうえば忘れ去られてしまう。今日すでに忘れ去られた諺はたくさんある。諺が生き延びてきたひとつの例としては、たとえば「砂糖屋の前素通り」「二三条市」という諺が、「砂糖屋の前を汽車で通ったようだ」とか、「砂糖屋の前を飛行機で通ったようだ」というように時代に合わせて変化していることがあげられるだろう。

上越の諺として次のような例が収集されている。

① 強いものマッカーサーとオッカーサー

② 主婦は家庭の太陽

③ 信用は無限の資本なり

④ 老人は心の通う知恵袋

諺の歴史から見れば新しいものであり、②③④などは諺というより標語である。②は昔の「家の身上は嬢しんしょうが持つ」などの諺の現代版であり、③は「金を積むより信用を積み」の現代版であり、④は「イカの甲より年の功」などの現代版である。しかしこのような新しい諺が生まれたとしても、もはやそれが世間に流布し口頭伝承となつて庶民の智慧の主要な貯蔵庫となることはなくなつた。現代人は諺以外のさまざまな情報によって知識を得ることができるようになつたからである。

諺はもともと文字と縁の薄かつた話し言葉の世界だから口頭で伝えられてゆくことを前提としてゐる。近代以前、それは文字を知らない人々にも理解可能な知恵や知識の表現だつた。だから近代になつて、特に学校教育による文字の時代になると諺はすたれた。学校で教わるのは出典の正しい故事成語であり、経験に裏付けられた地域の素朴な諺ではない。文字によらないで世間に流行る言葉が消え去つたわけではないが、現代はマスメディアによる流行語の時代であり、永続的な生活の真理を表わす言葉というよりも、時代の気分を表わすその場かぎりのものが一般的となつた。しかも、人々の生活も画一化してしまつたから地方性も薄れた。そのうえ流行語は一時的に大衆の心を捉えた後では捨てられる言葉である。

七 諺表現の特徴

五音、七音による語調の良さ、あるいは上句と下句の対比や並列関係の工夫、また掛詞や縁語を用いた表現など、諺は人口に膾炙しやすい形式をとっているのが大きな特徴である。俗語ではあるが、このように詩的・和歌的な表現形式をとっている諺は、江戸時代の俳諧師によって、俳句の素材としても注目されてきた。例えば小林一茶に、

蝙蝠や鳥なき里の飯時分

という句がある。これは言うまでもなく「鳥なき里の蝙蝠」という諺を詠み込んだ句である。さかのぼって江戸時代初期の『毛吹草』（一六三八年序）という俳句の参考書では、句作りの参考資料として当時の諺を意識的に集めている。

「鬼も十八、番茶も出ばな」という諺をひとひねりすれば、

鬼百合もいま十八か花ざかり 『毛吹草』

という俳句になり、

「提灯に釣り鐘」という諺をひとひねりすれば、

提灯かつりがね草にとぶ蛩 『毛吹草』

という俳句になる。

諺は、俗耳に入りやすいように自然と言語表現の工夫がなされてきた。言葉に工夫を加えて人の心を動かす表現は詩すなわち文学である。この点で、諺の表現は詩歌の表現ときわめて近い。よって、その特徴を考える場合も詩歌の表現を参考にすることができよう。

諺の表現について形式面からの確に分類しているのは、かなり古い文献ではあるが、熊代彦太郎著『俚諺辞典』（金港堂1906）に載る解説の「俚諺論」である。これによって諺表現の特徴を述べてみたい。

熊代は諺の表現形式を次の十一項に分類している。（引例は筆者が適当に削除した。）

1 比喩

例 身から出た錆 乞食が米をこぼしたようだ たまごに目鼻

2 諷諭……比喩的表現でたくみに人事・世態の真実をほのめかしたものの。

例 蓼食う虫も好き好き 家柄より芋幹 名の無い星は宵から出る

3 対比……反対のことを並べ、その対比によって意味を強めるもの。

例 爪で拾つて箕でこぼす 上げる子より下げる子がめいこい

4 擬人法

例 団栗の背くらべ 馬は馬づれ牛は牛づれ

5 頭韻……頭韻というよりは最初の語句を繰り返して調子をよくしたものの。

例 念には念を入れよ 借りて借り得貸して貸し損

6 脚韻……末尾の語句の繰り返し。

例 弱り目に祟り目 これも一生あれも一生 上戸毒知らず下戸薬知らず 朝げのチャツカリ姑のニツカリ

女は産にこりず漁師は海にこりず 見るは法楽買うは道楽 破れかぶりの頬かぶり 当たり前の肥やし米

7 律語……五音、七音などの音数をもつもの。

例 善は急げ(五音) 挨拶は時の氏神(五音・七音) 愛想つかしは金から起る(七音・七音)

8 漸層法……次第に数を重ねてゆくもの。

例 一に養生二に薬 一合雑炊二合粥三合飯四合団子五合餅

9 具体的表出法……具体的な数値で表現するもの。

例 三人よれば文殊の知恵 お客三杯亭主八杯 お祖母さん子は三百安い

10 誇張法

例 家を売れば釘の値段 一日遅れの千日遅れ 小姑一人鬼千匹

11 警句法……奇抜で簡潔な表現。

例 急がば廻れ 一病長寿 大金より小金取れ

私見に依ればこれらの分類はさらに整理できるだろう。例えば〈比喻〉のほかには立っている〈諷諭〉と〈擬人法〉はやはり比喩の一種であり、漸層法・具体的表出法は〈教値法〉としてまとめ得るだろうし、〈頭韻〉〈脚韻〉〈律語〉はリズムであり、〈警句法〉は熊代自身が「俚諺この修辭法を用ゐること多し」といつているように、形式的な表現技法の一種というよりも諺の本質にかかわる性格である。警句法の例としてあげている「急がば廻れ」や「負くるは勝ち」「大欲は無欲」「損して得とれ」「言わぬは言うにまさる」などは逆説であり、〈対比的な側面もあるが、むしろこれを〈逆説〉という一つの項目に分類することができるだろう。また、対比表現のなかにはさらに次のような類型がある。

a ○○より△△型の比較表現

家柄より鍬柄

花の下より鼻の下

生んだ子より育ての子

大金より小金取れ

b 並列表現(かけ離れたものと同じ条件でつなぐもの)

女と塩した物はすたりが無い

女と山菜は見置きするな

c 語呂合わせ

石車に乗っても口車に乗るな

遠くて近いは男女の道近くて遠いは在郷の道

彼岸過ぎての麦の肥え三十過ぎての親の意見

以上のことから、筆者なりに整理すると次のような分類私案になる。

1 比喩

a 直喩

b 隱喩

c 諷喩

d 擬人法

2 対比

a 対比

b 比較

c 並列

d 語呂合わせ

3 数值法

a 漸層法

b 具体的表出法

4 誇張

5 逆説

6 掛詞

例 秋の日と根性良しはくれんようでくれる ひと事と小俵はいいやすい

天竺てんじくと柿じの軸じくほど違ちがう

7 禁止・命令

例 鯛料理に包丁使うな

秋茄子嫁に食わずな

粟は他人に間引かせろ

小豆は無精者に煮させろ

8 軽蔑

例 馬鹿の三杯汁⁽¹⁾ 青田ほめる馬鹿 我が子ほめる阿呆

9 リズム

a 頭韻

b 脚韻

c 律語

なお、諺によつては二つ以上の形式を兼ねるものもある。例えば「お客三杯亭主八杯」という短い諺の中には、客―亭主という対比、三杯・八杯という具体的表出法、そして…杯…杯という脚韻の三種が含まれている。

注

(1)「馬鹿」による表現は古くからあり、十六世紀後半の『北条氏直時代諺留』(藤井乙男『諺の研究』所収)に、「夜みち川だちば、かかする」とある。

八 古典と諺

最後に民衆教化や芝居・語り物と諺との関係を少し述べて結びとしたい。

藤井乙男は『諺の研究』(1929)のなかで、「諺はその辞、平易にして、その意、的確痛切なるを以て、古来明哲の士も、之に拠りて教訓を垂れ、蚩々^{しし}の民も、之を以て処世の法則とする一種軽便の宝典たり」(P.6)と述べ、日本では儒学の普及によつて学者知識人が『論語』『孟子』などの古典に載る金言を重視し、世俗の諺を「俚諺」と呼んで卑しんだが、実は「孔孟は好んで民間の鄙語を採用し、之によりて立言した」のであり、結局「世人が聖賢の格言なりとして尊奉するもの、なかばは俚

諺の孔子の口を借りて、再現せしものに過ぎざる「ものだ」と述べている。なるほどその通りで、次のような中国の聖賢の言葉は、民衆の諺としてもごく自然であろう。

「朽木は雕るべからず」(『論語』公冶長)

「時ならざるは食わず」(『論語』郷党)

「紫の朱を奪うを悪む」(『論語』陽貨)

「助け寡なきの至りは、親戚も之れに畔く」(『孟子』公孫丑)

「幽谷より出でて喬木に遷る」(『孟子』滕文公)

「食・色は性なり」(『孟子』告子)

また、『新約聖書』に見るキリストの教訓も当時の民衆の俚諺によるものが多く、「彼は此の如く諺の活用者たるとともに又其の製作者」(藤井、同)だったとする。今日、何気なく使っている「豚に真珠」という諺も、『新約聖書』の「マタイ伝」に「真珠を豚に投げてはならない」とある言葉であり、このほか「マタイ伝」からだけでも諺に近い次のようなイエスの言葉を見つかることができるだろう。

「山の上にある町は隠れることができない」

「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ」(日本聖書協会1994年新共同訳より)

とりわけキリストの場合は、教化する対象が民衆であったから、彼らの営む農業や牧畜の比喩を利用することについてその意義があつたと思われる。古代の聖賢は諺を發明したのではなく、民衆の間に一般に行なわれていた諺の形式を借りて新たな金言を創り出したとみて良からう。

諺を利用することは、自分の主張に説得力を持たせるために聖賢たちだけが行なつた特別な工夫ではなかった。少し気の利いた庶民の会話自体が慣用表現や諺をちりばめて成り立っていたことは、残されている膨大な諺そのものが証明している。民衆の認識は、まったく新たな個人的経験から生まれるよりも、すでに先人によつて経験され、言葉に表現されている認識の再認識としてなされる場合が多い。なぜなら個人的な認識を言語表現に託して理解してもらうことは難しいが、す

でに言語表現化された認識はその言語表現を使うことで容易に感銘を共有しうるからである。

論語や聖書に比べればかなり俗な話にはなるが、ここに民衆を聴衆とした語り物の例をあげてみよう。

越後瞽女の段物と呼ばれる語り物の中には、よく諺が出てくる。祭文松坂『佐倉宗五郎』の文句には、たとえば、

昔^{むかし}古人^{こじん}の 譬^{たと}えには

寒い時には汚いものとしてさらになし

腹^{はら}の空^すいたる その時は

不^ま味^ず物^{もの}なしの 道理^{道理}にて

わたしが夜^や食^{しょく}の 食^くへ残り

腰^{こし}抜け余^{あま}り酒^{さけ}でもおあがり

という箇所がある。この例では「寒い時には汚いものなし」とか「空腹にまずいものなし」といった諺を引いて文句を構成している。また、祭文松坂『八百屋お七』でも、「八分されても二分残る」とか「色の道には智恵がつく」といった諺の利用が見られる。聴衆はこうした諺によって自分たちとは縁遠い物語世界に対しても容易に登場人物との心情的な一体感を感じることができたのである。

また、民衆の認識が、言葉に表現されている認識の再認識としてなされる場合が多いということの、いっそうよい例としては、江戸時代の芝居における役者のせりふをあげることができる。芝居見物した民衆同士の間接的経験、つまり劇中の世界を見ることで擬似的に得た経験は、役者のせりふ、すなわち言語表現によって共有され、実生活上で同じような経験をしたとき、それが思い合わされるのである。そのような個人的な再認識は、せりふという言語表現によって容易に他者と共有され、語りがいのある経験となつて満足感を得ることができる。先人の貴重な経験を宿す諺が記憶されるように、芝居の言葉も人口に膾炙されてきたのは、そのような理由からだと考えられる。前掲の「言わば語らば浄瑠璃平家」という言いぐさも、物語的世界の共有を背景にしている。

江戸時代に最も人気であった浄瑠璃作品『仮名手本忠臣蔵』を例にとるならば、本書でも随所に引用した、天明七年

(1787) 成立の松葉軒東井編『譬喩尽』には、

「嘉肴ありといへども食せざれば其味ひを知らず」(大序)

「下地は好なり御意は吉」(同三段目)

「鷹は飢れど穂は啄まず」(同五段目)

…「鷹は死しても」

「五倍子喰たやうな侍顔」(同七段目)

「青海苔貰ふた代に太々神楽打」(同七段目)

…「青海苔貰ふた札に太々神楽を打つ」

「茶の花香より氣の花香」(同九段目)

…「茶屋の茶よりも氣の端香」

「蛙の子は蛙に成る」(同九段目)

「凝つては思案に能はず」(同九段目)

などの語句が収録されている。「嘉肴ありといへども食せざれば其味ひを知らず」とか、「凝つては思案に能はず」といった諺を芝居が利用して、観客との経験の共有をはかるとともに、「五倍子喰たやうな侍顔」とか「青海苔貰ふた代に太々神楽打やうなもの」といったせりふによる芝居の場面を観客が共有することで、それが諺同様の句として扱われるようになる。芝居は諺の再生や新たな諺を生み出す場ともなっていた。

新潟県の〈ことわざ〉

板垣俊一 編著

県立新潟女子短期大学 板垣研究室

2006年10月1日 印刷

2006年10月1日 発行

(限定30部)

